

教化研究

平成2年3月

第1号

浄土宗総合研究所

教化研究

平成2年3月

第1号

浄土宗総合研究所

まえがき

第六号まで発刊された「布教研究所報」（平成元年三月）が、平成元年四月一日付を以って発足した浄土宗総合研究所の布教研究部門に拡大組織化され「教化研究」の名で第一号が発刊されることになった。いうまでもなく、本宗は日本仏教界において「教化宗団」としてその雄を誇っているが、その中核は広義の「教化」にあることは当然である。従って、新組織における布教研究部の責務は至重であり、その研究成果報告は一宗が割目して待望するところである。

一概に「教化」といっても、その意味するところは広範多岐で、ある意味では教学も布教も法式も教育も芸術もすべて教化につながるものであり、むしろそれぞれの究極の目標が教化にあることは論ずるまでもない。幸いに、布教研究部が新鋭の陣容を以って、この大目的に向って二十一世紀の浄土宗教化の実を挙げられんことを望んで熄まない。

但し、布教は只に外に向っての宗義の宣揚のみでなく、その基盤は捲くまでも内に向っての研鑽修学であらねばならない。少なくとも「研究部」の名を冠する限り、こうした基礎的研究姿勢と人材育成を堅持すべきは当然であると同時に、並列の二研究部と相互連繫して切磋琢磨せられんことを切望する。第一号発刊を祝して、一言所感を述べた次第である。

三月三十一日

浄土宗総合研究所長 竹 中 信 常

目 次

まえがき……………	竹中 信常…………… 1
集中研究会指導講義……………	藤堂 俊章…………… 5
五重相伝について……………	
研究部員成果報告	
布教への試み―和歌の効用について……………	石割 顕昌…………… 32
「五重相伝会」を開筵して……………	長尾 隆道…………… 36
現代と布教―浄土宗東京教区青年会国際救援活動について……………	土屋 正道…………… 40
群発地震の中を知る「生苦」……………	山口 隆誠…………… 45
青少年と宗教教育……………	小田 芳隆…………… 49
自坊に於ける教化の試み……………	漆間 宣隆…………… 54
一在家仏教が今かかえる問題点―布教者としての立場から……………	阿部 信之…………… 61

高齢化社会における布教考察	田中	64
個に根ざした布教を求めて	細谷	68
生命倫理問題と仏教	藤木	73
宗教とニューメディア	水谷	77

教学布教大会意見発表

現代人に極楽をどう説くか(Ⅱ)	板垣	83
あとがき	隆寛	123
研究所布教研究部名簿		124

集中研究会指導講義

五重相伝について

大本山・善導寺

法主 藤 堂 俊 章

だいぶ前から五重について話をするようにとお話でしたが、五重のどんな話をしていいの
か迷うて迷うて、まだ迷うているんですけれども、とにかく五重に関係したお話をさせていただけ
かと思っております。

五重に限らず、一般布教にいたしましても、やはり「自信教人信」ということが一番中心にならな
ければならないと私は思います。与謝野晶子が、「やわ肌の熱き血潮に触れもみで さびしからずや道
を説く君」とうたっております。夫の鉄幹と結婚する前に歌った歌だろうと思われませんが、私たちは
これを異性のやわ肌と受け取らずに、如来様の熱き血潮に、阿彌陀様の熱き血潮に触れもしないで道
を説くということは寂しいことであり、苦しいことではなからうかと受け取っていきたいと思います。

私は、生まれは京都でございます。満一歳のときに和歌山県の田辺市へまいりました。小学校に行
かない前から衣を着せられまして、この紐を赤い紐にしてもらってお檀家へお参りしたら、「かわい

い、かわいい」と言ってくれました。今でもかわいい顔をしています（笑）。

そして、小学校へ行き出してからは、毎日のように早引きして帰ってきました。そして、寺の法事の手伝いです。そのころ、小僧さんが二人と、私のすぐ一つ違いの弟と、小僧さんみたいなのが四人おりました。それらがほとんど毎日のように早引きをして学校から戻って、お寺の法事を手伝いました。小学校六年のときに受け持ちの先生が父に、「こんなことをしておったら、中学校の試験を受けても通らんかもわからん。落第するかもしれん」と言われて、初めて六年生になってから早引きせずに学校にやってもらいました。

そして中学校へ入ったわけですけども、その小学校時代は、朝のお勤めは父がやっておりましたが、夕方のお勤めは小僧が交代でやる習わしでございました。本堂の前の広場で近所のわんぱく小僧と野球をやっているときに、途中で「お勤めを始めなさい」と言われるのが一番辛うございました。それでもお勤めを始めると、夕日で本堂の西の障子が真っ赤に染まってまいります。これは私が、今お勤めを始めたから、西方極楽の阿彌陀様のご光明をお照らしになっているのだ、と素直に西方極楽を信じておりました。

当時のお十夜法要をはじめとして、あらゆるお説教に見える方も、西方極楽のお説教でございました。それが中学校へ入ってニキビの数が增えるに従って、西方極楽が信じられんようになっていった。地球儀を見たのが悪かったのかな。日本から出発して西に行つて、どこにもお浄土がなかった。簡単なものです。これでもう西方極楽が信じられないようになりました。

そして、坊さんほどつまらん商売はないと、坊さんはやめようと決心したのが中学三年ころからだ
ったと思います。中学校四年のときに、当時の京都にあった第三高等学校を受けようというので、中
学校四年の十二月から翌一月の年末年始の冬休みに京都に行きまして、叔父の藤堂祐範の寺に置いて
もらって、京都の平安予備校に受験準備に通っていました。その正月の一日から、叔父の信重院とい
うお寺で、京都光明会青年部というのが発会されました。それで、叔父と叔母とが予備校を休んでお
別時に行けと言って誘われました。私は、「受験準備に来ているのだから」と言ってそのお別時を断っ
て予備校へ通っていたら、今日の私はなかったと思います。叔父の寺に厄介になっているのだから、
叔父や叔母の言うことを聞かなければなるまいと思つて予備校を休んでそのお別時に就いたのが、私
のそれからの長い一生を方向づけたわけでございます。

青年ばかりのお別時でした。一番後ろで木魚をたたいていたのが、五日間のうちにだんだん有難く
なって、一日一日、前へ前へと進んでいって、最後には第一線に座つて木魚のバイを二、三本折つた
記憶がございます。そしてそのときに、「お坊さんというものは大した使命が与えられておる。私は父
と祖父とで三代目で、仏飯をいただいて育ちながら、お坊さんをやめようと思つたのは大間違いであ
る。よし！私はこのお念仏によって、世のため人のためお役に立つお坊さんになろう」と決心したの
が、その中学校の四年生の終わりごろでした。

そして三高を受けましたが見事すべつて落ちまして、あと、中学校五年生に行きました。忘れもし
ません。私の中学校では、夏は全員が海で泳ぐんです。野球の選手とかテニスの選手とか剣道の選手

とか、そういう人はそれをやりますが、それ以外はみんな学校は海岸の前に建っていますから、その海岸に出て海で泳ぐわけですね。ある日、昼から講堂で講演会があることになっていました。

昼に寺へ帰ってごはんを食べて中学校に戻ってまいりますと、門のところ、門のところ、どうも今日の講演会の講師らしい一団が二、三人校門に入るのを見ました。そのころ、門を入れて左側に天皇・皇后両陛下の御真影の奉安殿というのがありまして、その当時はみんな最敬礼するか、男の生徒は挙手の礼をして入ったわけです。ところが、この講師らしい一団は、見ただけで頭も下げないで学校の玄関へ入っていきました。珍しい日本人がおるなと思っていいたら、やはり案の定、その中の一人がその日の講師でございました。

あとからわかったんですが、今の大本教の人でした。そして、敬神崇祖（神を敬い祖先を崇ぶ）という講演をしたわけですが、その中で仏教やキリスト教のことをこき下ろしました。入信して半年たつたかないかの燃え盛っておる血気盛りです。その講演が終わるなり、中学五年生ですから一番後ろのほうにおったのですが、講堂の壇の上に飛び上がりました。中学校の先生方はみんな私が坊さんということを知っていますから、坊さんの悪口を言ったから何かしゃべるに決まっていると思つて、「藤堂、何するんだ」と言うので、「今の講演に感想を述べさせてもらう」と言つたら、講師の先生が「さあ、どうぞ」と言つたんです。賛成演説だと思つたんですね。

生徒監督の柔道五段の緒方という先生が、「藤堂、簡単にやれ」と言つたので、「はい」と言つた。そのときに、忘れもしません、開口一番、土井晩翠の詩に、「祇園精舎の軒朽ちて、葎酒の香のみ高く

とも、セント・ソフィアの塔荒れて、福音俗に媚ぶるとも」といふ詩がありますが、その仏教はそうじゃないと言って、片手を挙げてしゃべりました。「この講師は敬神崇祖と言ったが、門を入ってくるときに御真影奉安殿に向けておじぎをしなかった。これでも敬神崇祖か」とやった。そうしたら講師の先生がプリプリ怒って、隣の校長室へ引き上げていきました。胸がスツとしました(笑)。そして泳ぎに浜へ出かけると、中学校の小使いさんが、「5年C組の藤堂さーん」と呼ぶから、「何だ」と言うのと、「教頭先生が呼んでいる」と言う。森という数学の先生でしたが、この先生にこっぴどくしかられました。「学校が礼を尽して招聘し、講演のあとで校長が丁寧な謝辞を述べたあとで、おまえが出ていって今日の講演会をムチャクチャにしてみました。本来ならば何か処分しなければいけないところだが、その意気や誠に壮たるものがあるから、それに免じて許してやる」と言って、処罰されるのを免れたわけです。そういうことも今思い出すと、やはり信仰に入った熱というものは今思ってもよかったです。

それから、今の佛大の前身の佛教専門学校に入りましたが、忘れもしません、叔母と夏の朝は知恩院のあの御廟お参りして、御廟の板の間に、木魚を持って行って蚊に刺されながら、夏は念仏した。冬は毛布をかぶって、朝の四時ごろから木魚をたたいて念仏したものでございます。そして、大正大学に行き、卒業して一年とちょっとで召集が来て戦争に行ってしまった。その間に父が亡くなったものですから、戦争が終わるなり、和歌山県の田辺の寺の住職をしたわけでございます。それから、いつてございましたか、佛科大学の講演部から頼まれて、恵谷学長と春日井博士と私と三人が講演いた

しました。そのときに、うれしかったですね。母校で講演させてもらいまして、法のともしびを継ぐ者、「法燈を継ぐ者」という題で、一時間半講演をしました。そのときに学生諸君に、「どうか、寺に生まれてズルズルと寺の住職になってくれるな。一度寺の住職に愛想を尽かし、お寺に愛想を尽かして、そして、目がさめて坊さんになってほしい。二度の出家を遂げてほしい」ということを叫んだことがございます。今思うと、これもまた血氣盛りで、言いたいことを言ったものだと思っておるのでございますけれども。そうやって自分に信仰があるということは、何も恐れるものがない、本当に言いたいことが言えるものでございましょう。

布教伝道というものは、そうやって自分のでき得ることを、自分の握っていることをお伝えする以外に何物もないと思うのでございます。布教の技とか技術とかいうのは第二、第三の問題で、まず自分の心の中に信仰のともしびを燃やすということが一番、布教の要であろうかと、私は信じているものでございます。

五重の話

それで、五重のお話でございますが、お手元にも差し上げてございますが、五重の本が最近たくさん出ております。その中でどなたが初重に何席用いておられるかということ、うちの本山の教務部の若い方に統計をとってもらいまして、私が直接当たったものではございませんが、野島宣道上人は、五重の前の心得として六席ほどお話しなさっています。それから、初重は十二席目とされていますが、

七席目から初重の話に入るとおっしゃっているんですけども、どうも初重の話に入っていないんですね。何か知らない間に初重の四障四機に入っているんじゃないかと。どうもこのけじめが、いくら読んでもわからないのでございます。それから、二重が三席です。十五、十六、十七と。三重が一時間のうちに半時間とっていらっしやるわけです。四修と三重とで一時間です。四重の二河白道が十八席。そのあとでちょっと大五重の在心、在縁、在決定なさっていますね。六日間の五重で十八席ですね。大体の振り分けがそんなものでございます。

次に、岩井智海僧正のは、どうも切れ目がわかりませんで、出していく間がございませぬが、井川定慶先生は五重の説法の中で、お話ではなくして、執筆されたものです。それが五重の心得として五説。それから、初重はさわりと四障四機で三席、安心が一席。五種正行が一席、助正二行が一席、四修は一席、三種行儀一席、三重が一席、四重が二席、第五重が一席、都合二十一席になっています。それから、水谷大成上人は、五重の前の心得が三席、四席目から七席目にかけて初重のお話。四、五、六、三席半。それから、五種正行、安心、五念門、助正二行が一席ずつ。四修三種行儀で一席。三重が一席、四重が一席、第五重が一席。十五席のご説法になっています。

寺田定信上人は、五重前の心得というのが四席、往生の四障四機が二席、安心が一席、起行の五種正行が二席、四種が一席、三種行儀が一席、三重が半席、四重が一席とちよつと、第五重が一席。都合、四日間で十五席になっていらっしやいます。

林靈法台下は、五重の心得が六席、初重一席、安心一席、五種正行起行が五席、四修三種行儀が一

席、三重が半席、二河白道の四重が二席、第五重が半席。都合、十七席。五日間でです。

その次の岩井信道上人は、五重の前の心得が四席、四障四機が七席、安心一席、起行五種正行一席、助正二行一席、四修一席、三種行儀二席、四重と三重とで重席で一席、第五重は一席、都合二十席になつています。

伊藤宏天先生のは、五重の前の心得が四席、初重が三席、安心起行で一席、四修が一席、三種行儀が一席、三重と四重で一席、第五重が一席、四日間で十五席となつています。

失礼ですが私の分は、五重の心得に当たるものが一席、初重が七席、二重の安心一席、起行の五種正行一席、四修一席、三種行儀と三重で一席、それから四重が一席、第五重が一席。そして、剃度式の説明が一席。都合、十五席。四日間でございます。

こういう振り分けをご覧いただきますと、大体皆様方も五重勸誡なさいまする何かの参考の目安にならうかと思うのでございます。

以前は、五重というのは一週間つとまりました。ですから、勸誡にも相当余裕があつたんですけれども、近年は大体五日の五重ですね。ですから、勸誡は四日間でやらなければいけない。非常に忙しいんです。ところが、昔の七日五重の習慣のせいとか、初日の第一席がいろいろな説明に費やされるんですね。これが非常に私にとつては痛手です。ですから、初日の第一席は最低三十分、四十分は欲しいと言つてご無理を聞いていただくんですけれども、心得ていらっしゃる方はもう初日から四席、一時間ずつの時間をいただくお寺もございます。

私は、五重の初日が一番勝負だと思うんです。この初日に受者の心をパツとつかんでおけば、あした休もうと思った人も来て下さいますね。それを、初日にグラグラした話をして終わるといって、二日目に来ない人が多いんです。ですから、私は初日が五重の勝負どころだといつも申しとおるのでございます。そういうところから、初日の第一席が私は欲しいですね。

そういうことと関係もいたしますが、このごろ最後の日に、懺悔道場をなさいます。これも五重を引き受けなさるときに懺悔道場があるのかなのか確かめておく必要がございますね。ないと思つて行つてみたら、「懺悔道場をやってくれ」と言われて、予定がくるうことがございます。実は、来月の一日から五重で広島にまいります。大体懺悔道場というのは、滋賀県と奈良県の特産物なんです。だから、大体宗定法要集にもああいう方法でやるやり方は載っていませんからね。本来はないと思うのですが、この広島も、電話をかけたら「懺悔道場をやってくれ」といわれました。ですから、こういうことも前もってお尋ねになつておく必要があるかと思ひます。

それから、剃度式をスムーズに厳肅にやるために、私は剃度式の説明を一席とつてあるんです。そうすると、式というのが大体一時間ぐらいでスムーズに、しかも厳肅にいけます。それから、剃度式でついでに申しますと、お一人お一人が御本尊の前に来て頭を剃るやり方と、戒師が壇を降りて巡回して向こうを回つてやる方法と、二通りあるようでございますが、私はもっぱらあとのほうをやつております。そのほうが厳肅に行くように思ひます。一人一人が御本尊の前に来ますと、道場全部がざわつきまゝです。それで、結局は勸誡師の私が剃刀をやるわけです。私が「南無阿弥陀仏・・・」とや

つたら、受者一同からみんなが「南無阿弥陀仏・・・」とやる。それが交互になっていきますと、非常にリズムカルでいいです。そして、受者一同が念仏のほうに心が集中できて、一人一人が御本尊の前に行くよりも、そのほうが私はいいように思います。

ついでにこの懺悔道場ことを申しておきたいと思えます。江州と大和、滋賀県と奈良県とは、やり方が若干違ふんですな。滋賀県のほうは、これが本尊、そしてここに受者が並びます。そして、勸誡師がここに座ってやるのが滋賀県です。そのときには二個の口伝があつて、一つを暗夜道場の伝、二つを懺悔道場の伝と、この二つです。そして、終わったならば、御住職と交代して、ここで広懺悔をやつたり、礼拝をするわけです。ところが奈良県は、ここに御住職が座られまして、勸誡師がここです。そして、項目が三つあります。その一つは、無明長夜六道輪廻の表示、二つが二尊遣迎、二河白道の表示、三つが懺悔細釈。大和ではこの三つです。江州はこの二つです。そこが違ふんですね。そして、大和の場合勸誡師のこの説明が終わると、後ろの障子などを開けてここから導師がでています。私が疑問に思うのは、なぜここで二尊遣迎二河白道の話をしなければならぬか。大和のお方に言わせると、「滋賀県よりも私のほうがいいんじゃない」と言います。滋賀県の方に言わせると、「大和よりも私のほうがいいんじゃない」と言います。皆さん、どうお思いになりましたか。この日に二河白道のお話を勸誡の中でしていますね。ここでまたやって、翌日の伝法でまた二河白道の話をしなければならぬ。懺悔と二河白道、二尊遣迎と懺悔と、どんな関係があるのか。どうも私は、江州のほうに理にかなつていふと思うのでございます。またご検討していただきたいと思います。そして、

この懺悔道場、ここで白道を申します。それと、懺悔するということとこれと、どんな関係があるのか。これでやってくれと言えばやりますけれども、懺悔とはどうも結びついての説明が私にはできないように思います。私は江州のほうが理になつていふと思ひます。

本当に懺悔ができておるかどうかが、私はいささか疑問に思つて居ます。ただ暗いところを手を引いてもらつて歩いた、という印象だけは強烈に残つておるようですけれども。たまたま声を上げて泣く泣き声を聞くこともありませうけれども、大体の人はただ暗い中を行つたり来たりしたという印象だけが残つて居るように私は思つて居ないのでございます。

五重の目的

私は、初日の第一席で五重の目的をお話いたします。ここでいろいろ合掌とかあるようですけれども、私は、五重の目的として、仏の子の誕生という表現をいたします。それは、卵とヒヨコにたとえるんです。無精卵の卵はだめですけれども、有精卵の卵であつたならば、親鶏が抱いて温めますと、三、七、二十一日目にはヒヨコが産まれる。それと同じように、私たちはみんな仏性という卵で産まれている。有精卵の卵である。これは阿彌陀如来様のお光明、お慈悲の羽根に抱いて温めていたで、五日目に仏子、仏の子というヒヨコに誕生する。これが五重の目的だと私はたとえをもつてお話ししたのでございます。その阿彌陀如来様のお慈悲、ご光明の羽根に抱いて温めていただくためには、お念仏が必要である。したがって、前行四日間はいっぺり念仏を唱えてほしいので、ここでお念

仏の大切なことを強調いたします。

そして、五重の結論が結局は一枚起請文の「ただ一向に念仏すべし」を伝えるのが五重だと。しかし、初めてのお方が「ただ一向に念仏すべし」と言われると、何だか浄土宗の教えは浅い浅薄な教えのように聞こえると。しかし、この五重四日間の勧誡は組織的に浄土宗の教えを説くのだから、それを聞いていただいたら、浄土宗の結論、「ただ一向に念仏すべし」ということが「なるほど」とうなずかれてきますということを強調いたすものでございます。

それをたとえまして、忠臣蔵のお芝居を最後の場面だけをご覧になると、若い侍が老いた吉良上野介の首をはねて——と思うだろうけれども、あの忠臣蔵のお芝居を初めからしまいまで順序を追ってご覧になったら、老いた侍が若い侍のために頭をはねられなければならないということが、「なるほど」と納得がいくように、「ただ一向に念仏すべし」という浄土宗及び五重の結論、そこだけを知ると浅かな教えのように思うけれども、五重勧誡、組織的にずっとお聞きいただいたら、「なるほど」と、「ただ一向に念仏しなければならぬ」ということがわかっていただける。だから、休まんように時間に遅れんように来てほしいということ、ここで強調いたすのでございます。それを言いたがために、初日の第一席を四十分、最低は三十分でもいいから、欲しいと私は会所にお願ひするのでございます。それから、初重ですけれども、私は初重で今申しましたように七席とつてございます。それは、ご存じのように、初重は元祖法然上人の『往生記』によるわけでございますけれども、ご存じのように、『往生記』の中には、機は説いてありませぬけれども仏身論がないですね。かつて初重を『選択集』に

したことがほんのちよつとあるんですね。それは福田行誠上人の『行誠伝語』というのがあるのですが、これが宗務所から出版されまして、それには初重は『往生記』でなくして、『選択集』を用いるように書いてある。それでこのこのとが一宗の大問題になったんですね。それで、当時の知恩院の第十七世日野靈瑞上人が、やはり血脉も初重『選択集』として授けてあるのでございます。あまり一宗が騒ぎ出したので、宗務所はこれを撤回したんですね。だから、使ったのは一回しかない。それはどこかといえますと、清浄華院の神谷大僧正がこの『行誠伝語』に基づいて『結縁五重筌蹄』という本を著しまして、翌明治二十二年の四月に清浄華院の本堂が焼けた、焼け跡の仮の本堂で結縁五重をした。そのときに初重に『選択集』を用いたんです。それからのちはまた元に戻って、『往生記』になっている。初重『選択集』で伝えたのは、この神谷大周大僧正があとにも先にもこれが一回でございませぬ。また、野上運海大僧正が知恩院に入られて元に戻したのでございます。

この『選択集』ですと仏身論がございませぬが、『往生記』には仏身論がないんですね。これはかねて私が学生時代に椎尾弁匡大僧正が、「浄土宗の布教のふるわぬのは、仏身論がしっかりしていないからだ」とよく言われましたが、私はこの初重で仏身論を説くんです。それは、初重は機でしょう。それがわかっていたら、反対の阿彌陀様がわかってくるわけです。阿彌陀様がわかってくれば、反対の私というものがわかってくる。宗教ということはレリジョン。レリジョンというのはレリガール結びつける。何を結びつけるのか。如来と衆生、仏と凡夫、阿彌陀様と私とを結びつけていくものが宗教ですから、だから私は、機を説くと共に、お育て下さる阿彌陀様という方はどういふ方であるかと

いうことを、初重で説くんです。だから、ほかの皆様方に比較しまして、私は初重が七席もとつてあるわけでございます。

そのお話をいたしますのに、私は人生観をまじえながらお話をします。それは、我々は、この人生は、一体どこから来たのか。何をするために生まれてきたのか。これからまたどこに行かなければならないものであるか。人はいずこより来たり、いずこに行くべきか。人生の目的は何であるか。この人生観のお話をいたすのでございます。そうしますというと、仏身論が出てくる。私の話から行くと仏身論が出てくるんですね。どこから我々はこの人生に来たのか。それは大宇宙を身と心としていらっしやる法身の元からこの人生に生まれさせていただいた。また、法身如来のみ力と、み恵の中に生かされておるものである。こういうことだと思ふんです。

だから、法身が我々の心の親様でございます。そうして、「かわいい子には旅をさせろ」と、人生修養学校に入学をさせていらっしやる。だから、人生は修養の学校である。この学校を無事卒業したならば、み親の膝元、極楽浄土に帰って、親の全財産、知恵、慈悲、み力(ちから)、ありとあらゆるお徳を譲り受けて、親とおなじ身の上、最後は成仏という身の上にならせていただく。すなわち、仏から出て仏へ帰るのである。その帰ることを往生と言う。そして、親の後継ぎができたところを成仏と言うのである。これは『起信論』の流転門と還滅門に当たりますね。仏の元から人生に産んでいただいて、また仏の元へ帰るのである。何のための人生か。仏にならなうがため。念仏申さんがため、修養のため、修養の学校が人生である。その仏の元へ帰るためには、報身阿彌陀如来様のお慈悲、お光明

をただかなければならない。ここで法身、報身というような仏身論が説かれていけるわけでございます。

本當を言うと、もう一つ応身を説いて、三身即一という話をしなければならぬのですが、そこまでは若いころはやりましたけれども、このごろは応身の話は省略しています。ただし、法身とか報身とかいふ仏様が別々にましますのではない。ただ唯一の阿彌陀様、独一最尊の阿彌陀様だけでも、あなたの持つていらつしやる御働きの上から、あなたにつけられる名前が変わるのである。私は本山に入ったら、法主という名前が与えられます。公民館とか大企業の新入社員の講演に行くと、「先生」と呼ばれます。うちへ帰ると、孫は「じいちゃん」と言います。そのように、私は体は一つですけれども、持つておる働きの上からつけられる名前がいろいろある。そのように、阿彌陀様はたった御一方です。しかし、あなたが自然界に働きなざる上から言えば、あなたは法身と言う。あなたが心霊世界に働きなざる、その働きの上から阿彌陀様を名づけたら報身と言うのだと。こういう説明を私はいたすのでございます。そして、初重の四障四機を最後にとります。

それから二重は、今申し上げましたように、大体三席半ですね。安心のところ、二祖上人の伝灯分を説きます。伝灯分と安心とで一席です。それから、五念門も説かなければいけないのですが、時間の関係上、「五種正行とやや似通っているから」と言い訳をいたしまして、五種正行だけを説いて、五念門は省きます。その五種正行の最後のところで、助正分別をいたしますから、正助二行が説かれるわけでございます。それから、四修が一席。三種行儀と三重とで一席でございます。

それから、初重で仏身論と機根を説く。これを結びつけていくのが二重の行です。六重、二十二件、五十五の法数と言いますね。その内容は、安心、起行、作業。安心には三心があり、起行には五種正行と五念門と正助二行がございます。作業に四修、三種行儀がある。これで六つですから、これを六重ですね。これを三、五、五、二、四、三を足すと、二十二になりますから、二十二件ということですね。さらにこれを細かく分類していくと五十五になるから、六重、二十二件、五十五の法数と、いわれます。これが『念仏授手印』の内容でございます。奥図の伝にこれを結帰一行三昧としております。一行三昧に結帰していく。

すなわち、『一枚起請文』の「三心四修と申すことの候は、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思つうちにこもり候なり」というのがこれなんです。あるいは元祖様の御法語に、「源空が目には三心も南無阿弥陀仏、五念門も南無阿弥陀仏、四修も南無阿弥陀仏と見ゆるなり」とおっしゃっておられるのが、この結帰一行三昧です。だから、阿弥陀様と私とを結びつけている行は、「南無阿弥陀仏」と唱えることでございます。お念仏によって阿弥陀様と私とが結びついていくというわけでございます。

そして三重ですが、これは三重は「解」ですね。実際、念仏を申しておる間に、往生ということが「なるほど」とうなずかれてくる。耳から聞いたのでは本当にわかったと言えない。本を読んで考えたのでは本当にわかったと言えない。どの道でも、およそ道と名のつくものは、実際に失敗しながらその道を実習してみても、やってみて、「なるほど」とわかってきてこそ本当にわかったと言える。三重はそういうところを解と伝えているわけでございます。ですから、ここで私は、聞・思・修の三慧を説

くのでございます。聞慧、思慧、修慧。これを聞思修の三慧と言いますね。これは聞いてわかったこと。本を読んだりして考えてわかったこと。これは実際修業してわかったこと。聞思の二慧を知識と言う、修慧を智慧と言うのである。そこをば私は「門より入る者は家珍にあらず」と説くのであります。これは禅宗で使っている言葉らしいですね。門をくぐって入ってきた者は家の宝ではない。すなわち、話を聞いて耳という門をくぐって入ってきたのは、本当にわかったとは言えない。あるいは、本を読んで、目という門をくぐって考えてわかったというのも、それも本当にわかったとは言えない。実際、念仏をしてみて、「なるほど」と心の底から出てきたものが本当にわかった智慧である。すなわち、二重の行の念仏を実際に修業しているうちに、往生ということが「なるほど」とうなずかれてくるわけでございます。

その次に四重。四重は、もちろん二河白道を説くわけでございますが、大事なものは、あの二河白道の絵図でもって、私の真正面にはいつどこで何をするのに阿弥陀様がおいでだ、その阿弥陀様の真正面の私だ、その阿弥陀様のお守りの中の私だという、そういうことを本当にわかってもらえる。それがわかってきたならば、往生の救いの証拠が握れてくる。そこを四重では「証」と伝えていくわけでございますね。

それから最後に第五重でございますが、これも私は一席の四十五分間ぐらいとります。あとの十五分ぐらいで、田中木叉上人のおじひのうたをうたうんです。

なさけにもゆる親ごころ

闇路に泣けるおさな子を

大慈大悲のふところに

迎えいだいて育てあげ

無上のさとり得しめんと

あけ暮れわが子を案じつゝ

ながき年月まちわびし

大非の催し甲斐ありて

親子逢うせのはなむしろ

通う心の一すじに

仰ぎまつれば阿弥陀尊

端正無比のみすがたは

光さんさん輝いて

這いあがる子を懐き上ぐる

我が子を念うおやの慈悲

おじひに縋る子の念い

とけてとろけて南無阿弥陀仏

声はほとけかわが声か

光明の乳ふくませて

幼き我を育てんと

子を喚ぶ大非のおん声が

称うる衆生の声となり

南無阿弥陀仏とわが声に

あらわれ給う御名号

あのうたをうたいますというのと、三分の二ぐらいはみんな涙を流しますね。女の方よりも男の人のほうが先に涙を流しますな。恥ずかしそうにハンカチを出して、涙を拭いています。非常に最後の結論として、あのうたは総しめくりにもってこいのありがたい、いうたですな。だから、第五重は一席と書いてありますけれども、正味四十五分から五十分ぐらいで、あとの十分、十五分かけて、今

のうたをうたうようにいたしております。私の『五重勸誡』という本を、増上寺の布教師会から出していただきましたが、最後にあれをのせておいたら、布教師会の吉田上人が、「これをオミットしようか」とおっしゃるから、「これを見ただけではわからないので、実際、五重の最後の四日目の総しめくくりでこのうたをうたったら、みんな涙を流すんだ」と言ったら、「あつ、そうか。それだったら置いておこうか」と言って、オミットせずに残してくれたのでございます。

ついでに申しておきますが、あの『五重勸誡』の本は全部売り切れてなくなりました。近く、この本山から二版を出す予定でございます。増上寺の布教師会の吉田上人に、きのうご了解いただきました。どうか善導寺から出して下さって結構だと。来年の春の五重には間に合うように印刷したいと思っております。私は一文の得にはありませんが、PRさせていただきます。

その第五重ですが、どうも私は腑に落ちんことがあるんです。お名前はご無礼ですから申し上げませんが、このいわゆる在心、在縁、在決定ですね。今挙げたこのお方の中にもございますし、本は出しておられませんけれども、もう亡くなった有名な全国歩かれた布教師の方も、「在決定は安心決定して念仏せよ」と説いてある。何でこんな間違いを起さされるのか。これは曇鸞大師の『往生論註』の原典をお読みになっていない証拠です。ただ決定というこの言葉に引きずられたんでしょうね。本は出していないけれども、有名な布教師の方は、在心、在縁、在決定——これは直接聞いたんです。在心というのは、心についてだと。子供の頭を「かわいいね」となでるのも、拳骨でコツンとたたくのも心次第だと。だから、人間は正しい心で生活していきなさいと、こんな話です。

在縁は縁次第です。悪縁を退けて、なるべくいい縁に会うように。だから、この五重が終わつたら、五重のおさらい会を作つて毎月一度は寺に集まつて、励まし合つて精進しなさいと、こういうとり方です。そして、その人は、在決定を安心決定して念仏相続しなさいと。これを聞いて驚いたですね。それで、組内の御和尚さん方が間違つたとり方をしているということを、誰も知らない。まことに嘆かわしいことだと思つて。こういうとり方をしたのが、この本の中にだれかいらっしゃいます。ですから、どうか一つ勸誡をなさる場合には、大きな口ではよう言いませんけれども、原典に一度当たつていただきたいと思います。つくづく私は、三義校量を見ましてそう思います。

そして、どなた様も皆、『論註』で言つたら「無他想」、これが割と説かれていないですね。三祖上人の記主禪師の『往生論註記』でいきますと、このほうがはつきりしているんですね。『往生論註記』でいきますと、「無他想間雑」と書いてあるこのほうがはつきりしています。阿彌陀様を思う。他の念想を間に交えることなく念仏する。これが私は、第五重の大切なところだと思つて。それが翌日の伝法の凝思十念の伝に結びついていくんです。『論註』で言つたらこれですね。無他想、他想無く書いてあります。記主様は、「無他想間雑」と書いてあります。「仏を思う以外の他の念想を間に交えることなく念仏する」。これが凝思十念の念ですからね。それを割と皆さんはお説きになっていないですね。それは私も不思議に思つてですね。これを説かなければ私はいかんと思つてですね。それについて第十八願は、ご存じのように、

設我得仏 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺

これが十八願です。ね。

「もし我仏を得たらんに十方衆生、至心に信樂して我が國に生まれんと欲して、乃至十念せんに若し生ぜずんば正覺を取らじ」

法藏菩薩が、私が仏になった暁には「十方衆生」を、これを十方衆生分の一が私だと思つたら落第です。ね。十方衆生イコール、この私と受け取らなければいけない。それは戦前の明治時代、大正でした。山口高等学校、旧制山高の校長で、確か鈴木と言つたと思いますが、のちに女子学習院の院長になつた方。この方が山高のある年の卒業生をつかまえて、教育勅語の中に「汝臣民」というのがあつたが、「それをどういう意味か」と。そうすると、卒業生が異口同音に「明治天皇が日本国民に呼びかけ給うお言葉です」と答えた。そうすると、校長先生が「機嫌が悪い。その中でたつた一人、「汝臣民とは、明治天皇がこの私に呼びかけ給うお言葉です」と。そうするとその校長が、テーブルをバンツとたたいて、「そのとおり！」と言つたそうです。「これでおれが三年間、心血を注いでおまえたちを教育してきた教育のしがいがあつた」と、大変お喜びになつたそうです。そのように、「汝臣民」を日本人全部と受け取つたら落第で、「私一人」と受け取らねばならんように、十方衆生分の一が私でなくして、十方衆生イコールこの私、と受け取らねばいかんわけでございます。

そして、至心信樂欲生我國は、ご存じのようにこれは安心です。乃至十念が起行。「安心起行具足して極樂に生まれぬ者がおつたら、わしは仏にならんぞ」と誓われて、その誓いが成就したんですから、

安心起行具足した者は、一人残らず極楽に生まれることはできる。これはそれをこの十念は、十遍と解釈したらこれは大間違いですよ。まことに御無礼なことですけれども、うっかりすると、浄土宗の学者の中にも、「十遍唱えたら」と書かれた方もいらっしやいます。お名前は申しあげません。もう亡くなられましたが。

設我得仏 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺

これは「従多向少の義がある」ということです。多より少に向う。多というのは上尽一形のことです。少は下至十声のことです。上は一行を尽くしたことから、下至十声に至るまでが、乃至十念でございませぬ。ということとは、最低はあの下品下生の五逆の罪人が臨終に十遍唱えて救われたと。これを下至十声と言われます。これは「信仰に入つて五重を受けた暁から臨終の夕べに至るまでは、一生尽くして念仏した者は」ということです。それを抜かして解釈したならば、それは間違いと言わなければなりません。

この五逆の罪人が信仰に入つての一生は、十声の間しかなかった。その十声の間、無他想で念仏を続けたら、偶然に十声にいたつて終つたわけです。九声で息が絶えても構わない。十一声で息が絶えても構わない。そういう数に問題があるんじゃない。信仰に入つた暁から、無他想間雑、他の思いを間に差し挟むことなく念仏するということが、この眼目であろうと私は思います。そうして、阿弥陀様のみ思つて、「どうぞこの私をお助け下さい。南無阿弥陀仏。どうぞ阿弥陀様、この私をお助け下さい

い」と、阿弥陀様のみ思う。その、のみ思う心を思い続けていった。そうしたら、十声に息が絶えた。だから、くどいようですが、九声でも構わない、十一声でも構わない。そういう数に問題があるんじゃない。ただし、この五逆の罪人は、「私は十声唱えたら、十声目に死ぬ」ということは知らなかった。阿弥陀様をそれを知ってござったから、乃至十念を誓われた。これを『往生論註』の中では、「蟪蛄（ケイコ）春秋を知らず」と説いています。蟪蛄というと蟬のひぐらし。ひぐらしは夏だけしか知らない、春や秋を知らないということです。それはそうです。ひぐらしは夏に生まれてきて夏に死んでいくんですから、夏だけしか知らない。春や秋は知らないわけです。それは春夏秋冬を知っておる人間さまということですよ。蟬はそんなことを知らないわけです。春夏秋冬を知っておる人間が、「ひぐらしは夏だけしか知らない、春や秋を知らない」と言うわけです。

それと同じように、五逆の罪人が、私は十声唱えたら、十声目に死ぬということは知らなかった。ただ、善知識が「おまえのような者でも南無阿弥陀仏を唱えさえすれば、きっと間違ひなく救われるぞ」と聞かされて、おぼれる者わらでもつかむような切ない気持ちで、「阿弥陀様、どうかこの私を」と、阿弥陀様のみを思って念仏を続けたら、偶然に十声で息が絶えただけだ。それを「蟪蛄春秋を知らず」と『往生論註』では申しています。「その十念目に死ぬということを知っているのは、通神の者のみ」と書いてあります。

『往生論註記』、記主良忠上人の往生論註注釈書の書物も、やはり「通神」と書いていますね。ここに大日比三師の法州上人の『信法要決講説』というのがあります。それによりますと、通神というの

はお釈迦様のことだと書いてあります。例えば、ひぐらしという虫が春の秋のと知るではない。春出て秋鳴くとは、春秋を知った人間の言うことなり。ちょうどそれと同じことで、五逆の罪人が十念で往生したということは、罪人が十念の数を知るということではない。釈尊が十念業成をご存じゆえ、具足十念と仰せられたのである。こういうふうには、通神というのはお釈迦様だと法州上人は申されてございます。『信法要決講説』と。これはご存じの、浄土宗選集というのがありますね。その中の第八巻に納められてございます。ですから、くどいようですが、ひぐらしは夏だけしか知らない、春や秋を知らないというのは、春夏秋冬を知っている人間様の言うことであると。それと同じように、五逆の罪人は「わしは十声目に死ぬ」ということは知らなかった。阿弥陀様はそれをご存じだったから、乃至十念という最低線を誓われた。だから、この罪人はただ阿弥陀様のみを思う心を思い続けていただけでございます。そうしたら、十念目に。そのほかの者は、信仰に入った晩から臨終の夕べに至るまで、一生尽くして念仏するということが大切でございます。その念仏する場合にも、この五逆の罪人と同じように、阿弥陀様のみを思う心を思い続けるということが大切でございます。だから、ここは、昔から「見仏方便の義なり」と言っているわけです。生きた阿弥陀様にお目にかかる方便の意味であるとおっしゃっています。それはそうです。阿弥陀様のみを思い続けていたならば、だんだん妄念・雑念が入らなくなってきました。阿弥陀様のみが思い続けられるならば、見仏ということがなし遂げられるわけでございます。そういう点が、どの本にも出ていないんですね。しかし私は、凝思十念の念は阿弥陀様のみ思うんですから、という意味で数えたら、阿弥陀様が思えない。指で十遍数え

たならば、念仏にならない。かといって、阿弥陀様のみを思つて数をとるといふ心を用いなかつたならば、九遍で終わるやら十一遍で終わるかわからない。それには方便がある。それは筆典に題するを得ず。口授心伝。それが浄土宗の極意だと、こういうわけでございます。ですから私は、どうか平生にお念仏なさる場合にも、阿弥陀様のみを思つて、そのことのみを思ふ心を使い続けるようにご精進をしていただきたいということを、五重の席にも申すことでございます。

これで大体私がきょう申し上げようと思つたことは、全部言うてしまつた。もうタネはないんです。
(笑)。

研究部員研究成果報告

布教への試み

——和歌の効用について——

研究部員 (北海道支部) 石 割 顕 昌

私共、北海道に於いては、僧侶とは即ち、お説教をす

と言う事に成る。

る者という考え方が限なく行き涉っている所であり、お通夜、忌引、年忌法事、中陰、御忌、施餓鬼会、お十夜、等々機会ある所、常に法話をするが、これは只、我が浄土宗ばかりでなく、各宗の方々も同様のことであつて、甚だしい例としては、道南の海上に在る離島では、つい最近まで弔いができる、各宗の僧侶が随喜して、通夜の席において、宗派を問わず順に朝まで法話をしたという所さえもあつた。

したがつて、一ヶ寺の住職ともなると、話の上手、下手は別として必ず法話をする者として位置づけられている状態である。

さて、日常布教というと、一番身近にはやはり、法話

今現在、私たち日本人が共通の心情として持っているものは何であろうか。私たち(四十代)の父母は、その体験として戦争と言うものを通して、初対面の方にも戦争のお話、特に男性にとつて軍隊のお話をする時は百年の昔から知人で有つた如く打ち解けることができる様であるが、今はその方々も次第に少なくなり、私たちの年代になりますと、共通の体験というものが無くなったと言える時代である。

此処において、私は、日本人の古来から受け継いで来ている処の独特の文化である、和歌に流れる心こそ、年令や環境の差を越えて持っている心情でないかと思う。

美的、宗教意識の日本的発想が確定して来たのは、

やはり平安朝に入ってからではないかと思われる。

例えば、極楽往生の思想等は、源信の「往生要集」によって大きな影響を受けた。と共に自然に対する発想も、自分の生活の一部として、また生活そのものとして、人間の中に取り込んで行つた事により、西洋的に自然と対立するものではなかつた。

したがって、信仰の面においても「八万の神やおよろず」と言われるほどに、天地自然の現象が、信仰の対象となつて、天然崇拜の宗教の形成を持ち、あらゆる物が神として崇められた心情は、現代においても、重複信仰として現われ、宗教人口は、現実人口を上回る状況を呈している訳で、多くの神仏を信ずれば、多くの御利益がある如く感じる人々が多数を占めている事はやはり遠く、記紀、万葉の時代と遠く無い処に現代日本人の心情が今も脈打っている事に起因しているものと思われる。

その根底に共通するものとして、私は、日本独特の和歌についても、発生と共に日本人の心情を揺るがすものとして布教に取り入れる事により、より効果的法話の素材として活用すべきものとおもわれる。

我が元祖大師法然上人も、勅修御伝をみると、多くの

歌を詠まれておられる事が散見され、中には、勅選集にも載せられている。今その二、三を上げて見ると、

一声も南無阿弥陀仏という人の

はちすの上にのぼらぬはなし

極楽へ勤めてはやくいでたたび

身の終には参りつきなん

阿弥陀仏と申すばかりを勤めにて

浄土の莊嚴みるぞうれしき

等、多くの歌を持つて私たちにお示し下さっている。

ここに、仮説が許されるならば、私は、すべての社会現象を次の如く立てて見たいと思ふ。

先ず第一に、すべての中心を、神仏とした時に、それを取り巻く物として観無量寿經の三心を持つてくると、至誠心が第一番に上げられよう、次に深心が来て、さも外側に回向発願心が取り巻くという形になる。即ち、神仏を中心とした回りを外に向かつて、至誠心、深心、回向発願心と三重にオブラートで包んだ形となる。或は、この三心が渾然一体となつて、神仏を包んだ時にその中からあらゆる社会現象、即ち、拝み、敬い、讃嘆する手段として建築、絵画、哲学、音楽、文学、舞踊、自然科

学、等々の発生が考えられる事である。

この文学の中より、和歌というジャンルが独立してきたが、その和歌の心を一番よく表現している名文は何と云つても古今集の仮名序であらう。

「やまと歌は、人の心を種としてよろずの事の葉となれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思うことを、見るもの聞くものにつけていひだせるなり、(以下略)」

という、あの紀貫之の名文は私たちの心を揺さぶるに充分である。

これこそ、古代人と現代人が心の根底において脈々と流し続けて来た、古くて日々に新しい共通の心情であらうと思う。

先年、私は、昭和五十二年改編版の布教全書のなかより、二百九十首程の和歌を抜粋して見たが、その歌を次の如く分類して見る事が出来ると思うのである。

一、法話導入としての歌

二、教理を理解させるための歌

三、法話を転機させるための歌

四、結語としての歌

以上、四段階に分けてみたのであるが、しかしこれは、

歌の引用の仕方によって入れ変わるものであるから、厳密な区別を設定されるべきものでもない。

今ここに、円光大師二十五霊場上より分類して見ますと、

一、法話導入として使用される歌は、これからお話を進めていくために、法話全体の上に内容が及ぶ歌として

第一番 美生国 誕生寺

ふたはたの、あまくだりますむくのきは

よよにくちせぬ、のりのしのあと

等を讀題の後にしますと、御忌法要の法話に、

二、教理を理解させる歌として、同じく

第四番 摂津国 如来院

みとくちと、こころのほかのみだなれば

われをはなれて、となえこそすれ

その他 七番 九番 十一番 十六番 十八番 二十

五番等が上げられよう。

三、法話の転機の歌として、

第二十一番 大原 勝林院

あみだぶに、そぬる心のいろにでは

あきのこずえの、たぐいならまし

その他、第二十三番、等は季節を利用して次の歌へと移り易い歌であると思います。

四、結語の歌として、

第十六番 栗生 光明寺

つゆのみは、ここかしこにてきえぬとも

こころはおなじはなのうてなぞ

(こころは——うまれは)

等は最適である様に思われるがいかであらうか。

かくして、法話の中に和歌を用いることは、法話全体を通じて、

一つには、経文、御法語等の難解である部分を理解しやすくできる。

二つには、法話を心情的に聴聞者の心深く染み込ませることができらる。

三つには、法話全体として、講演、演説口調の固さや圧迫感より聴聞者を解き放つ事ができる。

四つには、法話を次の段階に進め易い。

五つには、聴聞した法話の内容を、理解し易くまとめ上げ、確認する事ができる。

六つには、仏様と僧侶と聴聞者とが一体感を感じ易い。以上、六項目に要約して、和歌の持つ効用を述べてきたが、その根底には、日本独特の文学である和歌は、三十一文字の中に総ての感情を移入できる文学として、布教法話の面からも多に活用されるべき素材であると思われる。

(北海道第一教区・西迎寺)

「五重相伝会」を開筵して

研究部員 (東北支部) 長 尾 隆 道

平成元年十月八日より十二日までの五日間「五重相伝会」(以下五重と略します)を開筵いたしました。その実施に当たってのことを少しく述べたいと思います。

五重の場合、通常は一週間程度の期間が必要とされていますが、当寺の場合受者層の殆どが給与生活者のために、長期間の日程を取ることが困難と思われ、後記の通りの日程表で開催いたしました。

日程表を見ての通り、勸誡の時間が七座、(十二時間)と非常に少ないように思われますが、五日間の場合はこれが限度と思われれます。

当山では十年毎に五重、あるいは授戒会を開筵する習慣があり、戦後五回目を数えました。筆者が伝灯師として開筵したのは二回目ですが、その二回の五重を通して

感じたことを申し述べます。しかし、結願(十二日)を終えて、原稿のメ切りまで二日間しかありませんでしたので、研究報告というよりは五重を終えての感想文のようなものになると思いますのでご了承下さい。

当青森地方(特に津軽地方)では、五重、授戒会の開筵が特に頻繁に行なわれ、三、四年毎に開催するという寺院も珍しくありません。そのために年中行事の一種の如くにとらえられている感も否定できません。当山でも十年に一度ということでもあり、マンネリ化することを第一に警戒しました。その為に、お寺の総代、世話人等が率先して五重に完全参加することをお願いしたのであります。その為には行中の世話人の仕事を完全になくすることを考慮しました。開白の前日までにすべての事務手続きを

終了し、総代・世話人等は受者として参加いただいたのです。過去には、五重に加入したけれども勸誡の一座も聞けなかったという世話人もいたほどです。今回すべての総代・世話人に、行に完全参加していただけたことにより、念仏信仰の力が随分と増大したように思われます。

次に、今回の五重では、堂内を教室風にして、すべての受者に机を使ってもらうことにしました。当初は行道札拜の邪魔になるのではと懸念されましたが、いざ使ってみると、テキストの使用、筆記は持論、受者の肉体的な疲れが随分と減少されたことに気付きました。長時間の勸誡を聞くためには、机を使用することによって精神力が集中され、念仏の教えを学ぶんだという気持ちの確立に、大きな効果があるように思われました。受者は平均して高年齢者が多いのですが、若い頃の学校生活を思い出して、一生懸命先生の話を聞いてくれました。できれば机の使用をなさることをお勧めします。

今回お願いした勸誡師は土屋光道上人でしたが、多くのテキストを使用なされました。当地方の五重ではあまり例の無いことではありますが、これは非常に効果の大きいものです。年配者はどうせ細かい文字は見えぬだろう

という思いで、とかく一方的な話に終りがちですが、テキストの使用は高令者にも大きな意味を持っています。老眼のためよく字の見えない人でも一生懸命テキストに顔をつけている姿が印象的でした。できるだけ視聴覚に訴える勸誡が望ましいように思われます。

次に儀式のことについて少しく述べます。時間の都合上「剃度式」を完全に実施することはできませんでしたが、「懺悔道場」に組み込みました。当地方では懺悔道場が五重中の大きなポイントのひとつとされています。暗黒な道場の中で、洗手、焼香の作法を、さながら舞台上の役者の如く作法するのですが、今までは時間の都合上、代表者のみの作法となっておりました。しかし、道場内で受者全員に作法を行った方が良いのではなからうかという相談がまとまり、暗黒な道場の中で、伝灯師から「おかみそり」を頂き、侍者によって洗手、焼香の作法を全員にやってもらうことにしたのです。その結果全員がほんとうに懺悔の気持ちを強くしたように思われました。時間が足りないという一言で、さまざまな作法が省略される傾向がありますが、五重は我宗での最大の道場であり、要所、要所には必要なだけ時間を取るようにした方

が念仏弘通のためになると思います。

次に「要偈道場」についてですが、当地では『代説』
とって伝法分を勧誡師に頼っているのが通常でありま
すが、やはり伝法分については伝灯師から直接に口授す
るのが望ましいと思われます。ただし、勧誡師のように
口述には慣れていないので、時間は充分に取るようにし
たいものです。筆者の場合は一時間の時間を当てたので
すが、開導（訓導）に時間を取られ、後半は時間に追わ
れ結局、虎の巻を棒読みして終ってしまったという苦い
経験をしました。

要偈道場中、白道を渡河する場面についてですが、従
来は次々と受者を渡河させていたのですが（一間に三、
四人）、充分にスペースをとって（二間に一人位）、釈迦
前で経巻を授与し、経巻奉持で白道を渡河し、如来さま
の前に奉納するという型式をとってみました。経巻は順
送りにするので十五本も用意すると充分と思われます。
その結果伝法分での経巻相承が身をもって体験できるの
で、感激を深くしてくれたようです。

次に「密室道場」について気のついたことを申し述べ
ます。伝法分については一時間三十分程が適当と思われ

ました。なお、伝法分を始めるに当り、要偈道場と密室
道場との違いを受者に充分に理解してもらうために、微
細な説明が必要と思われました。その理解なくしては、
せつかくの道場作りが徒勞に終わってしまう恐れもありま
す。そのため今回の五重では阿弥陀如来さまに一段降り
てきていただき、受者側に近づけて安置する試みをしま
した。要偈道場から密室道場へと移るに当って、衆生が
如来さまに一步近づくとことになるのですが、その場面を
如来さまに一步近づいていただくことにより具体化した
のです。本堂が広いので本座具の使用は不可能でしたが、
白サラシを四方にめぐらして、如来さまにもその中にお
立ちいただいたのでした。まさに仏と衆生とが一如とな
るように道場を作ってみました。

さて、次に「十念伝」についてですが、凝思十念ということでもあり、如来さまに思いをこらして授ればよいのですが、どうしても小さなお顔ですと分りにくいものです。そこで不尊ながら、如来さまのお顔をスライドフィルムに撮影させていただき、映写機で大映しにさせてもらいました。結果は効果大なるものでありました。

以上の外にもまだまだ考慮すべき点があると思いますが、今後の課題といたします。

「五重相伝会」といいますと、とかく従来通りの儀式作法が重んじられ、作法を改めることが好ましくないと思われておりますが、視聴覚に訴える方法を通して、より一層お念仏の教えが弘通されるものと信じます。以上二日前に結願した五重を通しての感想を申し述べました。

(青森教区・阿弥陀寺)

五重相伝会時間割表

	8日(日)	9日(月)	10日(火)	11日(水)	12日(木)
	集 合	集 合	集 合	集 合	集 合
9 : 00	礼 拝 勸 誠 礼 拝	礼 拝 勸 誠 礼 拝	勸 誠 大施餓鬼 法要	勸 誠 懺悔道場	正伝法 (密室道場) 血脈授与
12 : 00	昼 食	昼 食	昼 食	昼 食	記念写真
1 : 00	礼 拝 勸 誠 礼 拝	礼 拝 勸 誠 礼 拝	礼 拝 勸 誠 礼 拝	正伝法 (要偽道場) 終了後解散	解 散
4 : 00	解 散	解 散	解 散		

現代と布教

——浄土宗東京教区青年会国際救護活動について——

研究部員 (関東支部) 土屋 正道

日本の九割以上の人々が中流意識を持ち暮らしている、と言われるようになってから何年がたつでしょう。経済的には世界のトップに立った我が国ですが、あいかわらず精神的には満たされず餓鬼道におちているようです。

このような現代日本に生きる私たちは、いかにして念仏の教えを実践し、弘めていけるでしょうか。現代と布教についてのひとつの試みとして、浄土宗東京教区青年会の救護活動(1)、特に海外の発展途上国や難民に対する国際協力を紹介してまいりたいと思います。

東京教区青年会の国際救護は、一九七九年度の『カンボジア難民救護募金』協力に始まり、現在は『アジアの子供たちの命を救おう』『いのちの募金』のタイトルのもと募金を中心とした活動を続けております。(2)

最初、全日仏青(全日本仏教青年会)、WFBY(世界仏教青年連盟)などの運動に協力する形ではじめられた活動が、一九八四年には独自にユニセフ(国連児童基金)一般募金に直接協力、一九八六年にはユニセフ地域指定募金を直接担当、青年会内部に「救護委員会」を設置して民間公益団体(3)として自覚を深め、一九八八年にはユニセフに加えてJVC(日本国際ボランティアセンター)のプロジェクトにも協力するようになりました。東京の浄土宗寺院を母体に、伝統教団への信頼と青年会の行動力を広げる活動が徐々に浸透しております。

生命の危機にさらされた人々への緊急救助にはじまった協力が、継続的な協力へ、さらに一方的な救援行為ではなく、生きる姿勢の反省をも強調する教化活動として

積極的な位置づけがなされるようになりました。

現在活動の基本は、同悲同苦の仏教精神に基づいた自利利他の行と位置づけています。単なる慈善事業ではなく、会員が自から世界に学び、自らの言葉で布教実践する。さらには一般、檀信徒の方々に布施行の実践を通して、縁起、お蔭、絶対他力の世界を感じていただくことを目的としています。

ここでは、国際救援を浄青活動の柱とした一九八六年以降について報告し、今後の展開を述べたいと思います。

一九八六―一九八七年度はユニセフを通じて、ブータンの子供を救うためにORS（経口補水塩：こどもの下痢による脱水死を防ぐ薬）、EPI（予防接種）普及事業等に参加協力。一九八六年度には五百三十五万七千七百九円、一九八七年度には八百一十二万四千四百七十七円の浄財を届けることができました。

一九八八年―一九八九年度はユニセフを通じて、ブータンのBHU（簡易診療施設：交通の不便な山中の山小屋、三棟分建設の一部）、カンボジアのプロジェクト、さらにJVCを通じて、RINSEセンター（母子保健所の一部）、小学校の井戸一式分などに参加協力。一九八八年

度は一千六万六千四百十三円の浄財を届けることができました。

アキカン募金など（アキカンシール配布）(4)、一般檀信徒の協力を得た寺院活動の活発化はもちろん、会員の援助についての関心が高まるにつれ、教化のアプローチとして活用されるようになってきたと思われます。一九八七年三月二十五日よりブータンを視察。教化用ビデオ、スライドの作成とともに、日本テレビ『宗教の時間』で「いのち募金」の紹介をいたしました。また一九八九年二月二〇日よりカンボジアを視察、おなじく七月に『宗教の時間』で「カンボジア報告」をすることができました。

救援活動も檀信徒の募金に留まらず、一九八七年十一月二十五日にはブータンを紹介するチャリティージャズコンサートを開催（JAZZ IN ZOOJOURN^o於増上寺）、一般の方にも教化の機会を与えられました。同じく一九八九年四月八日には、はなまつりチャリティーコンサートを開催（釈迦降誕会コンサート於 五反田ゆうぽーと）、そのCD「釈迦」（委嘱初演）が七月に発売され、売上の一部が寄付されます。

このように発展してきた救援活動ですが問題点もあり

ます。檀信徒、教区内寺院への一層の浸透を図るには、
「顔の見える活動」にしていかなばなりません。身・口・
意・三業の布施、ただお金を集め一方的に送るだけでなく、
相互の「やさしいことば」「やさしいきもち」を伝える
努力が必要でしょう。

そのひとつの試みとして、一九八九年十月七日には増
上寺を会場にして、カンボジアの孤児、小学生が書いて
くれた写真（カンボジア視察の時現地で約二百八十名の
子供が書いてくれたもの）、日本の子供が書いてくれた仏
様のぬりえ、高校生の写真を「現代のマンガラ」として
一同に展示し、また教区内寺院より供出された物品のバ
ザーをおこないました。日頃、東京浄青になじみのない
かたからも関心がよせられ、今後とも発展させていきた
いと思っています。

いかに多くのものを頂いているか、私たちの経済的繁
栄を支えてくれておられるお蔭と、その責任を忘れないため
の布施行です。「オレが、オレが」と生きている現代人に
とって念仏の教えは説きにくい。しかし世界との深いか
かわりを知り、生かされていることを実感するとき、自
分の力ではない本願の救済をとく念仏信仰の入口に立つ

たといえるでしょう。「施され、施す」、如来の慈光を与
えづめに与えられていることを感謝できる時、絶対の他
力、仏の本願力をたのむようになるのではないでしょう
か。

念仏布教の導入として、浄青の活力源として、さらに
は自分自身の念仏の助業として、活動を発展させて行か
なければなりません。少しずつでも一人一人の交流をひ
ろげていきたいものです。さらに教区、教区内浄土宗関
連校との連携(5)を密にして、より広い年齢層に救援の裾
野、念仏の信仰が広がることを願っております。

事務局 〒194 町田市原町田三―五―十二 勝楽寺内

東京浄青救済事務局

郵便振替 東京八一―一九二八八一 東京浄青救済事務局

銀行口座 富士銀行 浜松町支店 普通三〇二八九四一

浄土宗東京教区青年会救済事務局

1. 救援活動

教化活動の一環として、都内の社会福祉協議会管轄の母子寮や養護施設に日用品を届ける「成道会歳末助け合い」、国内外の災害等に対する緊急募金、発展途上国や難民などに対する国際協力などを行っている。

2. 国際救援活動

一九七九年 事務局長が全日仏青(全日本仏教青年会)救援

隊(タイ・カンボジア難民キャンプ)参加

一九八〇年 ユニセフ(国連児童基金)・全日本仏青「カン

ボジアへのボランティア派遣事業」に参加

一九八一年 ユニセフ「アフリカ飢餓救援」募金に協力

一九八二年 ユニセフ・ノーテッドプロジェクト(ラオスに

井戸を普及する事業)

全日仏青「アジアに水を」キャンペーンに協力

ユニセフ「アフリカ飢餓救援」募金に協力

一九八三年 ユニセフ・ノーテッドプロジェクト(ビルマ

(現ミャンマー)の夜間中学校建設等の事業)

全日仏青「アジアの子供たちに水を健康を教

育を」キャンペーンに協力

ユニセフ「アフリカ飢餓救援」募金に協力

一九八四年 ユニセフ「アジアに水を」募金に協力

一九八五年 ユニセフ募金「世界の恵まれない子に愛の手

を」(一般募金)に協力

一九八六年 ユニセフ・ノーテッドプロジェクト(ブータン

の経口補水療法・予防接種及事業)東京浄青「ア

ジアの子供たちの命を救おう」「いのちの募金」

実施

一九八八年 東京浄青「アジアの子供たちの命を救おう」

「いのちの募金」実施

・ブータンの簡易診療施設(ユニセフ・ノー

テッドプロジェクト)

・ユニセフのカンボジア国内プロジェクト

募金に協力

・カンボジアの母子保健所建設事業(JV

CII日本国際ボランティアセンタープロジ

ェクト)に協力

一九八八年 バングラデシュ水害緊急募金実施

ユニセフおよびWFBY(世界仏教青年連

盟)、現地仏教寺院を通じてそれぞれ現地に送金

3. 民間公益団体

非政府間組織（NGO）、民間の援助、協力、難民救済など
国境を超えた次元での活動団体。

4. アキカン募金

アキカン用シールを配布、シールをはってアキカンの貯金箱を作ってもらい、日々布施行をつんで頂く。

5. 教区、教区内浄土宗関連校との連携

一九八七年二月 教化高等講習会「世界の飢えと仏教者の役割」の企画を浄青が担当、国連大学顧問・永井道雄氏、曹洞宗ボランティア会事務局長・有馬実成氏の講演をいただく。

一九八八年 関連幼稚園に募金箱の設置、救済のパネル展示を要請。関連高校にて「チャリティー写仏」を行う。

（東京教区・観智院）

群発地震の中に知る「生苦」

研究部員 (東海支部) 山口 隆 誠

「汝ら知るべし。人の世は四苦八苦のみ。生苦あり、老苦あり、病苦あり、死苦あり、愛別離苦あり、怨憎会苦あり、所求不得苦あり、五蘊盛苦あり、失榮樂苦あり。形

であり、生まれることによつてその後の苦しみを受けるわけである。

あるものも形なきものも、足なきも、一足なるも、二足四足、多足なるものも、一切衆生悉く、これらの苦あらざるなし。この苦、汝らすべからく知るべし。」

平成元年七月四日から突如始まった「伊東沖群発地震」は、約一か月間、有感、無感合わせて、二万五千回、最大震度「6」、手石海丘噴火と、伊東七万の市民を、恐怖のどん底に突き落とし、心身共に極度の疲労に、正しく「生

苦」を与えたのです。最も有感地震が激しく頻繁だったのは、四日から九日までの六日間で、実に五百四十三回の間断なき大地の揺れであった。此を震度別にみると、

「この迷いの世界は、苦である。」という真理で、その苦を具体的に説かれたのが、四苦八苦(生、老、病、死)(愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦)である。その中の「生苦」とは、この迷いの世界に生まれる苦しみ

震度6 (一回) 5 (十五回) 4 (六十九回) 3 (二百六回) 2 (二百五十二回)

となり、平均五、六分に一回、「ズーン」と直下型特有の突き上げてくる衝撃で、生きた心地なき日々連続であった。

七月九日午前十一時九分、今次群発最大の強震が発生、折しも日曜日の事で法要の最中参会者は総立ちになつたのと同時に堂内の荘嚴具が、ほとんど倒れ、天蓋、燈ろうも落下した。大衆は、次にもつと強い揺れが？という恐怖と、不安の形相で唯、立ちすくみ、おののくばかりであつた。

境内に亀裂が走り、墓石は殆ど倒壊、大自然の力を見せつけられたのである。おまけに、七月二十五日、二十八日と再度に亘り集中豪雨、亀裂が入つた「城山」等は、四か所に亘つて崩れ落ち、觀光地「伊東」は、觀光客の姿もなく、被災地に急変したのであつた。七月十三日、有史以来といわれる「海底噴火」により、一時はバニック状態にまで及び、ちよつとした物音にも、「ドキッ」と心臓の縮む思いであつた。瓦屋根の家の瓦は、ほとんど落ち、石垣は崩れ、壁には亀裂が入り、「觀光の夏」は「恐怖の夏」に一変したのである。

私には二人の内孫があり、上は小学校一年生の女の子、下は此の七月に二才になつたばかりの男の子である。

「ズーン」「ズーン」と、間断なく突き上げて来る揺れに、それまで無心に遊んでいた孫が、「オッケエー」と、目を吊りあげ恐怖のために体を振るわせて、そばにいる両親や私に、すがりついて来るのである。

「おお、よしよし。」と、孫を抱きしめてやり、揺れと、揺れの僅かな間に、阿弥陀さまの前に連れて行き、

「ホレ、ノーノ様が守つていてくださるよ。」

と、掌を合わせさせたのである。こんなことが、なん十回続いたことであらうか。

「こわくない。こわくない。ノーノ様が、見ていらつしゃるよ。こわいの、こわいの飛んでいけ。」

と、話しかけてやると、恐怖でこわばっていた幼な顔は、いつしか、安心したいつもの顔に立ちもどつてゐるのである。嫁が、

「生まれてこなければ、こんな怖い目に合わなかつたのにねえ。」

と、何気なく申したのである。私は思わず、「何を言うのか！この子は、生れがたい人間の世界に、や

つと生まれて来たのだ。人間として生まれて来たからこそ、今、尊い体験を幼ない体で感じているのだ。」

と、怒鳴ってしまったのである。

「多生曠却をへても、生まれ難き人界に生まれ……」だが故に、今、幼なくして恐怖を肌で感じた事は確かな事実である。僅か二才にして「四苦、八苦」の一つ「生苦」を体験せねばならない孫のみならず、人間として此の世に生を享けた以上、人は皆、願う、願わざるを問わず、背負っていかねばならぬ「宿命」であろう。

ならば、「人間の宿命」とあきらめ、大自然を恨み、人として生まれて来た我が身の不幸をなげき、愚痴り、短い人生を、ただよい終わってよいものであろうか。

「私は今に生きる姿を花に見る。

花の生命は短かくてなど嘆かず、

今に生きる花の姿を讚美する。

ああ、咲くもよし、散るもよし。

花は嘆かず、今に生きる。」

四苦八苦の世に生まれ、人間に生まれた喜びを噛みしめ、「死ぬも、生きるも仏まかせ」人間としての責任を少しで

も果し、生命終わる時、「ありがとうございました。」と、阿弥陀さまに、そして周囲の人々に手を合わせ、静かに、この世を去って行きたいものである。

然し、所詮人間は弱いもので、自分一人では頼りなく、さびしいものである。「支え」が必要なのである。阿弥陀如来の大慈悲、元祖法然上人の御心を「心の支え」とし、家族や、周囲の人々の相互扶助あってこそ、「生きていく」ことが、できるのではないだろうか。

大自然の猛威には、私達人間は到底、逆らう術は持ち合わせてはいない。今次伊東沖群発地震にあたり、人間の無力さを、いやという程、味わったのである。

「唯々、仏さまに御詠歌をお唱えしながらおすがりいたしました。」

と、吉水講々員の何人かの人が申しました。その通りである。理屈も何もない。唯、一心に如来さま、元祖さまに、おすがりする事しかなかったのである。

「現世利益」を説いてない浄土宗の教旨であるが、

「如来大慈大悲、わが身、わが家族を救い給え。」と、何も考えず、如来さまのお顔をじっと見つめ、手を合わせ、祈った「南無阿弥陀仏」の名号は、心の奥底から救いを

求める真実の叫びであった。理論も理屈もない、ただ無

心に念仏を、御詠歌をお唱えするうちにふしぎな事に、

一筋の光明が、心の恐怖、不安の闇を照らし、

「私には、阿弥陀さまが、法然さまが、そばについていら
っしゃるのだ。」

と、安らかな気持ちになり、間断なく突き上げてくる群
発地震の衝撃にも、心余り乱れず過ごさせて戴いたので
ある。

人間に生まれたが故に、生命終わる刹那まで、恐しさ、
悲しさの苦しみを逃れられないのなら、阿弥陀さまの大
慈悲におすがりし「死ぬるも、生きるも、仏さままかせ。」
これしかないと思う。私の幼ない孫は、揺れるたびに私
に抱かれ、阿弥陀さまを、もみじのような小さい掌を合
わせて祈った。地震も収まり静かな伊豆に戻った今も、
阿弥陀さまや、地藏さまの前に行くと、必ず掌を合わせ、
深々とおじぎをしている。

伊東沖群発地震は、これからも、いつ発生するかわから
ない。それは、群発地震の巣であるからである。

忍ぶは 弥陀のお慈悲なりけり」

(静岡教区・浄信寺)

「つきここと、辛きことをも 安らかに

青少年と宗教教育

研究部員 (近畿支部) 小田 芳隆

最近とみに青少年に対する関心が高まってきた。こうした背景には、青少年の意識や行動が著しく変化してきたことがある。

戦前の昭和十五年に行われた「壮丁検査」、戦後の昭和四十五年に実施された総理府の調査「十年前との比較からみた現代の青少年」、昭和五十五年の調査(同前)を基に、青少年の変化を時系列的に眺めてみたい。

まず、これらの青少年に対する意識調査の中に「清く正しく型」というのがある。昭和十五年には四一%を占めていたのが、四十五年になると一四・三%、五十五年にはわずかに八・二%となっている。つまり戦前は世の中の正しくないことを排除して、あくまでも自分は清く正しく生きていきたいという青少年が四一%もいたのに、

戦後の昭和五十五年になると、わずかに十%以下に減ってきているのである。

次に、「社会のため型」というのがある。これは、自身のことよりも社会の為に暮すタイプである。昭和十五年の青少年の三十%がこういう考えをもっていた。ところが昭和四十五年になると三・八%、五十五年にはわずか二・三%に減少している。そしてなお、日本の青少年の五三・三%、つまり過半数の者が社会に対して不満をもっている。

次に「趣味型」で、これはお金や名誉を考えないで、自分の趣味に合った暮し方をするタイプである。こうした青少年は昭和十五年にはわずかに五%しかいなかった。ところが、昭和四十五年になると五四・五%、五五年に

は五六・五%の多きに達している。

次に「のんき型」で、これはその日その日をのんきにクヨクヨしないで暮すタイプである。昭和十五年にはわずかに一%であったのが昭和四十五年には一八・四%、五十五年には一七・二%に増えている。ちなみに「趣味型」と「のんき型」を合わせると、昭和五十五年で七三・七%で個人生活重視型の青少年が全体の四分の三を占めていることになる。

こうした傾向は、最近の青少年の特徴の一つであるが、大きな問題は、善悪のけじめのつかない青少年が増えていることである。ここに「将来選択期（十五〜十九才）における青少年の意識」（昭和五十五年）という調査がある。その中に青少年の行為としてどのような行為が非行だと思ふか、という項目がある。

それによると、シンナーについては八五%、売春については八二%、万引は七六%、ゆすり、たかり、リンチは七四%の者が非行だと思っている。しかし、バイクで暴走するのは非行かという、これを非行と考える者は四七%しかない。異性との不純行為は三九%で、言い換えるなら約六〇%の者がこうしたことを非行とは思っ

ていない。同様に、喫煙については三九%、男女の同棲は三八%、家出は三五%、未成年者は見てはならんという成人映画は二五%、酒を飲むは二四%、無断外泊して親に心配をかけても、そういうことを非行と思う者は二%しかない。

いずれにせよ、バイクによる暴走、異性との不純行為その他、明らかに非行と思われるものでも、青少年の多くはこれを非行とは思っていない。昭和十五年当時の日本の青少年の多くは清く正しく生きようと考えていたが、それが徐々に減ってきて、最近では善悪のけじめのつかない青少年が増えてきた。

では、今の青少年になぜ善悪のけじめが欠けてきつつあるのか。それには色々な原因が考えられるが、ここでは、その中でも重要なものとして「許容社会」を挙げたい。現代の青少年が非行化し、問題行動を起こす、その一つの温床として、また土壌として現代社会がもつ許容社会という性格を、私達は充分に考えてみる必要があると思う。許容社会とは、文字どおり許容し受容する社会で、昔なら許されることが今では簡単に許され、みとめられるようになっていっている。つまり子供に対して非常に

甘くなっている。

子供に対する親の評価及び自己評価という調査では、親は自分の子供に対して、素直だと思っているのは五四・五%いるが子供は二三・七%しか思っていない。まじめは親が三八・七%に対し子供は一九・八%。正直は親が三九%に対し一七・六%の子供しか正直と思っていない。親孝行かは親は二〇・七%に対し子供は九・七%とわずかである。

しつけの厳しさについては、「非常に厳しい」「どちらかと言えば厳しい」と答えた親は両者で三二・五%で、親自ら甘いほうだと考える者が多いことがわかる。しかも、子供に対する物の買い与え方について見ると、親の認識としては「どんなものでも買い与えている」及び「どんな物でも大抵は買い与えている」の両者合わせて一六・四%となっているのに対して、子供の側から見ると「どんなものでも買ってくれる」及び「どんな物でも大抵は買ってくれる」が両者を合わせて二八・五%あり、実際には親が自分で思っているよりも甘い態度をとっていることがわかる。

こうした許容社会の教育の大きな特色に、叱らない教

育がある。現在の許容的な教育の最も典型的な代表者と言われていたイギリスの教育学者ニールの思想がある。戦後の日本に新教育としていち早く入ってきたのが、叱らない教育であった。当時新しい教育、民主的な教育を模索していた日本の教育者の多くがこれに飛びついた。これこそ、まさしくニールの教育であり、ニールは生涯子供を叱ったことがなかった。なぜかというと、子供を叱る心の底には、たとえ子供のために叱るのだとは言いがら、どうしても憎しみの心が打ち消し難く存在している。という基本的な考え方を持っていたからである。こうした考え方に立つと叱られた子供は、どうしても叱った親や教師を憎むようになる。叱るということは百害あって一利なしと考えたのである。

しかし、こうした一見良いように思える叱らない教育、大目に見る教育が結局は、子供に善悪のけじめがなくなってくると思う。こうしたニールの教育思想は今日の日本の学校や家庭においても顕著に認められ、青少年非行を生みだす土壌となっていることは、多くの教育者から広く指摘されている。

例えば、子供が盗みをしたとしよう。それに対して、

親や教師の多くは頭ごなしに叱りつけたり、処罰したりしてはいけなさと考える。なぜなら盗みは子供が自分の欲求や気持を必死で訴えている一種の信号である、という説を無批判的に受け入れているからである。そこで、子供が「盗み」でもって訴えようとしていることを深く理解してやることこそ大切なこととなる。しかし釈尊は戒律において「偷盜」と示し、「盗んではいけない」ということは、人類が長い間守り続けてきた規範である。その規範を教えることよりも、子供の訴えを理解することに重点を置くところに問題がある。それは、子供の暴力、いじめについても同様である。子供がいじめで暴力を振るうのは、何かを訴えているのであるからその訴えを理解してやらねばならない、という考え方を抱く人々は、なお依然として少なくない。そこには「いかなる理由があろうと暴力やいじめは悪である」という毅然たる教えが欠けている。このような許容的な考え方が、やがて暴力やいじめを黙認し、子供を放任することに連なり、善悪のけじめが見失われてゆくと思うのである。

釈尊は戒律を定められ、してはいけないことを強く戒められた。この仏教に善悪のけじめをつけるところの根

本がある。殺生、偷盜、邪淫等の教えは、単なる道徳や倫理ではなく、人間として守っていかなければならない道である。近代国家には法律があるが、法律は体で犯したところの罪をさばき。道徳倫理は口で犯したところの罪をさばき、人間と人間どうしの問題、二人以上の人間がいる場合に必要な規則である。しかし、仏教は心の中で犯した罪をも自分の罪として反省していく。自分一人であるときでも、自分自身の心を見つめた時に深い懺悔をするのが仏教である。

子供は愛情をもって叱ることによって、叱られた子供は悪いことを知る。するとそこに反省する心がわいてくる。このことを教えていくのが心の教育であり宗教教育である。

もとより元祖様のお念仏は還愚痴のお念仏である。この愚痴に還るお念仏のみ教えを今こそ強力に教化することこそ急務である。

参考文献

① 青少年白書 (総理府)

② 子ども白書 (日本子どもを守る会)

③ 青少年の健全育成をめざして（総理府）

④ いま青年期教育をどうつくるか

（小川勝一 埼玉県高校教育研究会議編）

（京都教区・直指庵）

自坊に於ける教化の試み

研究部員 (中四国支部) 漆 間 宣 隆

一、はじめに

私が現在住職をしております浄土院は、元祖法然上人の誕生地、浄土宗特別寺院誕生寺の山内にあります法然上人御両親菩提所の寺であります。誕生寺は、法然上人

二十五霊場第一番の霊蹟でもあり、又毎年四月第三日曜日(以前は四月十九日)に厳修されます「法然上人御両親追恩二十五菩薩練供養会式」は、岡山県無形文化財にも指定され、元禄時代より続いている行事であります。

全国各地からの参拝者も多く、岡山県美作地方の観光地として中心的な役割を昔から担って参りました。

私共の寺、浄土院もそのような誕生寺の奥の院として誕生寺と共に歩んでまいりました。

私共の寺と檀信徒との接点は、四月の誕生寺会式法要

に於ける奉仕活動と年間の定期法要、葬儀、年忌等の法要位といたって少なく、法要中も殆どお念仏の声がしない(申さない)状態で形式的な法要儀式で終わっております。

宗祖法然上人について檀信徒は、郷土の生んだ偉人として尊敬し、また上人の生い立ちもある程度は理解していますが、法然上人の説かれたお念仏の教えに特別な関心をもっているわけではなく、たまたま自分の家が浄土院の檀家だったから寺へ参るといったような有り様でした。

昔から美作地方は、真言宗の寺院が多く布教活動も活発で私共の寺の檀信徒も元祖様よりお大師様(弘法大師)に強い関心をもっており、四国八十八ヶ所霊場、小豆島霊場、観音霊場巡拝には積極的に参加をされ、中には地

区ごとに講まで組織して熱心に活動している人もいました。

また現世利益に救いを求めて新興宗教や新宗教に入信し、浄土宗のお仏壇の中にそれら教団の掛軸や位牌を祀る人や離壇してゆく檀信徒もいました。

去る昭和五十七年、法然上人御生誕八百五十年の吉辰を迎え、全国各地の浄土宗寺院で慶讃法要が厳修され、併せて慶讃事業も行われました。誕生寺も慶讃事業として全国の寺院の御協力のもと数多くの立派な施設が完成いたしました。私共の寺でも慶讃事業として、先代住職、総代が中心となって長年の夢であった本堂（元祖法然上人御両親壺牌殿）建立を檀信徒によびかけ、苦勞の末竣工いたしました。

誕生寺には全国各地より連日多数の参拝団が来山され、私もその年は、殆ど毎日のように誕生寺に詰めて参拝団の方々のお世話をさせていただきました。そんなある日誕生寺に参拝にこられたある寺院の御住職と檀信徒の方々が御影堂に於いて僧俗一体となって力強く称名念仏をされる真摯なお姿に接し、大きな感動を覚えると同時に我身を省みたととき、自分は、自坊の檀信徒の方々にど

れだけお念仏を勧めたか。どれだけ奉仕をしたか誠に慚愧に耐えない思いがいたしました。

あまりにも檀信徒に対して無責任であったことを反省し、またせっかく先代住職や檀信徒の皆さんが御苦勞の末立派に建立して下さった本堂の建物を念仏の道場として機能させていくにはどうすればよいのかと模索いたしました。

一、法話の実践

まず一つの試みとして、年間の定期法要はもとより葬儀・年忌法要の後など必ず約十分から十五分時間を設けてお念仏を中心とした簡単なお話をさせていただくことにしました。はじめのうちは、一部の檀信徒より「忙しい時に何を始めるのか」と少し抵抗や批判もありましたが、殆どの方が私の拙い話に耳を傾けて下さり、やがて回を重ねるごとに法要後すぐに席を立つ人もなく、お十念の後静かに熱心にお話を聞いて下さるようになりました。また話の後、個人的に質問される人も増えてまいりました。

二、寺報の発刊

寺院と檀信徒とのコミュニケーションを図る為、昭和六十一年三月より毎月一回寺報を発行することにした。B四判二面に法話や寺の行事案内や檀信徒からの投稿、檀信徒の近況等を掲載し、地元の檀信徒はもとより全国に散らばっている檀信徒縁の人々に送付しています。月一回の発行は時間的にも経済的にも大変ですが檀信徒にも好評で（特に何らかの理由で寺に来れない人々）また東京、大阪、九州など遠隔地に出ておられる人々からは故郷の様子がよくわかり、身近に感じると好評です。

三、百万遍大念珠奉納供養

少しでも多くの方々にお念仏を申して頂く御縁にと三人遠忌慶讃事業の一つとして昭和六十二年三月から八月にかけて百万遍大念珠供養を檀信徒によびかけ、奉納いたしました。彼岸会や十夜法要、通夜などの念仏一会の際、みんなで念仏を称えながら大念珠を繰りますので、お年寄りから子供まで大きな声でお念仏を称えて頂きますので、参列者全員が法要に参加結縁することが出来、とても効果があります。

四、別時念仏会の開催

檀信徒の皆さんにお念仏の相続策励と体験を深め味わっていただく為に昭和六十二年四月より毎月一回別時念仏会を開催しています。約五千遍の称名念仏の後、『元祖大師御法語集』（総本山知恩院発行）の各章のお言葉をテーマに約一時間、法然上人のお勧め下さったお念仏についてお話しさせていただいております。そしてお茶やお菓子を囲んで座談会をしております。別時念仏会を始めた当初は十人に満たない小人数の参加でしたが回を重ねる度に参加者も増え、各人がそれぞれ自分なりの問題意識をもって熱心に念仏行に励んでいます。（別時念仏会アスケート参照）

教化の成果と今後の課題

法要・儀式を中心とした檀信徒との関係からお念仏信仰による触れ合いを目指そうと私なりに試行錯誤を重ねつつ教化に取り組んできたことがらを紹介させていただきます。解して頂くことはなかなか困難ですが、誠意をもって継続していけば必ず理解していただけたと思います。

檀信徒の方々はあまり私達に寺の在り方、自分の心の

二、教化の試み

中の悩みなど話しませんが、一人一人が自分の生き方に

その一 法話の実践

ついて真剣に悩み考えており、単なる法要儀式だけの寺

法話の後、必ずお念仏を中心とした法話の実
践（十分～十五分）

院の活動について大きな不満と不信の念をもっており、

その二 寺報の発刊（昭和六十一年三月より毎月一回発
行）

檀信徒にとつて気軽に話を聞いてくれる住職、寺庭婦人、
いつでも気軽に参り出来る寺、身近なコミュニケーション

寺院と檀信徒とのコミュニケーションを図る。
B四判二面に法話、寺の行事案内、檀信徒から

以上を整理すると次の二通りである。

の投稿、檀信徒の近況などを掲載

一、法要儀式の会場としての寺院から念仏策励の道場として
の寺院への脱却を目指して

遠隔地の檀信徒の反応は大きい。

・浄土宗特別寺院誕生寺とのかかわり

その三 百万遍大念珠奉納供養（昭和六十二年三月～八
月）

（誕生寺）

法然上人二十五霊場

三上人遠忌慶讃事業の一環として、一人でも

法然上人御両親追恩二十五菩薩練供養会式（四月第

多くの人々に念仏結縁していただく為、法要

三日曜日）……岡山県無形文化財

の時に使用（称名念仏の助業として）

岡山県美作地方の観光の中心的存在

その四 月例別時念仏会の開催（昭和六十二年四月より
毎月開催）

誕生寺奥の院としての役割

五千遍の称名念仏、『法然上人御法語集』（総本

法要・儀式を中心とした檀信徒との触れ合い

山知恩院発行）の各章の御法語をテーマに法

←

話座談会

三、教化の成果と今後の課題

・寺院の教化に対する姿勢を檀信徒に理解して頂く為には、継続的な教化活動が必要である。

・檀信徒一人一人が自分の生き方について真剣に考え求めており、単なる法要儀式だけの寺院の活動について大きな不満と不信の念をもっていたことがわかった。

・檀信徒の中に聞法と称名念仏の姿勢が見られる。

・健康上の理由などで寺へ参ることの出来ない人々の為に寺報以外の教化の必要がある。(寺↓檀信徒宅へ)

・核家族に伴う教化の在り方。

〈資料〉

浄土院別時念仏会に関するアンケート調査

平成元年七月二十三日

檀信徒各位

浄土院別時念仏会も去る、昭和六十二年四月発足以来回を重ね、この度第二十八回目を迎えるに至りました。

これもひとえに檀信徒の皆様のご発心と御協力のたまものと有難く感謝するものであります。

さてこの度、別時念仏会により良き発展を願ひ、皆様の御意見を頂戴しまして、この会の運営に反映させて頂きたいと考えております。どうぞこの調査に御協力いただき、忌憚のない御意見をお聞かせいただければ幸いです。

〈別時念仏会参加者男女別割合(男性二二・七% 女性七七・三%)〉

回答者 性別(男、女) 年令(三十代、四十代、五十代、六十代、七十代以上) ……まるで囲んで下さい。

〈回答率 七三・三%(男性七四% 女性七三・二%)〉

三十代、四十代 ……七%

五十代 ……十三%

六十代 ……三七%

七十代以上 ……四十三%

質問一 誰に勧められてこの別時念仏会に参加しましたか?

(イ) お寺の人 (五%) (ロ) 自分から (五%)

(ハ) 友達 (二三%) (ニ) その

他 (二七%) (子供に勧められて等)

質問二 あなたがこの別時念仏会に初めて参加するときの気持はどうでしたか？

(イ) しかたなく参加 (五%) (ロ) 興味、

関心を持って (三二%) (ハ) なにかにすがりつくおもしろい (六三%)

質問三 この別時念仏会に参加してみても参加する前に思っていたより

(イ) よかった (一〇〇%) (ロ) 悪かった

(〇%) (ハ) わからない (〇%)

質問四 阿弥陀様を信ずることができるようになりましたか？

(イ) できる (九一%) (ロ) できない (〇%)

(ハ) わからない (九%)

質問五 法然上人のお言葉についてお話し

(イ) わかりやすい (七七%) (ロ) わから

ない (五%) (ハ) どちらともいえない (一

八%)

質問六 阿弥陀様や法然上人、お念仏についてこれからも学びたいと思いますか？

(イ) 学びたい (九一%) (ロ) 学びたくな

い (〇%) (ハ) わからない (九%)

質問七 自宅に帰ってお念仏が素直に称えられますか？

(イ) すなおにできる (八六%) (ロ) はず

かしくてできない (五%) (ハ) 誰かと一

緒ならできる (九%)

質問八 日課念仏 (一日のうちに申す念仏の数を決める) を実践していますか？

(イ) 実践している (五九%) (ロ) 実践し

ていない (四一%)

実践している人は

一日 (イ、一〇〇) 回以下 (二二%)

二、三回以上 (六二%) (ハ、三

〇〇) 遍以上 (八%) (ニ、五〇〇) 遍以

上 (八%)

質問九 今後ともこの別時念仏会に参加したいと思いませんか？

(イ) 参加したい (九七%) (ロ) 参加した

くない (三%)

理由をお書き下さい。

最後に別時念仏会に対する御意見、御要望を自由に
書き下さい。

・ 一生懸命お念仏を称えたり、お説教を聞いてお
りますと、とても感動して心が洗われる思いがいた
します。忙しさに追われる毎日の生活の中で、ほ
んの一時でも心から安らぎが得られ、また新しい
活力が生まれてくるような気がいたします。(四〇
代女性)

・ 自分から進んで念仏会に参加しようと思うようにな
ったら参加したい。(五〇代女性)

・ 老年の為、他人様の迷惑になるのではないかと心
配ですが健康の許すかぎり参加させていただきます、
多くの方々にお会い出来る事が幸せです。(八〇代
男性)

・ 阿弥陀様の前に座りお念仏を称えておりますと心
が洗われる感じがします。その後の法然上人様の
法話を聞くのがとても楽しみです。(六〇代女性)

・ 先祖の供養の為に念仏を称えたいと思います。

(六〇代男性)

・ お寺より日時を知らせて下さるのを楽しみにお待

ちしております。(八〇代女性)

・ 時々差しつかえが出来て参加できず、後で淋しさ
を感じます。(六〇代女性)

・ 大難が小難でおわり、お陰様と心から思うようにな
りました。(六〇代男性)

・ 家の中でも、お友達のおつきあいでもとても仲
よく、腹が立つと思つたことは別時念仏会に参加
してから殆どありません。(七〇代女性)

(岡山教区・浄土院)

「一在家仏青が今かかえる問題点」

——布教者としての立場から——

研究部員 (九州支部) 阿 部 信 之

昭和六十年の十月に発起人会が開かれ、翌六十一年の一月に発足した、会員二十六名の小さな在家仏青「コスモス」は、今日迄細々ながらどうか活動が続けてきた。発足以来四年を経ていろいろな問題が出てきたが、今回は、寺の住職として、つまり「お念仏を広める側」に布教者としての立場からの問題を考えてみた。こまごまとした問題を整理すると、つまるところ次の二点に集約される。

(一)、会員の活動ニーズに「お念仏の教えを聞きたい」が少ない。

(二)、お念仏をすすんで唱えようというようには、なかなかならない。

結局、(一)は信にかかわる事であり、(二)は行の問題で

ある。在家仏青の活動形態には、いろいろなタイプがあるが、究極の目的は「念仏弘通」である事を忘れてはならないと思うのである。住職がインサイドリーダーとして参画するか、アウトサイドリーダーで居るかによって多少の違いはあっても、「念仏を申す」というメインテーマを住職は常に心に留めておくべきでありそうした方向に向くべくリードすべきである。

こうした考え方に立った場合、参考(2)の月例会の内容を参照するとすぐにわかるのであるが、「お念仏の教えを聞きたい」という姿勢は、四年を経てもあまり見られない。又、(二)の問題点についても、月例会の最初の三十分は、来た者から逐次、

木魚念仏をするのだが、「お念仏が喜べるように」などという事はほど遠いものである。最近四十代の女性が「お念仏を申すとても気持ちがいい」と言ってくれる様になったが、他のほとんどは「足が痛い」が実状である。

この二つの問題点について「なぜなのかな」と考えてみると、次の三点が考えられる。

(一) 永年、回向中心の檀務が続いた為、「念仏や宗教儀式は回向の為のもの」という考え方を根強く植えつけてしまった。

(二) 宗教的情操基盤が変化した。

〔法然上人の時代〕 ↓ 〔現代〕

ア、己の罪を悔い ↓ 己の行いには関係なく、良い事があるように願う

イ、現世を厭い ↓ 自由で豊かな現代を楽しんで生きようとする

ウ、死を恐れる ↓ 死はまだ先の事であり死後はあまり心配しない

救われたいという意識の切実さが無い。

(三) お念仏が易行である事が、逆にマイナスに作用して

いる点がある。(禅や祈禱の流行を考えてみるに、効き目が無いと考える。)

以上の三点は、「コスモス」会員だけの事ではなく広く一般的な若者を考えての事である。

以上の問題点、如何に対処していくか、解決策などというものではないが、

(一) 人として、より良くより正しい人生をおくる為には、自行としての念仏が必要なのだという事を力強く説く必要がある。

(二) 回向の念仏ではなくて、自行の念仏を申す「場」をより多く企画する。

(三) 近隣の仏青と、共同で行事を企画する。

こうした努力を重ねていく事が大切ではないか。そんな気がするこの頃である。

(大分教区・安養寺)

平成元年度

教学布教大会一般発表表

高齢化社会に於ける布教考察

田中 信道

日本は今や「人生八十年」の時代を迎えておりますが、古来長寿というものは、人類が望んでいた大きな願いの一つでそれがある程度なかつた今日、皮肉なことに喜びよりもむしろ不安がつり、社会に又家庭個々人において様々な問題を投げかけている。高齢化に拍車がかかっている将来にかけて、その対応に苦慮しているのが現状のようです。

私が今回この問題を取りあげたのは、私が現在民生委員として社会福祉に関係している立場から、特にこの問題が信仰心抜きで語られても、肝心の老人の眞の悩みに手がとどかないはがゆきを感じているからです。更に、高齢化が進めば進む程、老人層だけでなしに、青壮年層においても老死の問題を我事として真剣に考えざるを得

なくなる。つまり超高齢者社会になる約二五年先には、四人に一人が老人という超老人社会となるといわれている。加えて福祉も「施設福祉」から「在宅福祉」へと現在移行しつつありますので、老人と共暮しの生活が増加してくる。このようなことから、青壮年層も、老死の問題が他人ごとではなく、生老病死の苦からの解脱が原点である仏教に耳をかし、生活の中で老死の問題を受け入れざるを得ない地盤、環境を今社会がつくってくれているということだ。

さて、今老人福祉などで「豊かな老後」をおくる為、老人の四悪を追放しなければならぬといわれています。その四悪とは一、孤独、二、病氣、三、貧困、四、無為という四つです。行政・医療からの援助でカバーできて

いく面は勿論ありますが、よくこれらを見てみると、その根底に流れる苦とは表に現われる形は違いましたも、最初にあげられている孤独の苦しみであろうと思います。例えば病になる、特に老人の病気は死と直結している場合も少なくありませんし、完治もむづかしい。家族を残し一人死んで行かなければならないという孤独感。又、貧困については今は食べられないという貧困はないが、現役から退き充分な収入が得られず、以前のように家計を助けたり、子や孫に小遣いも与えられない。金銭・物品を与えることのできないところからくる孤独感もある。又、無為即ちすることがなく、老人だからといったのけ者にされているように思える孤独感もある。

このように老苦の根底に潜んでいる苦しみの最大のものとは孤独であろうと思います。一般には孤独とは淋しいもの、と云うことだけでかたづけられてしまっているが、決してそんななまやさしいものではない。古い仏典では八寒・八熱・孤独の三地獄を掲げ、身体への罰に対し、心の罰として孤独を述べている。又、源信の『往生要集』にも八大地獄を明らかにしておりますが、刑罰を待つ人間には八大地獄とも共通点がございます。それは一人び

とりに生気が全くなく、一人ぼっちであること、頼る者なき寂しさが最も恐ろしい本当の地獄であると、源信は孤独の苦しみを言葉では語ってはおりませんが、それを行間に漂わせております。動植物にとって孤独は死を意味し、現代人にとっても孤独は社会的な死を意味している。

最近又、交通事故が増えてきて第二次交通戦争と云われているが、昨年度交通事故で尊い生命を亡くされた方は、一〇、三四人となっている。一方かくれたところで、この交通事故死をはるかに上回る数で尊い命が亡くなっている。それは自殺である。交通事故の倍以上即ち二、三、七、四二人、その内六十才以上の自殺者が八、〇四人（約三割）に達する。今まで御苦勞されてきたその老人が、自から命を断つ、残念というよりもショックにさえ思える。その原因の第一は病気であり、第二が精神的な問題、第三は家庭問題、と先程の老人の四悪にあてはまる。つまり孤独の苦しみが社会的なだけでなく、時には実際の死にまで追いやっている現実を認識しなければならぬ。

当然福祉の方面でも、この孤独の恐ろしさに気づき、

老人の仲間づくりとか、又、ホームヘルパーが独居老人に電話で話しかけるといった仕事が目ざされだしてきている。しかし真に孤独の苦から解放されるには程遠いものを感じる。

亜細亜大学講師の生野善応先生が、以前大法輪で『ナムアミダブツ』新考というテーマの中で、「法然上人の時代、戦乱、横奪、疫病流行の洛中であって、傷ついた武士、未亡人、路傍に佇む老人、疫病の人、孤児など孤独な人々の群れの中で、法然上人が説かれた「何も考えずに、只南無阿弥陀仏を称えて、ほとけさまにおすがりなさい」という教えは、『一人ぼっちではない』という気持、『支えてもらう』という安堵感、『ほとけと一緒にいらしてもらおう』という決心を人々に与え、最も確実に有効なコミュニケーションの手段として歓迎されたのではないか。」とっておられるが、今の日本には戦争こそありませんが、交通事故の多発、環境破壊、核戦争の潜在的危機感、エイズなど新形難病の発生流行、社会道徳の低落など、このような現実を考えると、人間性が衰弱し、人同志のコミュニケーションは充分に期待できない、法然上人がお出ましになられた時代とよく似ているので

はないかと思う。

布教の面でこの孤独こそ地獄の相であることを訴え、仏と共暮しのできる念仏信仰に導いていかなければならないと思う。

一方現代人は余暇が増え、又、高齢化社会になってきているだけに、趣味等を通し、生き甲斐をつかもうとしている。例えばカルチャーセンターとか趣味の会が盛況であるというのも、これを裏づけていると思うが、一般に生き甲斐とされるものに、趣味とか仕事、財テク、家庭、ボランティア活動など種々あげられるが、我々の立場から見ると、信仰に裏づけられた生き甲斐に対し、これらは一時的な、又、仮の生き甲斐であると思われる。しかし布教の現場で、ある人が今現にある事に熱中され、それを生き甲斐と思っているのに、それは一時的な仮の生き甲斐と決めた話をしてしまうと、逆に反感を持つたれ、こちらの真意を受け取ってもらえない危険があると思う。

熊本にある、老人の『生きがい事業』をやっている所のことですが、趣味がそのまま生き甲斐になるというのは非常に少ないということである。趣味にプラスαがな

ければ生き甲斐にならないと言われている。ある老人は陶器をつくっており、そのつくった物を友人や知人、家族にどんどん進呈するのを楽しみにしている。しかも最も良いものから贈る。この方は陶器を造ることそのことよりも、人に喜ばれることを生き甲斐としている。仏教でいう布施行ですが、同じ趣味でもその持ち方によって、仏教の心に通じることができる。このようなところから信仰に導き、真の生き甲斐にめざめさせていくというように教化する者にとって、特に老人には柔軟な姿勢でのぞむことが必要であろうと思われる。

ともあれ、老人問題で最も重要な精神を指導する立場にある仏教に於いては、今後この方面に関する教化方策を研究し徹底していかなければならないと思う。

参考文献

『ナムアミダブツ』新考 生野善応大法輪第55巻
『高齢化社会と自治体・地域』 ぎょうせい

(大阪教区・乗雲寺)

個に根ざした布教を求めて

細谷 教雄

一昨年まで高校教師をしていて、ある生徒から大変貴重なことを教えてもらったことがある。

アル中の父親に絶望して母親は蒸発し、代わって明治生まれの祖母の手で育てられた生徒がいた。祖母は近所の若い母親から乳を分けてもらい、孫である生徒を育てていった。父親は相変わらず稼いだ金を酒に使い、一家は生活保護を受け、家庭訪問をしても今時このような家庭がまだあるかと思われほど悲惨をきわめていた。しかしそのような環境にあっても、生徒は非行に走ることもなく、祖母の小さな愛を一身に受け真面目で勤勉な生徒であった。そのような彼を我が家に招いたり、放課後など面接をして励まし、困ったときは何時でも相談に乗るからと話すがあったが、その時彼の口から「先生、

俺よりもつと暮らし向きの悪い人に申し訳が立たぬから下手に同情しないでください」といわれ、はつとさせられたことがあった。

この生徒以上に暮らし向きの悪い人が他にいるはずもないのに、そうした人に申し訳が立たないから同情しないでくれというやさしさはどこから生じてくるのかを考えさせられた。

結局、自分自身が深い悲しみ苦しみを経験せずして本当のやさしさをもつことはできないことを私は教えてもらえたのである。

仏教では同悲同苦の心もち抜苦与楽をあらわすものとして慈悲の心が説かれているが自分自らが悲しみ苦しみ、そして深い絶望をくぐり抜けていった時に、はじめ

て同じ立場にたち他人の苦しみ悲しみによりそう慈悲の心が生れるといえるのではないか。

考えてみると、宗祖である法然上人の人生の前半は悲しみと苦しみの日々であったと思われる。九才の時に父親と死別し、その遺言を果たすため十五才にして比叡山に入られ、そのことにより母親とも生き別れる、その会者定離の悲しみは察するに余りある。そしてその後、開宗にいたるまでの日々は、「かなしきかなく、いかがせん／＼」といった内なる叫びからも苦しみに悩みうちひしがれた上人の心の世界が痛いほど伝わってくる。上人はこうした血涙を伴う深い絶望を御自身でのりこえていかれたからこそ、慈悲の心を持たれて念仏の御教えを広めることができたのではないだろうか。九才の時の難には敵人を恨まず、七十五才の四国配流にあつてはこれを朝恩といただくおおらかな人柄、そして漁師や室の泊りの遊女教化など、それぞれ同じ立場にたち、相手の悩み苦しみを抜き取り念仏による救いの道を説かれる姿がそこに感じられ、私達は現代においてもこうした視座に立つての布教を心がけていくべきではないかと思う。

釈尊の説かれた五種の説法にも「慈悲心をもって語る」

ことが説かれ、さらに知恩院の布教師十訓にも「慈悲心に住せよ」とうたわれてある。決して上下関係といったところからではなく、相手と同じ立場に立ち相手によりそう慈悲の心をもった布教が一番求められるのではないだろうか。

現在、私のところでは毎月一回念仏講を開き念仏のあと、私なりに出世間を説き、極楽浄土への願往生心や、念仏高揚の心を養う布教をやっているが、出席者といえば檀信徒の二割に満たぬのが現状である。残りの八割の人をこうした高座での布教に導くためにはやはり個人に根ざした布教を根気強く積み重ねていくこと以外にないと考えた。幸いに教職を退いたのを機に、檀信徒の家庭訪問、檀信徒と気軽に話す寺での懇話会、仏事のあと慰め、ねぎらいの葉書による通信、寺報における檀信徒インタビューなどを実施しているところである。

今回は時間の都合で家庭訪問についてのみ取り上げた。檀信徒を訪ねてみて、人は見えぬところで苦しみ悩みながら生きていることを改めて知らされた。

嫁いだ娘さんが実家に帰り自殺した。四十九日までの間、私は葉書を出したり、折につけ訪問をし、こちらから

ら語ることは一切せず香を手向けるだけにし、専ら両親の悲しみ苦しみの声を聞きとることに努めた。そこで聞かされたのは、両親の後悔の心と嫁いだ先への憎しみであつた。喪が開けて私から、憎しみからはなにも生れぬことなど、法然上人の父親の遺言などの例をあげて話し、

今は娘さんの往生のために一緒に念仏することの大切さを説き、と同時に両親の愛別離苦の辛さを受け止め、その悲しみを共有することにとめた。奥さんはその後念仏講に欠かさず出るようになり、父親も一周忌の時、「時の流れとは有難いもの。やつと仕事にも打ち込めるようになれた」と話され、生きていることの証しは「変わる」とあることを痛感させられた。

また、校長をしていた最愛の夫を癌で失われた奥さんがいた。看病疲れもあつて、その後、足が不自由になり思うにまかせず動けぬ生きざまを業と責め立てる日々であつた。私の家内は冬など、一人住いのこの女性を思いやり暖かい料理をこしらえ届け、励ますことも度々あつた。幸いにこの女性は若い時より短歌に親しみ、私はそれをとつして彼女の世界に寄りそうことができた。主人の納骨の頃、次の歌が編まれた。

土に化すきみと思いき墓穴に

白骨おろすはまさびしきかも

一人住みてこの境遇に遊べやとぞいう

亡き夫か涙出で来ず

こうした歌にふれながら、三法印の諸行無常のことを話し、人は逆境に立たされて初めて四苦八苦して生きる自己に直面することなどを語りあつた。この婦人は様々な挫折と絶望のなかで悲しみの器を深め、結果としてそのことにより主人に甘えていた過去を振り返り、一人で生きる強靱さを身につけていく。やがて、一条の光りがさしてきたものか、

一切は空なりと知るかの日より

われに見え来し一本の道

という歌が生れた。彼女はおびただしい短歌をつくることにより、一つの無常観を経て、結局は大いなるもの自分の身をまかせる一つの諦観をえた。やがてそれらは一冊の歌集『時は還り来らず』となりこの春出版された。私は仏教で言う「逆縁の恩寵」という題にして歌集の感想文をまとめて彼女にさしあげることができた。

さらに、一人娘を嫁がせ、そこで世話になっている老

母の悩みを聞くことがあった。娘夫婦不在の折、その老母から自分の家とは関係のない仏壇は置かないでくれとか、死んでからお墓の面倒は見られないと娘夫婦に言われていることなど、涙ながらに話された。将来誰からもみられず荒れ放題になっていく自分の墓を想像しているその老母の辛さ、寂しさが私の心にも十分重なりあうものがあつた。

考えたすえ、私は阿弥陀経の「俱会一処」の言葉を依りどころに、お墓はあくまで生きた者の目に映じる形にすぎず、亡くなれば人はすべて浄土に生れ、一蓮托生の身となれる、そうした考えに立てるなら、御先祖の遺骨は寺の納骨堂におさめてはどうか、寺の者がいつも花を入れ香を手向けてくれるから心配することもないとすすめる、涙を流して「お世話になつてもいいですか」と安心される。

現代は一人娘の家や核家族が多くなり「双系祭祀」を正面にすえて取り組む時代ともいえよう。このようにして失敗もあるが檀信徒の家庭訪問を続けているところである。

平成元年の布教指針の一つに「苦者に安樂を与え、死

生ともに悔いなき人生を得せしむ」という言葉がみられる。これははたして高座からの布教によつて実現できるであろうか。

私は現在、宮城刑務所の教誨師をしているがある先輩教誨師の方に「我もまたつながるる」とく囚人をおもえ」という素晴らしい言葉がある。双方が同じ立場に立つて苦を分かちあわずしてこうした布教方針を成し遂げることは出来ないといえよう。

釈尊には対機説法という言葉が、法然上人には機根という言葉がある。これらの言葉の持つおもみを私達僧侶は布教のなかでもっともつと生かしていくべきではないだろうか。

国会議員に占める二世議員の割合が四割に達しようという状況になっていることが朝日ジャーナル（九月八日付）に掲載されていた。

このことは結果として、現在の政治における自浄力というか、自己革新能力がいかに乏しくなってきたかを裏付けているといえよう。

言論という説得術をもつて政策を訴えかける練磨の場が失われかけているのは寂しいかぎりである。

それとほぼ同じようなことが私達僧侶の世界にもいえるのではないだろうか。在家出身の布教師の方の言葉が、何と慈愛に満ち個に寄りそう布教をされている反面、私達二世の僧侶の布教がややもすれば教義解説一辺倒の乾ききったものにおちいつてはいないだろうか。

現在という状況において、私達は檀信徒の苦しんでいる人々の個に寄りそい、その痛みの声を聞きながら同悲同苦の心を養い、それを基盤とした布教を求めていかなければいけないと思う。

(宮城教区・当信寺)

生命倫理問題と仏教

藤 木 雅 清

はじめに

筆者は、本宗若手教師を中心とした生命問題を考える会であるD・E・S——臨死問題研究会——を主宰する者である。本教学布教大会においては、一昨年は「D・E・S——臨死問題研究会三年の歩み」と題し、会活動の報告と課題を発表、昨年は「既成教団は現代の生命問題に対応できるか」と題した現実的な問題を提起した。本稿は、これらのいちおうの結論として、標題のテーマについて会活動から感じていることを述べるものである。

生命倫理問題が世に問うていること

今日、盛んに論議されている生命倫理問題（この名称が適当か否かについては前号の拙稿参照）とは、狭義には、医療現場における患者の権利問題を内在した問題群すなわち脳死と臓器移植、安楽死や尊厳死、体外受精や人工受精、出生前診断、等々であり、広義には、公害、環境汚染に及ぶ人類生存の問題であり、さらには、人類以外の生物の生命をも尊重するエコロジカルな立場もふくむものである。総じては、現代文明、なかんずく科学技術がもたらしたもので、地球生命圏の存亡をも左右しかねない選択を迫られている問題群といえる。

そこでは、個々のテーマについて、何が問われているのだろうか。

かつて、筆者は、この生命倫理問題について、その本

質は「個々（人）の選択が求められる時代」（『浄土』一九八九・一〇）であると述べた。つまり、個々人が個々人の生死観に基づいて選択すべき生き方の問題であるととらえたのである。

しかし、現在、問われているのは、このような個々人の選択の問題としてばかりではない。むしろ、個々人の生死観やそれに基づく選択は尊重するという立場を残しながらも、そこには、人類はどう選択すべきかという問いかけがあるといえる。制度づくり、ガイドライン作成、ひいては法制化の提起などの動きは、まさに個々人の選択というより人類の共通選択という面を如実にあらわしているといえよう。そこにこの問題の難しさがあり、多くの結論なき議論の展開がある。

これももし、個々人間の問題でしかないなら、どんな論議になっても是々非々それぞれの立場を尊重すればよい。しかし、問われているのが、多くの人間が共通の場所で生活する上でのルールづくりということであれば、これをどうとらえればよいのか。生命の問題に本質的に関わらざるを得ない宗教者、仏教者としてどう考えるべきなのか、これが本稿のテーマである。

なぜ仏教教団は無言なのか

欧米における宗教教団は、新たな生命倫理問題に対してしばしば明確な見解表明をしてきた。一、二を例示すれば、つぎのとおりである。

体外受精、代理出産許されぬ／ローマ法王庁・人工生殖で厳しい見解（『サンケイ新聞』一九八七・三・一一）

生殖技術に対するバチカン指針への反応—米国、西欧カトリック諸国の場合（広瀬洋子、『生命・人間・社会』二—三、一九八七・九・二〇）

しかし、仏教教団からのかかる見解表明はなされていない。なぜか。

まず、これらの問題におけるわが国の仏教界との接点を概観しておきたい。

ここ数年、ごく少数の学者および僧侶が個人的に意見を述べているにすぎないのが現状である。教団ではない。また、多くの場合、厚生省の委員会などで仏教の立場で意見をのべるのは学者である。日々、檀信徒教化を実践

している僧侶ではない。「脳死に宗教界は見解を示せ」という投書（『サンケイ新聞』一九八八・一・二〇）にも、筆者以外の投稿はなかった。

かつて筆者は、このような現状に対して疑問を抱き、生命倫理問題に仏教者として見解を示すことを会活動の柱のひとつとしてきた。そのために、ここ数年、積極的に雑誌などからの執筆依頼に応え、講演し、学会、研究会などで発表してきた。その結果、導き出された結論とは何か。「社会が求めていることと仏教」という観点から述べていきたい。

「社会の枠組みづくり」の意味

生命倫理問題において社会が求めているのは枠組みづくりである。このことについて、脳死と臓器移植の問題を例に述べてみたい。

脳死問題とは、「脳死という状態は死というポイントの前か後か」という問題である。「脳死に賛成か反対か」という問いは、「脳死状態をすでに死後と考えることに賛成か反対か」という問題である。たんにこれだけのことで

あれば、賛成と反対で大きな問題が生ずることはない。死亡日時が変わるぐらいであろうか（これによって遺産相続権などの法的問題が生ずる）。

しかし、いま脳死問題が論議されるのは、臓器移植（より新鮮な臓器の需要が生ずる）に関連して論じられているからであり、そうであるなら、賛成か反対かは大きな差となる。なぜなら、脳死状態からの臓器移植ということになれば、脳死を人の死とする立場からは、ひとつの医療行為（臓器移植を医療行為と考えるかどうかについては別の議論がある）にすぎないが、脳死はまだ人の死とはいえない、つまり生きているとする立場からは、臓器を摘出することによって死に至らしめることになるので、個人の選択に委ねるなどとはいってられない。

現実に、脳死を人の死とすることに反対しているグループ「東大PRC企画委員会」は、脳死状態から臓器移植されるたびに告発している。そのためか、臓器移植推進派の医師もなかなか踏みきれないでいる。司法も結論を保留しており、各医学会、弁護士会などでの見解も区々であるが、九州圏、関西圏などのネットワークづくり、脳死判定施設および臓器移植実施施設の限定化、国会に

おける法制化など、外堀を埋めるような周辺制度の整備は着々と進行中である。

当事者でない筆者からみると、周辺制度などの裏付けを得なくても、また法律のお墨つきがなくても、推進派の医師は、たとえ訴えられても己れの信じたこと、よかれと思ったことをするといった気概をもって移植に踏み切ればよいと思う。それがプロフェッショナルというものでないだろうか。

すべては「往生のためになるか」

これまで生命倫理問題における枠組みづくりという社会的課題について述べてきたが、仏教者はこの問題にどう取り組むべきなのだろうか。

先に例示した脳死問題について、たとえば經典からの引用、教義解釈などからは是の立場、あるいは非の立場を導き出し得たとして、はたして、そこから救いが得られるだろうか。生命倫理問題でコメントしている仏教者(学者もふくめて)は、ほとんどこの弊に陥っているように思える。筆者もこれまでそうであった。しかし、どんな

教義から導き出した結論であっても、現実には脳死者に接した場合、そこにさまざまな人生を経た家族がいて、さまざまな感情をもって取り囲んでいるとき、それは何の救いにもならないのであろう。

毒矢の比喩のとおり、いちばん重要なことは何かということである。それは状況によって変わることもある。なぜ釈尊は対機説法を示されたのか。それは人によって、状況によって選択は変わるべきだからであろう。

仏教の目的は解脱である。往生である。われわれ仏教徒にとって選択の基準はただひとつ、「それが往生のためになるか」でよいはずだ。法律も制度も、多くの人間が住んでいる社会がよりよく機能するためのものにすぎず、生きていること自体が不合理、不条理なのに、人知が普遍化しようとしているにすぎない。この不可思議な生命の問題について普遍化できるのは法(ダルマ)だけである。この立場で生命倫理問題を考えるとき、社会的要請に仏教は見解を示すことはできない。

(東京教区・貞源寺)

宗教とニューメディア

水谷 浩志

現在アメリカで通称テレビバンジャリストと呼ばれるテレビ伝道教団の存在は、宗教とその伝達手段としてのメディアとの間に新しい関係がもたらされつつあることを我々に予感させる。彼らは情報社会における最新技術である通信衛星やケーブルビジョン等のニューメディアを用いることによって、従来からも行なわれてきた既成キリスト教団のテレビによる伝道方法に革新をもたらし、アメリカ全域を結ぶテレビネットワークを成立させた。いつどこに居てもテレビから神の福音に接することが出来るといった手軽さは、アメリカ人のなかに多くみられる「教会に行かない」キリスト教徒たちをとらえ驚くほど教線を拡大し、今やアメリカの宗教界において相当な影響力を持つ存在である。しかし、これらのテレビ伝道

教団に関する研究が明らかにしているように、彼らはテレビというメディアをその成立基盤としているため、番組の構成や伝道者のパーソナリティ（場合によってはその「カリスマ性」）に重点がおかれたり、視聴者の理解を優先させるあまり教団の本質にかかわる教義が単純化し、本来強調されるべき他教団との相違が減少しつつあるということが指摘されている。我々がこの事実を通して注意しなければならぬのは、布教の一手段としてテレビを選んだ新興教団の成功物語などではなく、テレビというメディアの存在無くしては成り立ち得ない教団が存在するという事実である。ニューメディアによる新しい布教形態がその教団形態そのものを左右するというこの現象は、メディアが宗教の本質に深くかかわる時代の到来

を物語るものといえる。

アメリカの宗教テレビについては既に多くの研究がなされていることでもあり、本論では現在ニューメディアの分野で注目を浴びつつある通称パソコン通信と呼ばれるニューメディアを対象として宗教とメディアの関係の考察を進めてみたい。

パソコン通信とはここ数年來価格の低下と高性能化に伴って急速に需要をのばしてきたパーソナルコンピュータと電話回線を接続することによって、従来のメディアでは得られなかった新しい形のコミュニケーションのネットワークを実現しようという試みである。家庭にあるパソコンとデータベース化された大型コンピュータを電話接続することにより、今まで個人用パソコンでは扱うことの出来なかつた大量の情報の入手が可能となり、同様に結ばれている多数のパソコンとの間の多対多の情報交換も容易となる。その結果、世界中のパソコン使用者と隔たれた距離に関係なくネットワーク上での電子会議が可能となるし、データベース上に蓄積されている膨大な資料から自分の欲しい情報をわずかの間に検索して手に入れることで、図書館に出向くことや自宅や会社に

大量の資料を置くことも必要なくなるのである。このようにパソコン通信は個人レベルで情報資本を存分に活用しうるメディアとして、正に情報化社会の時代の要請に答えるメディアといえる。

これより宗教団体が一般への布教伝道の手段や教団内の情報交換の手段としてパソコン通信を用いている例をパソコン通信の先進国であるアメリカの現状から具体的に紹介してみたい。

現在アメリカにはクリスチャンBBS⁽¹⁾と呼ばれるキリスト教教団が運営するパソコン通信ネットワークが多数存在する。その中にはアメリカ有数の大教団合同教会が運営する「プレスビネット」のような大規模ネットワークから、一教会あるいは聖職者が個人的に主催する草の根ネットワークまで、それぞれ特色を生かした独自の活動が見られる。各BBSの主な内容を取り上げてみると、本山教会から支部教会への事務連絡や一般信者への教会主催の催し物のお知らせに始まり、オンライン説教、聖書の勉強会、カウンセリング、特定のテーマ(例えばエイズとか墮胎問題など)について話し合う討論会等、多彩である。また特に聖職者間では聖典研究の資料を提供し合

ったり、説教の種本を紹介し合ったり、場合によっては節税対策のような教会経営のノウハウの交換といった実利面においても利用されている。また信者同士の間でも活発な通信交流が見られる。パソコン通信は通信距離を問題にしない即時性・同時性を備えているため従来の教会と信者のように介在した地理的・時間的な制約の幾つかを解消する事が出来、またテレビや新聞のような一方通行の通信とは異なり双方向性を持つているため、信者側のニーズがフィードバックされ、その運営に反映されていくといった柔軟な構造を有している。従って今後も教会組織内において様々な新しいコミュニケーションの在り方を築き上げ、ひいては教団そのものの形態にも変革をもたらす可能性を有するメディアといえる。

またこの他に特定の宗教教団とは関係ない所でもパソコン通信と宗教が関わることもある。アメリカには何万という会員の為に様々なサービスを提供している大規模商業ネットワークが存在するが、その中には特定の分野に興味を持つもののグループが幾つも形成されている。そしてその一分野として宗教が取り上げられている例がそれである。これは特定の教団に属する集団ではないの

でキリスト教に限らず、ユダヤ教やイスラム教、仏教も含めた東洋の宗教などについて超宗派的立場で各自が語り合い一緒に考える場所となっている。ここでは各宗教の専門家である大学研究者や聖職者なども顔を見せ、非常に水準の高いものが作り上げられている。このネットワーク上の集いはあくまで興味と問題意識を主体としたものである。特別な目的や方向性はないものの、コンピュータネットワークを通して生まれた宗教に関わる新しい形の共同体として既成教団の従来の在り方を問う材料を提供することも考えられる。ここに挙げた二つの現象はパソコン通信の普及率の高いアメリカにおいて顕著であるが、既に日本国内においても同様の試みが始まっており、決して特殊な実例として退けることは出来ない。

以上みてきたように現在の情報社会は新しいメディアを通して宗教と個人の従来の関係を解体し再構成していく可能性を秘めている。高情報化社会へとひた走る姿が現在の趨勢であるならば、宗教がその流れとは無縁であるということとはあり得ない。ニューメディアの利用が、最早布教伝道手段の選択という次元だけで捉えられるべ

きものではなく、宗教の本質に関わる問題を内包していることに自覚的であればならない。

註記

- 1) Bulletin Board System (公開電子掲示板)の略、ネットワークを運営する組織の意味で使われている。
- 2) CompuServeのReligion ForumやGenieのReligion & Ethics Round Table等が活発な活動を行なっている。
- 3) 既に浄土真宗本願寺派が「真宗ネット」という名でネットワークを運営しているし、商業ネットワークNifty Serveにはオンライン仏教寺院「ビハーラ」と呼ばれる超宗派の集いがある。

(三河教区・法雲寺)

平成元年度

浄土宗教学布教大会意見発表表

現代人極樂をどう説くか

(II)

〈発表者〉

教学院代表

仏教大学教授

藤本

浄彦

布教師会代表

東京教区栖岸寺

佐々木

康秀

〃

山口教区快念寺

樹下

戒三

〈助言者〉

仏教大学助教授

三枝

樹隆

善

〈司会者〉

布教師会

東京教区正受院

正村

瑛明

意見発表

司会 私は司会をおおせつかりました東京教区豊島組正受院正村瑛明と申します。テーマに沿って真摯なご意見を交換し、そして明日への信仰の糧として、お互いに啓発できる場で時を過ごさせていただけましたら、本当にありがたいと思います。

司会の立場といたしましては、交通整理ということ、進行をおおせつかります。そういう意味では、フロアの諸先生方のご協力なしには、この会が盛り上がり過ぎてまいりませんので、どうぞひとつご協力のほど、よろしくお願いいたします。

テーマは、ご案内のとおり、「現代人に極楽をどう説くか」、これは昨年にも続きましてのテーマでございます。昨日、シンポジウムもございましたが、現代人の置かれている状況といえますものは、様々な側面から浮き彫りにされているわけでございます。端的なことを申しますと、昭和六年の平均寿命が四十歳でしたが、今日では八十歳と、もう倍近く寿命が伸びております。そのなかで、いろいろな問題が起きております。そういう時代背景のなかで、時代を超えた問題ではございますが、「極楽をどう

説くか」という、われわれ一住職、念仏者として、やはりしっかりと押さえておかなければいけないテーマだと存じます。

それでは、早速、先生方のご紹介をさせていただきます。教学院代表で仏教大学教授藤本浄彦先生、布教師会を代表されまして、東京教区城西組栖岸院佐々木康秀先生、同じく布教師会を代表されまして山口教区周南組快念寺住職樹下戒三先生でございます。仏教大学の三枝樹隆善先生に助言者としてお役を担っていただくことになりました。よろしくお願い申し上げます。まず最初に藤本浄彦先生からご意見の発表をお願いします。

藤本 ご紹介いただきました藤本でございます。

「現代人に極楽をどう説くか」という課題であります。が、私自身、ご覧のように若輩者で未熟な者であります。一方で、仏教大学に奉職しながら、若い学生たちと共に勉強している身であると同時に、京都の小さな町の小さなお寺の住職としての活動も、まがりなりにもさせていただいている者であります。教学院代表というような肩書がつきますと、いささか困惑するのですが、私自身の個人的な立場、または私の意見ということで、与えられ

たテーマに関しまして、私の意見を述べさせていただきます
たいと思いますので、よろしくお願いいたします。

まず、このテーマですが、「現代人に極楽をどう説くか」ということは、二つか三つの意味合いがあらうかと思ひます。「現代人に」という場合の現代人は、実をいうと、私を除いてはあり得ないというぐらゐの、つまりここでいう現代人は私というように考えるべき筋合いの面もあらうかと思ひます。これが何か、現代人となるとむこう側にあつて、それで自分は違ふんだ、という発想では、この間には成り立たないということが一つあります。それはどういふことかといふと、どう説くかといふことは、私がどうとらえているか、といふことにならざるを得ない、いわば私が私を語らなければいけない、といふ方向にならうかと思ひます。

したがしまして、このようなテーマが出てくるということとは、われわれの常なる課題であり、浄土教徒としての永遠の課題であらうかと思ひますが、とりわけ現代といふことに立ちますと、二つの点で、私たちはひよつとしたら忘れてゐることがあるのではないかと思ひます。浄土宗徒として忘れてゐることがあるのではないかとい

うことです。

法然上人の求道の道筋を伺いますと、例えば、「かなしきかな、かなしきかな、いかがせん、いかがせん。ここに我等ごときは、すでに戒・定・慧の三学の器に非ず。この三学のほかにわが心に相応する法門ありや。わが身に堪えたる修行やあると……」。このような問いかけといふことです。そして、いま一つは、「われ浄土宗を立つる心は、凡夫の往生を示さんがためなり」といふ、法然上人の観点であります。つまり、われわれ現代人は、果たして、法然上人が語っておられるような点に立ち得るかといふ問題、私が立ち得るかどうか、といふことであらうかと思ひます。現代はまさに非凡夫性、凡夫といふことに関して、非凡夫性といえるような状況があるといふことが、ひとつ問題点として浮かび上がつてくると思ひます。

もう一つは、法然上人の教えが時機相応の教えであり、対機説法された教えであるといふことについての問題であります。法然上人の教えで時機相応といふことは、はたしてどういう意味なのかといふことです。例えば時機相応なのだから、法然上人の教えを現代の物差しで計つ

て、そしてその有効性を取り出せばいいじゃないか、と
いうような意味での時機相応ということなのか、または
常にその時代を貫く教えであるという意味での時機相応
つまりその場合には、法然上人の教えというものが常に
物差しになって、常にそこに求める姿があつて、そして
現代というものを考えていくという、この二つの問題が
必ず出てくると思います。

この二つの問題をどういうふうにとらえていくかとい
う方向を、少し整理しておく必要があると思います。今
申しましたように、非凡夫性、つまり現代人というのは、
自らが凡夫だと思ふことができないような状況、また思
わなくても済む現実の生活をしているんだ、ということ
を目の前にしたときに、一体われわれ浄土宗教師はいか
なる考え方に立つかという、最も具体的な問いがそこに
現れてくるということです。しかし、どこまでも宗祖の
教えを血とし、肉とする信仰に立つという私たちの心か
らいきますと、私たちの人間のとらえ方というものは、
凡夫という点を深く自らかみしめてみるるところからしか
出てこないのではないかと思うわけです。つまり、凡夫
の往生という点を外すことができません。また、それこ

そが現代に求められていますし、私が大事にしなければ
いけない点ではないかと思えてくるわけです。

法然上人の教えの時機相応性ということでありま
すが、ともすれば、現代に照らし合わせて、どれだけ役に立つ
かと思いがちですけれども、その物差しを反対にして考
えてみる必要があるのではないかと思います。つまり、
法然上人の教えこそ、いつの時代をも貫く、こういう法
然上人の教えを自らの了解の仕方、こういうようなこと
が出てくるのではないかと思います。

そういう意味で、凡夫性ということと、時機相応性
という問題が、このテーマのなかに入ってくるのではない
かと思えます。そこを一つのイメージで表せば、すでに
ご存じのように、善導大師が、三心釈の回向発願心釈で
お説きになるような二河百道のたとえの、まさにあのイ
メージが出てくるわけです。したがって、私たちの
考えていく共通の場といえますか、そういうことを前提
にしながらか考えていきたいと思えます。

極楽の条件、このようなことになるわけですから、
与えられたこの概念が浄土ではなくて、極楽であります。
これは現代を象徴しているであろうと思えます。つまり、

「浄土」の反対語としては「穢土」という言葉がありません。つまり、けがれた土、けがれた土という意識から考えますと、きよらかとなるうと思えます。ごくごく一般的に考えますと、「極楽」という言葉が出る反対には、「地獄」が出てくると思います。去年の発表の記録などを読みますと、やはり「地獄」を非常に強調しつつ、「極楽」が意味を持つというような論旨をご発表の意見もありましたが、まさに「極楽」が出てくる発想の背後には、「地獄」が意識されているのではなからうか。ということは今現代において、私たちは現代のこの世の中を穢れた土として見るよりも、地獄として見る見方のほうがわかりやすいのではないかと思えます。その場合に、これはいちはん大事なことです。浄土宗のいわゆる宗義の綱格に所求所帰去行ということがあります。したがって、所求、いわゆる浄土、往生浄土ということであり、それから所帰という信仰の対象といえますか、私どもの住むところ、阿弥陀仏、そして去行、これは方法といえはいいかもありませんが、念仏、そういう浄土、阿弥陀仏、念仏、この点が私どもの考えていく方法を気付かせてくれるというなかで、特に、浄土教と呼ばれる限り、

浄土という問題を抜きにしては成り立ちようもない。名前からそのように考えることができます。

実は、私はこの学会の前日まで、名古屋の南山大学の宗文化研究所におきまして、キリスト教や浄土真宗の方々とともに、「救済」ということでシンポジウムを持ってまいりました。例えば、浄土をどのようにとらえるかというなかで、逆に、浄土を否定してしまいがちな浄土教徒という点が出がちであることを思いました。今は浄土という概念で語っていますが、極楽浄土をどうとらえるかということについては、いろいろな意見が錯綜しております。このようなことを本当に思いました。

今、申していますような点での問題の重要性ということでありますが、このような大事なことが起こってくると思えます。それは法然上人がお説きになる教えと、浄土・極楽の説ということが一つ。それから、同じく法然上人が強調されます称名念仏の体験と浄土・極楽ということでもあります。法然上人が説明される範囲での極楽といふのは、必ず法然上人のお念仏の体験が醸し出されていると思えます。ということはどういふことであるかといえますと、単に、極楽浄土をどれだけ説いても、それ

を説くだけではなんら意味がないのではないか。むしろ、極楽を説くその言葉がどこから出てくるかというお念仏の体験が、そこに関係してくると思います。これは別な言葉でいいますと、「月を指す指」というようなことにもなろうかと思えます。実は、月を指す指、この指のことをどれだけ説明しても、そして向こう側にある月のことをどれだけ説明しても、それは説明しただけのことであって、この指す指をもとにして、その月にいかにしたらずり得るかという、私たちのぎりぎりの非常に主体的な問題にもなろうかと思えますが、実践ということが込められている、そういう内容をこの問いは与えてくれていると思えます。今、申しましたように、単なる説明でも仕方がない、そしてまた、それに至る道を、法然上人は非常に強調しているように思います。

それで、浄土三部経を中心にし、また法然上人のお言葉等から、今申しましたあたりのことを辿っていきながら、そして私なりの理解、意見へとつないでいきたいと思えます。

皆様方もご存じのように、浄土三部経を拝読いたしますと、少なくとも二つのことが、ひよっとしたら私ども

にとつて躓きでもあるだろうし、疑問にもなるでしょうし、それをまた反復して、どういふことかなと考えざるを得ない事柄に出会います。一つは、いわゆる指方立相ということと呼ばれます「無量寿経」に説示されているごとく、法蔵菩薩の誓願成就という出来事から語られていますプロセスがあります。そういうことが単なる神話としてしか受け止められ得ないような状況がもしあるとしたら、それはどうしてであらうか。つまり、単なる神話ではなくて、願いの世界が現実化していく浄土教の根本的な出来事であると理解できるかどうか、このようなことが一つあります。

もう一つは、『阿弥陀経』に説かれますように、今現在説法ということであります。つまり願力の阿弥陀仏の国土とその莊嚴が、われわれがまさに憧れるように説かれております。この描写に関しまして、私どもは一体どのように受け止め、また感じ取っていくであらうか。つまり、極楽と阿弥陀仏の存在の両者についての問題、それが存在する世界として受け止められ得るかどうかということ。ひよっとしたら、私どもは法蔵菩薩の出来事を神話として捨てさり、そしてまた極楽とその莊嚴を空

想として蔑視するということに陥りはしないか、という
ようなことであります。それはどういふことかといいま
すと、私もまがりなり修行させていただいている身であ
りますが、やはり『無量寿経』のそこをを誦受し、
『阿弥陀経』のそのところを誦受するときの心がどうい
う心であろうかといふことであります。そんなものはな
いのじゃないか、と思ひながらその部分を讀んでも、
全く意味がないわけでありまして、むしろ繰り返し繰り
返し讀むなかに、浄土・極樂の有相性、そしてまた阿弥
陀仏の今現在説法といふことが、少なくとも私たちに感
じ取れるかどうか、これは浄土宗教師として非常に大事
な点だろうと思ひます。これは何を意味しているかと
いいますと、やはり、「ある」といふのはどういふことな
のだろうかといふ問題になつてくると思ひます。浄土が
ある、阿弥陀仏がいま現に説法されている、といふのは
どういふことだろうか。といふ問いが非常に出てくくな
つてゐるのが現代である。このようなことも考えられま
す。

しかしながら、それに対してせっかちになつて答をを
求めることもよくあります。つまり、一たす一が二であ

るといふ論法で、「ある」といふのは、例えばここにマイ
クがあるといふのがあり方なのだ、といふことになつて
しまいます。それは私たちが注意をしなければならぬ
ことだと思ひます。このような形で「ある」といふ言葉
を使うと同時に、例えば心があるとか、または法然上人
の『二昧発得記』を讀みますと、「目を閉じれば極樂の相
が見える、目を開くとその相が見えない」といふような、
そういう「見る」といふことなどは、私たちに暗示を与
えてくれると思ひます。そういう意味で「ある」とはど
ういふことなのかといふのは、浄土教におけるかういふ
問題だからこそ、私たちが考えていかなければいけない
し、また浄土宗学のなかで、そういう一つの解釈、また
はそのことをめぐる学問的な研究が広がっていく必要が
あるのではないかと思ひます。

しかし、もう一方で、このようなこともいえると思ひ
ます。極樂の相を立てるといふことによつて、私ども凡
夫は初めてそのことに気付き得るといふことです。今、
私がここで手を挙げますと、そこに目が行く、関心が行
くといふことであります。そういう仕事をせずに「この
辺を見てください」といふのでは、そこには目が行かな

いということがあると思うのです。これは人間が持つて生まれた非常に大事な特性であると思います。浄土教が相を立てるとするのは、人間が形あるもののほうを向き得るといふことだと思います。

もう一つ、ついでにいいますと、法然上人が声を出す念仏を強調されるということは、やはり声によって自らを見ていくことができる、または呼ぶことによって応えが返ってくる、ということであります。呼べば応えるといふことも、人間が生まれつき持つている本来に素晴らしい特性だと思います。姿あるものによって姿あるもののほうを初めて向き得るといふことと、声を出す、呼ぶということによって応え得るといふ、人間が生まれつき持つている本来に素晴らしい特性に根ざした教え、それが指方立相を説き、また声の念仏を説く法然上人の浄土教の素晴らしいところであると思います。

したがって、今のように指摘していきますと、私たち人間は、自分のことでない場合は、あろうがなからうが関係ない、しかし自分のこと、つまり自覚に立てば、やはりそこに何か具体的なものを求めていく指向性といえますか、そういう在り方をしている。そういうところ

から浄土・極楽が考えられてくる必要があるのではないかと思います。

もう一つは、『阿弥陀経』を読みますと、真ん中辺に、「名号を執持して乃至一日七日、そして一心不乱ならば、その人命を終わるときに臨んで」云々とあります。この説示でいきますと、命を終わるときに臨んで、阿弥陀仏はもろもろの生死とともに、その前に現在した。「この人命終わるとき、心転倒せず。命終わって、すなわち阿弥陀仏の極楽浄土に往生することを得ん」という説示になっています。そこには、私たちの命を踏まえた教えの流れのようなものが書かれてあると思います。これをどういうように理解するかという問題だと思います。命、ここでは命終ということですから、命という問題でありますが、極楽に生まれるというその命のとらえ方を、今申しましたように一直線にとらえて、生きているとき、死に臨むとき、それで死んで、それ以後と、そういう命のとらえ方がありますが、これは非常に現象的だと思えます。宗教的な命とはどういうことかということを考えることによって、この問題は少し整理されるように思えます。

それは、命ということを一刹那の生きている力というように考えるならば、命というのは常に死して蘇り生きている、死して生きているということがあると思えます。そういうとらえ方というものこそが、宗教的な命のとらえ方ではなからうかと思わけてです。そのところを法然上人は非常に大事にされたのではないかと思えます。したがって、法然上人の教えで申しますと、そういう生き方をしている、つまり平生の念仏が持続されていくなかに、命終の後は自然に來迎を得るといような説相になっていると思えます。その場合に、法然上人の教えで見ますと、浄土を事細かに説明されている場面は少ないと思えます。浄土を説明する場合には、ほとんど經典等その他、祖師のものを引用しているだけのようになっているかと思われます。それはなぜであろうかということでもあります。

例えば、「浄土を心にかくれば心淨の行法にてそうろうなり」(『鎌倉の二位の禪尼へ進ずる御返事』)、または「極樂の二報莊嚴のありようを詳しく説きたまえるも、衆生の信心を勧めて凡夫の欣求の心を起こさしめんがためなり」(『逆修説法』)と書かれています。これはまさに、先

ほど申しました月を指す指と、月との間を的確におっしゃっている言葉であろうかと思えます。凡夫の欣求を起こさしめるというなかに、念仏に通じていく世界が語られていくのではなからうかと思えます。

したがって、私たちが極樂浄土を思うことは一体どういうことであるかという、今の法然上人のお言葉のように、「衆生の信心を勧めて欣求の心を起こさしめんがためなり」と語られている点からいえますと、常に私たちの生活が極樂浄土のほうを向いていっているところを強調するならば、極樂浄土はなんなのかという説明については、余り強調点が置かれていないのではないかと受け止めるわけです。そういう点であるからこそ、法然上人は、「生けらば念仏の功つもり、死なば浄土へ参りなん。とてもかくてもこの身には、思わすろうことぞなき」と。そして「死生ともにわずらいなし」というご心境を吐露されるのであろうかと思えます。そしてまた、今申しましたような意味で、「阿弥陀仏と申すばかりを勧めにて、浄土の莊嚴見るぞ嬉しき」というお言葉になっていくのではなからうかと思えます。そのところは、前半を抜きにいたしまして、浄土の莊嚴を見ることだけを強調す

ることは、非常な誤解にもなろうかと思ひます。「阿弥陀
仏と申すばかりを勧めにて」というところが、われわれ
に求められていることではなからうかと思ひます。

そういうことに関しまして、もう少し私見も述べな
ければいけないのですが、時間が来てしまいましたので、
補足のときにできればと思ひます。とりとめもなくおし
やべりをしてしまいましたが一応、意見発表を終わら
せていただきます。どうもありがとうございます。

司会 ありがとうございます。

確かに、「現代人」という人はおらないわけで、私自身
と主体的に受け止めるところから信仰が発しているわ
けでございます。ご意見の発表ありがとうございます。
続きまして、東京教区栖岸院、佐々木康秀先生にお願
いいたします。

佐々木 紹介にあずかりました佐々木でございます。私
もまだ若輩でございます、極楽をどのように説くか
ということでは、全く自信がございませんが、現在、お念
仏をしているなかで感じたこと、またそれによって自ら
が救われたことを中心にしまして、少し話をさせていた
だきたいと思ひます。

一面におきましては、私どもの浄土教の教えこそが、
これから二十一世紀へ向けての唯一の救いになるのでは
ないかという気がいたします。そのくらいの確信だけは
持っているつもりでございます。難しい教義的なことは
なかなかわからないのでございますが、現場におきまし
て、現代人、または私どもの周りのいろいろと悩んでい
る方、または問題を抱えている方をじっと見てまいりま
すと、また相談を受けたりしますと、やはり浄土教の教
えがいちばん救いのもことになるのではないかという気が
するわけでございます。

それはどういふことかといひますと、最近、大変悩ん
でいる二名の例がございました。一人は三十歳になる青
年でございますが、心がぼろぼろになって、生きていけ
なくなっている状態でございます。もう一人の方は、
まだ中学三年生ですが、今の非行少年でございます。親
を殴って出てきてしまった子供でございます。子供が
親を殴るといふことは大変なことでございます。子供が
親を殴るなどいふのは、子供が悪いとばかりは申しま
せん。本当に、そこに至るいろいろな状況があると思ひ
ますが、この二人に共通することは、やはり自分がどこ

を向いたらいのかという、心の方向性の欠如でございます。このまま行ったら自分はだめになってしまわないだろうか、先にちっとも希望がないのじやないだろうか、どうやって生きていったらいいのだろうか、というようなところが全く見えなくなっています。ですから、結局、今、何をしたいかわからない、生きていく価値がないのではないか、自分はこの世に何も望みもないのではないかというような、大変な状態に入っていくわけでございます。

そういう観点から見ますと、いちばん現代に欠けているのは、やはりこの方向性の問題だと思っております。はつきり覚えていませんけれども、西洋の有名な哲学者、ハイデッガーかどなたかが、「原爆よりも何よりも、いちばん恐ろしいことは、現代の人たちが帰るべきところを見失っていることだ」と申しております。まさにそのとおりだと思います。そういうところにおきまして、この方向性に関しましては、これはもう浄土教の独壇場ではないかという気がするわけでございます。

極楽は、帰っていくべきところ、または心が最終的にそこに向いたところにおいて、自らが自らと出会い又は

生きる力となるところだと思っております。ですから、「現代人に極楽をどう説くか」ということは、極楽という言葉を出さなくても幾らでも説けるわけです。

その問いかけの第一番目は、やはり自らの心に問うわけでございますが、一体自分はどうなったら満足するのだろうかという点でございます。自分は一体何になりたいのか、どうなりたいのか、どうなったら真に満足できるかということ、いつも自分の心に問いかけるスタートがない限りにおいては、大変なことになってしまふのではないかと気がいたします。

現代を見渡しますと、教育問題、老人問題、医療問題、あらゆる問題が山積みしていき、行き先がわかりません。一体どこに向かったら人間が生きる力を得ることができるのだろうか、どういうところに向かったら、人間としての安らぎや満足が得られるのであろうかということ、みんな見失っているような気がいたします。私どものところに訪ねてくる方は、悩みを持っている方が大変多いのです。そういう方は、例えば子供の非行の問題、または子供の精神病の問題、または自分自身の問題、いわゆる無力感や各種の問題を抱えているわけでございます。

が、たった一つ間違っている点があります。それはどういふことかと申しますと、今、抱えている悩み、苦しみ、悲しみ、という問題が宗教によって解決されたならば、自分が幸せになると錯覚していると思えてなりません。人間の願いは、実はそんなところにはないのではないかという気がするわけです。今ある問題が解決したら、人間は本当に幸せになるのだろうか。例えば、病気が治ったら、その人間の心は固まるのだろうか。子供が立ち直ったら、自分の命が深まるのだろうかということを考えると、どうもそういうようには思えません。

私も昭和十九年生まれですから、戦争中のことは覚えていませんけれども、その頃は大変な飢餓状態であったそうでございます。一日に三食白いおまんまが食べられたら何も要らない、と思っていた方が大変多かつたのではないのでしょうか。飢餓状態という苦しみのなかにおいては、その苦しみが解決すれば、そこに本当に幸せがやってくると思います。ところが、現代のように、腐るほど食べ物があって、ひとはみんなブクブク太っている。そういうなかにおいても、みんな満足しているのだろうかという、全然満足していないわけです。実は、

そういう苦しみとか悩みがないところに幸せがあるのではなくて、生きていてどんな苦しみが来ても大丈夫な、そんな丈夫な心になりたいという願いがあってはならないのでしょうか。自分が本当はどうなったら満足するのだろうか、どうなったら本当に自分が喜べるのだろうかということを、いつも自らの心に問いかける姿勢こそが、実に人間らしいいちばん尊い生き方ではないかと思うわけです。ございます。

そういう観点からいいますと、浄土教の右に出るものはないのではないかと、という気がいたします。人生の目的は浄土往生にあります。これは決まりでございます。そこに向かわない限り、私どもは真に安らぐことはできないのだということが、念仏のなかに知らされてくるわけでございます。一枚起請文も十八願も、または月かげの歌も、みんな方向性を指しています。浄土に生まれようと願い、『阿弥陀経』を読んでも、すべての経典も、みんな心の方向を決めよということを示しているような気がするわけでございます。

そこで、私どもの帰るべき方向、行くべき方向、心の向き、方向性というものをどう説くかという工夫になっ

てくるわけでございます。そういうなかで、幾つか極楽の説き方を、少しお話ししたいと思うわけでございます。

第一番目は、ひとは故郷を求め存在であるということとでございましょう。テレビを見ていましたら山尾三省さんという方がちょうど出演なさっております。この方は、今、屋久島に住んでおりまして、詩をかいたり、またはその詩を通じて、永遠の命を私どもに手渡ししてくれる方です。その方の言葉をちよつとご紹介いたします。

「自己」というものは故郷を求め存在である」。故郷というのは、いちばん大事な懐かしい変わらないものを求めていく、そういう本質があるんだ、帰りたいな、故郷へ帰りたいなという、そういう本質がある。そして、「人間」というものは、その故郷を求めるところにおいて、必ず永遠というものに出会っていくのだ」ということをおっしゃっております。

それでは、永遠とは何かというと、これまたいろいろな問い方があろうかと思えます。言葉を変えていえば、本来のことに帰っていく、そういうことを求めているのだ、大地に帰っていく、もとに戻っていく。

私どもでお念仏会などをやっておりますと、今まで全

くお念仏を唱えたことのない方がときどきいらっしやいます。そういう方がお念仏を唱えてもいいという気になるのは、よほどの苦しいことがあるのでしよう。そういう方がいきなりお念仏を唱えはじめますと、涙を流されることがあります。そしてそういうなかでおっしゃることとは、自分がどうして泣くのかわからないというのです。別に嬉しいのでもない、悲しいのでもない、だけどそれは何か故郷から響いてくるというのでしようか、本当にそこで自分が休らうというのでしようか、何か懐かしさではないかというような気がするわけでございます。故郷というようなところから説いても、本当にいろいろな説い方ができるのではないだろうか、という気がします。

第二点の問い方は、やはりこれは「阿弥陀経」にあるように、俱会一処ということでございます。極楽という方向を目指したところで、命の深みにおいて出会えるのだということでございます。お葬式などに行きますと、突発的な死に方をなさる方が大変多ございます。そういったときになると、本当に浄土教の独壇場みたいな気がします。「お念仏を唱えてください」。絶対そこで出会えるんだ、そういった出会いということにつきまして、い

ろいろ実例が多ございます。そういう話を聞くたびに、あ、本当に会えなんだなという気がいたします。

皆様ご存じかと思いますが、高史明さんという方がいらっしやいます。この方のひとり息子さんに岡真史君という方がいらっしやいますけれども、この真史君は高史明さんにとっては、希望のすべてでございました。その希望であるひとり息子が、十二歳のときに屋上から飛び降りて自殺なさっております。それから、高史明さんは『歎異抄』によって救われていくわけでございますが、今までの信仰も、知識も、能力も、全部崩れさり、ただお念仏一本になってきたのです。そこで、子供の命と出会っていきます。高史明さんはこうおっしゃっています。「今ほど、自分と子供がいつも出会えているときはない。子供の命と自分はいつも一つになっている」とおっしゃっていらっしやいます。

それから、皆様よくご存じの話で、キサー・ゴータミーにケシの実の話がございます。お釈迦様のところにあるご婦人が子供の死骸を抱いてきて、「この子供の命を甦らせてほしい」という、キサー・ゴータミーという赤ちゃんと失ってしまった生母の話があります。それで、「ケ

シの実を求めてこい。一度も死人の出たことのない家からケシの実をもらってきたら、子供の命は甦るだろう」と。ぼろぼろになって這いずり回って探すわけです。ところがどうしてもそういう家がなかったというところで、キサー・ゴータミーは救われたということです。そういう話なども、出会いでございます。私どもは極楽に心の向きをピタツと合わせたところで会えるというのは、事実でございます。

もう一つは、一切は極楽に向いたところにおいて、自分の存在が許されるというような救いもあるかと思えます。私の友人で、腎臓を二回移植した方がいらっしやいます。その方の話をするとき長くなってしまっているので、要点だけをご紹介しますと、一度目はお父さんの腎臓をいただいて七年間生きていました。その腎臓もだめになって、また透析の生活に入りました。そこで今度は、お姉さんの腎臓をいただいて、そしてまた命が甦るわけです。そのなかで彼はどういうことを思ったかというところ、健康な人の体を傷つけて、自然に逆らって生きる価値があるのだろうか、自分は生きていていいのだろうか、自分が生きること自体が問われていくわけです。そしてその

答えが出ないままに街をうろつき、あるレストランに入
っていきます。そしてそこで、一枚の絵で救われていく

わけです。小川安夫さんという放浪の画家がいらっしや
います。もう亡くなった方でございますが、その方が、
お地藏さんの絵と景色のとても温かい絵をかかれるので
す。そして、そのレストランのなかにその一枚の絵が掲
げてありました。そこに一言、こういうことが書いてあ
りました。「また生き延びて、故郷へ帰る道」、みんな故
郷へ帰る道のなかで、人に迷惑をかけ、自然に逆らい、
そして大したこともやっていない自分が許されていく道
は、故郷へ帰る道のなかにあるのだ、ほっと休らいいい
くんだ、というようなことがあったわけでございます。
方向性と救いの実例などといったものなら、枚挙にい
とまがございません。いちばん先に話しましたように、
三十歳になっても生きていけなくなった青年は、環境を
全部変えようというので、ある修道院に送り込みました。
そこでどうぞ自分の方向性を見つけてくれ、自分はこれ
からどこを向いて生きていったらいいのだろう、自分の
帰るべきところはどこなんだ、それをどうぞそこで見つ
けてきてくれというようなことで、そこに行ってもらっ

たわけでございます。本当に方向性というものはものす
ごいものがあります。

未来往生なんて、これはすごい現代の救いですね。未
来という往生、極楽の未来の往生をするということは、
現在の救いでございます。往生するために、今の苦しさ
をそこで堪えていけるだろうし、またそこで許されて生
きていけるだろうし、またそこでほっと一息つくことが
できるかもしれない。みんな故郷へ向かう道のなかで、
すべてが阿弥陀仏の莊嚴に照らされていくような気がす
るわけでございます。

では、そういった極楽の方向性が決まるというのはど
ういった縁だろうか、いろいろなことがあるわけござ
います。いつも方向性ということで、私どもが極楽を
自信をもってどんどん説いていくことが、とても大切な
のではないかという感じがするわけでございます。甚だ
急ぎの話でわかりにくかった点もあらうかと思いますが、
一応、私の発表はこれにて終わります。

司会 ありがとうございます。実例をいれてのご意見
を頂戴いたしました。

続きまして、中四国支部代表山口教区樹下戒三先生に

お願いいたします。

樹下 皆様のお顔がよく見えますように、立つてお話をさせていただきます。

初めにおことわり申し上げておきますが、私は布教師会の代表ということになっておりますが、プロの布教師ではございません。広い意味での布教師でございます。

四十年間、瀬戸内海の小島で住職をしておりました。檀家を相手に、あるいは自分の家族を相手に、思い、悲しみ、悩み、そういう意味での布教師でございます。たまには外に出てお話することもございますが、本当に井の中のカワズと申しますか、小さな小さな枠の中で仏法を考へ、味わい、生きてきた者の考へ方を、しかもそれは曠劫の昔から、そして自分が生を受けまして六十三年間歩んできましたことを、わずかに二十分間の時間のなかで、話の臨終を迎えなければならぬなかで説かなければいけないことを、今から申し上げたいと思います。

ただ、おことわりしたいのは、田舎で四十年間檀家を相手に話しておりますと、今はまともな言葉で言っておりますが、煩惱と同じで、方言が出てまいります。理解しにくい言葉が出てくるかもわかりませんが、お許し願

いたいと思います。二十一分に始めましたので、四十一、二分にはやめなければいけない、私の臨終が来ると思っています。

私の郷里の山口県の数学者で広中平佑という方が、ノベル賞に当たります数学の賞をもつ十年も前にただかれております。奥さんが今、公明党から比例代表制で議員になっておられますが、その広中平佑先生が、「真実」というものは、苦しみ、悩み、考へ、悶えてきて、その真実（テーゼ）がわかったときには、それは簡単明瞭である」ということを話されたのを覚えております。でありますので、今、念仏だとか、極楽だとか、そういうことを生を受けまして六十三年間悩んで、考へてきました。それを今、一言で申し上げますと、一紙小消息のなかの「十方に浄土を多けれど、西方を願うは十悪、五逆の衆生の生るる故なり」という法然上人の言葉でございます。もうこれに尽きると思っています。だから、極楽とはどんなところかと聞かれましたなれば、今お答えできるのは、十悪五逆の衆生の生まれていく、私が生まれていく、そこが西方の極楽であると申し上げたいと思います。私は六十三年間の人生を歩んできました、ここまでやっと辿

りついできたわけでございます。私の考えは間違っているか正しいかは、後でお聞きしたいと思います。

『無門関』のなかに、こういう言葉があります。「春百花あり、秋月あり、夏涼風あり、冬雪あり、寒時の深冬にかかるなくんば、これ人間の好季節」。私が生を受けまして六十三年、世の中にはいろいろな美しいものがあります。輝かしいものがあります。しかし、常に寒時が深冬をかかっています。ひとから見ればくだらないことではありません。しかし、持って生まれた人間の悩みといましようか、まさにお釈迦様の言われました四苦八苦、そして六道、それを深冬というのでありましようが、それにとらわれて、現代、私を受けましてすべての現代人がそのなかに生きてきている。まさに地獄でありましよう、修羅でありましよう。そういうなかで、切実な悩みは、憧れは、安らかな落ち着いた輝きに満ちた生活を送りたいということだと思います。

今、テレビや新聞を賑わしておりますあの宮崎勤という方が、四人の幼い女の子を殺しております。殺された者は一体どこへ行くのでしょうか。そのお父さん、お母さん、兄弟、一体どこへ行くのでしょうか。まさに地獄

だと思えます。宮崎勤さんは、自分ではまだ気付いていないようでありますが、殺された方、殺された方の家族、そしてそれをまた味わっているわれわれ自身が、どこへ生まれていったらいいのでしょうか。「両手を返してください。あの骨を返してください。子供があのでご飯を食べられるように、両手を返してください」。こんなことを言っていますと、入れ歯が外れるのです。あんまり興奮して言うと、入れ歯が外れましてものを言えなくなるのです。これは年齢で致し方ございませんが。

昨日も、二十分間でどれだけ話せるかと思ひまして、気休めに寄席に行きました。このお話をしなさいということ、あそこに悪人が座っております。母校の浄彦さんが、去年の十二月だと思ひましたが、「快念寺さん、来年話せ」と。何分ですかと聞きますと、「まあ、三十分ぐらいでしょう」ということでした。それを受けまして、地獄でございました。檀家には何とか極楽の話ができますが、皆様方に話をするのは、この禿げ頭をひっくり返しまして……、しかもそれは「現代人に極楽をいかに説くか」ということです。それを受けたのは、まさに地獄でございます。

五日の晩、夜行で東京へやってまいりました。夜行のなかはまさに地獄へ行く三途の川でございました。東京にまいりましたとき、菩薩様が私を迎えてくださいました。それは四十年の昔、この大正大学で学びましたときの、学科の同級生の二人でございます。一人は、この大正で国文学を教えておられます山田昭全先生、一人は早稲田で哲学を教えておられます峰島旭雄先生、この方たち、「四十年ぶりに来たのだから、一席設けるから、六日の晩に飲もう」といいました。目黒に呼ばれました。私はそういう関係で、四十年間全然同窓会にも出ていません。文通もしておりません。しかし、その四十年間の空白を乗り越えて、お迎えくださいました。しかも、今、珍しい松茸をご馳走になりました。この松茸をご馳走になつたお陰で、私は自分の心情を吐露しました。本当に菩薩様のようでした。地獄のなかで菩薩様に会つたような気がいたしました。そしてまた、きょうの席は、また懐かしいいろいろな人がおられます。また、私が知らない方々もおられます。これまたすべて、私は菩薩様だと思ひます。よくも私のこういう話を聞いていただけるものと思つているわけでございます。

私は、地獄を通らなければ極楽は見えないと思ひます。そして、なぜ、西方に極楽を構えられたか、話が重複するかもしれませんが、西方は日の沈むところでございます。それは方角ではございません。位置ではございません。お遍路さんの菅笠のなかに、こういう言葉が書いてございます。「迷じだと思ひます。」迷うがゆえに、三界は城、悟るがゆえに十方は空、本来、東西なく、いづれのところにか南北やあり」。私は、そういう意味の東西、西だと思ひます。しかも、西は日の沈むところ、終焉です。そしてまた、それは翌日、東から甦つてくる。西へ西へと行けば、やはり東でございます。しかも、夕日の輝きは、どういう輝きであるかといひますと、丸い地球がございますが、それを覆っているものは空気でございします。その空気のなかに、大気のなかに、地上近く水蒸気がございます。塵がございします。昼間空が見えないということは、その薄い塵を通して日の光を見ているから空が青いのでございます。夕日や朝日がなぜ赤いかといひますと、地表に近い水蒸気、塵、それにお日様の目を当てますと、それが何億、何百億、無量億劫の塵と水蒸気が微妙なる輝きを表します。紫であり、黄金であり、

茜であり、見る人の心をとらえずにはいられない光は、朝夕の塵を通し、水蒸気に日が当たって初めて朝日の輝きとなり、夕日の輝きとなります。われわれが生まれていく西方極楽は、藁、塵が、煩惱性が、弥陀の光明に照らされて、初めて輝きを増していくところではないかと、私は感じております。

先ほど申しました私の予科の同期生の二人の菩薩さんには、きのこをご馳走になったから、私の秘密を暴露いたしました。あなた方には、まだきのこをご馳走になっていませんから、私の秘密を暴露することはできませんが、仏さんにはきのこを食わしていただかなくても、無条件で暴露できます。これが阿弥陀様だと思えます。自分が地獄に落ちて、血の叫びをするときに現れてくるものが弥陀であり、西方極楽であるような気がいたします。最近亡くなられました美空ひばりさんが……、私が話していることは、大体雑誌とテレビと週刊誌、在家の方はそういう話でないと聞いてくれないのです。高遠な難しいことは聞いていただけません。簡単明瞭で、しかも実際に在家の人たちが知っていることです。

ここにおられます藤本先生のおじい様に当たられる藤

本浄恩先生は、同じ島の方でございますが、住職になりはじめの二十三、四のときに、藤本浄恩先生から、住職のあり方を一言教えていただきました。それは、「方丈さん、住職になって、人生いろいろ辛いことがあるけれども、十のうち八までこらえられることは、和尚というものはこらえなければいけない」と、若い和尚におっしゃっていたいただきました。そのことが私に残っている二つのなかの一つであります。

もう一つは、もう二十年か二十五年ぐらい前でありましょう、ここに来ておられます浄土宗の布教師会の理事長をしておられます松田等照先生のところで大挙伝道がございましたときに、もう二十年か二十五年ぐらい前でありましょう。浄土宗の布教の大家といわれておりました野島宜道上人に質問をいたしました。救いとは、救済とは、一体どういうことでしょうか、とお尋ねいたしました。すると、広中平佑さんではございませんが、簡単明瞭に一言で答えられました。それは、「認める」ということです。非常に簡単に浅いようでございますが、わかりやすく「認める」とおっしゃったのだと思います。認められる。私は認められていなかったから地獄なのです。

認められたら、極楽ごとと思います。浄土だと思えます。

それで美空ひばりに帰りますが、娑婆ですから、八割までこらえなければいけないのです。その堪えた地獄のなかから救いを求める声が出るわけです。美空ひばりは、自分が頼りにしておりましたお母さんを失いました。歌謡界の女王であります。自分の肉親、二人の弟をいずれも四十二歳で失いました。そして自らは肝臓を悪くしました。福岡で腰が悪くなって入院いたしました。その福岡の病院で手記を書いております。その手記の一部が雑誌に出ておりました。詩ともつかない、散文ともつかない、途中が抜けている手記でございます。「ひばりが高い、途中が抜けている手記でございます。「ひばりが高い飛び立ちて……、その馬撃つな村人よ」、それが病中の手記でございます。

そして私の出身の島の中学校の一期先輩に、星野哲郎という歌謡曲の作詩家があります。いろいろな演歌をつくっております。この方が、昭和六十三年、美空ひばりさんから歌を頼まれました。その歌は、「みだれ髪」という題であります。これは亡くなってから『サンデー毎日』に出ていたのですが、星野哲郎さんは福島県の塩谷峠にまいりました。太平洋に面した岬であると思えますが、

まさに美空ひばりの孤独を表している土地であったから、だそうであります。そして、作詩家星野哲郎は、その暗い太平洋を照らす灯台を見ながら、美空ひばりの病中の心を察しながら詩をつくりました。「みだれ髪」です。普通、作詩は三番で終わりますが、四番までつくりました。美空ひばりが、もしこの歌が気に入らなければ、四番までのうちで選んでいただくこうと、一つ付録をつけて四番までつくりました。その四番の最後はこういう文句であります。

見えぬ心を照らしておくれ

ひとりぼっちにしないでくれ

病中のひばりが四番の最後の文句を歌の中に入れてくださいということが出来上がったのが、「みだれ髪」という、ひばりが死ぬる二つ前の曲であります。六十三年に発表になりました。「みだれ髪」の最後は、

見えぬ心を照らしておくれ

ひとりぼっちにしないでくれ

人間すべてそれだと思います。自分の心は見えておりません。ひとりぼっちにしないでくれ。寂しいんです。その死を目前にしたどんづまりのところから、闇のなか

から求めるものは、照らしておくれ、ひとりぼっちにしないでおくれ、そのときに私は、西方の光が現れてくると思います。悩みを叫んだときに、その人は既に救われていることに近いのではないのでしょうか。「去此不遠」ということはそこにあるのではないかと思ひます。

これで時間がまいりました。後一分ございますので、私の好きな歌を申し上げます。一茶の歌に、

これはまあ 終のすみかか いき五尺
そしてそれに反するように、

ほちやほちやと 雪にくるまる 在所かな
という歌があります。この苦しい世の中、冷たい雪のなかでございしますが、そこに安住して光を持つならば、この世の中もほちやほちやと温かい雪に落ち着いてくる。

若山牧水は、

幾山河 越えさりくれば 寂しさの 果てなん国と
きょうも旅ゆく

まさに人生それだと思ひます。幾多の山河を乗り越えて、それは寂しさの果てなん国をきょうも求めて旅ゆく人生であろうと思ひます。

二、三か月前に、大正大学の同期生である一人の布教

師の奥さんが交通事故で亡くなりました。私はお見舞いの手紙を書きました。その方は、軍隊の関係で、私より九歳年上なのです。私軍隊の関係で、普通の同期生より三つ四つ上ですが、その返事にこう書いてありました。

「妻は突然極楽に旅立った。妻は極楽に、残された私は地獄に。長年諸行無常を布教師として説いてまわったけれども、実際、自分が地獄に突き落とされると、念仏する以外に道がないことがよくわかります。」

妻は極楽に、自分は地獄に。殺された綾子さんほか三名の方々は、親は生まれていく世界を極楽と思つていらつしやるでしょう。また、それから死刑にあう宮崎勤さんも、同じ凡夫でございします。必ず極楽に迎えていただけないはずでございします。罪を自覚するならば、地獄を経験するならば、極楽は目の前にぶらさがつている。ということが私の結論でございします。失礼いたしました。

司会 ありがとうございます。

地獄という自己教師、あるいは自分の周辺のことを凝縮するなかから、極楽というものが見えてくる。思ひますと、徳本上人のお歌のなかに、

落とす地獄の 釜の飛脚も 人を仏に するがため

という、大変好きな歌がございます。地獄というものを通して、初めて、安らかな世界、認められる世界、そういうものに向かっていくのではないか。そういう方向が決まったときに、初めて地獄の意味といえますか、苦の、苦しんだ意味というものが、もう一度仏様から与えられたものだなというように受け止められてくるのも、信仰の過程では事実だろうと思います。

そういうことで、三先生方、それぞれご意見の発表が終わりまして、これから休憩に入るわけでございますが、先ほど、助言者の先生がご紹介されましたが、三枝樹隆善先生でございます。仏教大学助教授・浄土宗総合研究所の布教研究部主任の先生でございます。よろしくお願ひいたします。

それでは、質問・意見等の用紙がございますので、ぜひ積極的に各先生にご質問、あるいはご意見を賜りますようお願いいたします。十分間休憩に入らせていただきます。

休憩

司会 それでは、早速、休憩後の進行に入らせていただきます。質疑・検討の前に、補足説明を三先生方から、恐縮でございますが、三分間以内ということをお願い申し上げます。藤本浄彦先生、よろしくお願ひいたします。藤本 先ほど触れましたが、浄土宗の教えに立ちますと、指方立相ということ、有相の浄土ということ、報身の阿弥陀仏ということ、そして声の念仏ということ、こういうことが極楽を説くについてのいちばん大事な前提になろうと思います。その場合に、お念仏を申すということの人格的な、呼べば応えるという意見と、応身阿弥陀仏の救いという、これは光明攝取ということで、私どもに受け継がれるということ、そして、私たちの人生のどこからどこへという場合の「どこへ」が浄土ということとで語られていること、そういう一つの世界が明確になつていくと思います。そのなかで、法然上人の教えでは、常に現実の行き方を貫く、その行き方の縦糸として、称名念仏があるということにどこまでも重点を置きますと、むしろそこから自ずと開けてくる心境、そしてまたそこで、私どもが自ずからその拠り所を得て生きゆく姿、このようなことが出てくるように、私は比較的樂觀的に思

っておりますし、また、それでなければ私にはできないような気がいたすわけです。

檀家さんで、「法主さん、死んだらどこへ行くんやろうか」というような話がよく出てきまして、そのことに対する答えを一緒に考える場合が多いわけですが、大体私は本尊様の前に座って、その方と一緒にお念仏をすることにしています。そうすると、そういう問いが消えていくといいますか、その都度心のなかで一つの心境をつくり上げていくということがあります。したがって、いまして、私どもは本堂の莊嚴ということをもって、極楽を感じ取っていただけることも、大事なことではなからうかと思えます。

もう一つであります、念仏の体験ということは、最近では興味を持たれ、研究がなされています。ほかのいろいろな体験と同じだとか、または比べられることがよく出てまいります、一つだけ全く違う点は、念仏を申さなければ得られない体験であることは自明であります。さらに言えばどうということかといいますと、その体験は、実は実地に宗教的人格の形成を土台にしているということが外されてしまうと、やはりこの企画はへ

んてこりんなことになると思います。「この光に遭う者は身意柔軟にして」云々とように、やはり念仏申すことによつて、宗教的人格というレベルにおける要請ということがなっていく、このような点は、極楽を説くこととも非常に関連していると思います。

司会 ありがとうございます。それでは、続きまして、佐々木先生お願いいたします。

佐々木 「現代人に極楽をどう説くか」ということで、これはいつの場合でも問題になることでございますが、あるとき、こういう質問を受けたことがございます。例えば、私どもがご法事のときにお話しする場合、いろいろな対象が錯綜しているわけです。おじいさんから子供まで、女、男、いろいろな対象が雑多にいるわけです。そういったときは、一体だれを対象にして話したらいいんだらうか、というようなことを質問されたことがあります。私どもの対象というのは、お年寄りに合わせるとか、若い人に合わせるとか、男に合わせるとか、女に合わせるというのではなくて、もしそのなかに、今、生きていけない、またはいろいろな深い心の闇に入っている方があったら、どうぞ自分の言葉が、その人が生きてい

く力の足しになればと思います。本当に悲しんでいる人、弱っている人が対象であるわけです。極楽を説くというのは、いつの場合でもそうだと思います。というのは、極楽というものは闇に響いてくるんだということです。

「無事に帰って極楽に埋まる」という言葉がありますように、闇体験、それと自分が限界に達した、またはお手上げになったところに、本当に静かに響いてくる極楽の響きがあるんだということだと思います。対象というものは、そういうふうを考えるわけだと思います。私どもはいつもそういう方を対象に、一つの心の方向、私どもが帰っていくべき方向を説く必要があるのではないかと感じるわけだと思います。

そういうところに、一つの大きな方法論として、または真実の響きとして、お念仏というものが回向されて与えられているわけですが、キリスト教でも仏教でも同じです。キリスト教でいえば、まず神の国と神の義を求めよ、とっているわけです。仏教でもそうです。極楽に生まれよう、そして生まれるには念仏せよ、ということでございます。ですから、極楽を説くには、やはり念仏が不可欠になってくるわけですが、「念仏は

知る力」という題で何か月か話したことがございました。

「お念仏とは知る力である」と。何を知るんだ、自己を知るんだ、自己の何を知るんだ、自分というものがどんな小さくなっていくんです。自分の業を知る。本当に自分の無力さを知る。それはまた、お念仏のなかの一つ功德でございます。無力になればなるほど、自分というものが小さくなればなるほど、その自分に何か極楽の風光というものが現れてくるというようなことを合わせ、現代人に説いていきたいと思うわけでございます。

そういうなかに、本当に自分の心のなかに極楽、楽というものが現れてくる。生活というものが、本当に根本において楽になってくるんだというような功德も、大変説きやすいところではないかと思えます。

司会 それでは、続きまして、樹下先生にお願いいたします。

樹下 今から二十五年か三十年まえに、一つの問題を与えられました、解決できないで二十五年から三十年持っていましたものが、数年前に解決できました。それは、テレビです。小説家の松本清張さんが、今から二十五年ぐらい前に、NHKで『零の焦点』という小説を連続で

劇化したものがございました。劇の筋は、大学の先生が教科書の編集をされますが、自分の恩師である先生を蹴落として、弟子の学者がその先生の立場を乗っ取るという芝居でございました。そしてそのときに、恩師を蹴落とした若い先生が、最後にこういう煩悶をするわけです。それは「カルネアデスの船板」ということでございました。

カルネアデスというのは、ギリシャの哲学者だと思うのですが、私の持っている小さな哲学辞典では、カルネアデスという方は出ていないのです。六日の晩に峰島先生に会ったときに、カルネアデスという方がおられますかといったら、「そういっ方がおられたはずですよ」とおっしゃったから、間違いないと思います。それで申し上げるわけですが、カルネアデスというギリシャの哲学者が弟子に命題を出しました。船が遭難したときに、海に漂う私の前に、一枚の船板が流れてきました、その板に自分だけがれば、かつがつかかる見込みがあるが、ひとりで最後まで浮くのが覚束ないものを、ふたりすがったならば、当然沈んでしまいます。そのときに、自分がその船板にすがりつくか、人に譲るか、どちらが正しいか

という命題でございました。弟子は答えることができなかった。そのときに、カルネアデス先生はかくおっしゃった。「自分の命を全うするためには、他を蹴落としてもやむを得ない。正しいんだ」と答えたというのは、その劇の投げかけた問題でございます。理屈ではわかったようなわからないような、しかし、心のなかでは釈然としない問題を抱えて、適当な解決のないまま二十数年間を過ごしてまいりました。

すると、これもテレビで図らずも解決いたしました。それは吉川英治さんの『宮本武蔵』の劇化されたものの一場面で、若い奔放な生活を送っていた武蔵が、姫路の天守閣に閉じ込められました。一年間暗い天守閣のなかで書物を読み、心を落ち着けることができたときに、自分の恋人であるおつうさんが、姫路の橋の袂で待っていた。それは幼いときから、お互いが愛しい慕いあった仲、しかも武蔵を、一年間橋の袂の茶店で待っていた。おつうは武蔵に連れていってくれということです。武蔵は修行のために女を連れていくことはできない。愛する女であっても、一緒に旅することはできない。武蔵はおつうを騙して、その橋の袂を去っていくわけでございます。

そのときに、橋に残した言葉が、「許してたもれ」と矢立で書いた文字でありました。何でもない言葉です。人間というものは、二者選択の憂き目に遭うこともあり、何か善て何が悪かということもわからないときがあります。

昨日も落語を聞いておりますと、「牛や豚はまだいい。殺すところを見ずに肉を食っているからいい。けれども土用の鰻はかわいそうですよ」と、落語で言っています。鰻は人の前で割く、背中にサツサツと包丁を入れて割く。少し動くと、「活きのいい魚でしょう」と。しかも、「頭のところをチョコンと切る。殺されたほうの鰻になつたら大変ですわな」という落語がございました。われわれ人間は、そういう二元性のなかでつくらなくてはいけない罪、あるいは恋人であっても嘘を言つて離れていかなければいけない場合がございます。しかし、それを当然として罪を犯すのであるならば、救いはないと思います。そこに心から叫び出てくるものが、「許してたもれ」という懺悔の言葉であると思います。極楽に生まれるためには、極楽が見えてくるためには、懺悔と感謝以外にはない、ということをお願いしております。

司会 それでは、続きまして、質問あるいはご意見等を頂戴しておりますので、次に進めさせていただきます。ご質問の内容を読みますので、ご質問者の先生には一言添えていただきたいと思います。

最初は東洋大学の恩田彰先生です。昨年、同じテーマでご意見の発表がありました。藤本先生に、三点、ご質問と意見ということでございます。

「一、若い人に極楽をどう説いたらいいですか。今の人にはなかなかわかってもらえないように思いますが。二、地獄は避けるべきものでしょうか。三、死して生まれるという考えは、宗教的に意味のあることですが、これを常識的にとどまらず、宗教的に説くにはどうしたらよいのでしょうか。」

恩田 大変貴重なお話をいただきました、ありがとうございます。時間もありませんので、きょう、気がついたことを三点ご質問いたします。

若い人というのは、きのうも宗門の子弟の教育の問題がありました。結局、若いものは困った、という面も確かにあるわけです。ところが、若い人とわれわれの時代が違いますので、若い人の立場になって、極楽とか淨

土とか、あるいは救済、救いとは、あるいは安心とはどういうふうな指導したらいいかという問題があるわけです。ある新宗教のところで、青年の真理について、私は心理学が専門ですから、指導してくれということ、いわゆる教会の会長さんとちよつと会ったわけです。こういう問題を考えなければいけないということがまず一つです。そういう点、特に科学的、それからいわゆる新人類といわれる非常に難しい若者たちをどう指導するか、これが一つです。

二番目は、地獄ですが、浄土教の欠点ということ、言つてはどうか知りませんが、どうも極楽というものを避けなければいけない、穢土を欠けて極楽ということ。ところが、これは実はもつと本質的な問題になって、地獄という、いわゆる苦しみとか悩みというのは、司会者の先生がちよつとおっしゃいましたが、これを耐えていく、克服することによつて楽が得られるということがあるわけです。私は臨床とかカウセリングの専門をやっておりますが、苦しくてもこれを苦しみとして自分が受け入れますと、非常に楽になります。これが本当の極楽です。そういう問題があるわけです。それは欲求不満を耐える

こと、克服すること、逃げるのではなくて直面する。ですから、地獄というものは、私は極楽の反面だと思えます。そういうものは錬成道場で、これを克服して初めて、極楽というものが本当にわかる。それを避けて通ると、本当の極楽というのはわからないのです。この世において、現在、私自身も体験して、自分自ら確実にそうだと、いう信念を持っています。最近も、トランスパーソナルの一つのプロトロピックのプレスワークというものを体験してきました。それで地獄を体験しました。非常に地獄的な苦しみ、われわれ見てもそうなんです。苦しみにんで、自分でつくっているんです。ところが、わけないです。自分で解いてしまえばいいんです。それに気がつくということが、極点のところに行つたときに、緊張の極へ行けば安らぎを得ざるをえないんです。そこを体験するかどうか。これは宗教にはタイミンクがあるわけです。みんな逃げちゃつてだめです。どうしても浄土宗の教学をもう少し考えなければならぬということが一つです。

二番目の、死して生まれ変わるというのは、今、藤本先生が、宗教的と説かれたのですが、私たちがそう言つ

ているものは、どうも常識的なのです。科学的に説いたってだめなんです。この前も、一つの面は、もう少し深くあるんです。それで、私も、自分の体験から見まして、禅的な体験もありますし、最近の経験もそうなんです。死んで生まれ変わるといふリバースという体験、これが極楽往生なのです。要するに、われわれがこの世である世へ行くという場合ではなくて、この世の中にそういう体験がいつでもやられます。リバースの体験、いわゆる死んで生まれ変わるのは、人間の肉体では一回ですが、精神的には何回もあるわけです。私も随分体験しました。こういうことがあるんで、浄土教のいわゆる極楽往生とは何かというのは、もちろん本質論です。ただし、問題は高度の問題としての生まれ変わり、これが大問題です。これは昨年申し上げました仏のアプローチの問題があるのですが、これが非常に難しいので、こういうものをはっきりしたならば、浄土教というものをもっと素晴らしなものとして、若い者でもどなたでも、あるいは世界中の人に、どの宗教にも関係なく説くことができると思います。それが問題でありまして、いわゆる再生問題、死んで生まれ変わるという体験を、私も何度も体験してお

りますので、私の実感としてあるんですが、深層心理問題にもつながりますし、哲学上の問題でもあるし、そういう点、どんなものでしょうか。長くなると思いますので、私の感想だけで終わってしまいかも知れませんが、何か先生のご意見を承れたらありがたいと思います。

藤本 ありがとうございます。先生からご質問をいただきながら、今の先生のご説明のなかで、いろいろと教えていただきました。

三つの問題は、それぞれ重なりあっていると思います。実を申し上げますと、先生は今、「科学的」ということでおっしゃいました。科学的ということに対立させるわけではないのですが、やはり自覚的ということもあると思います。したがって、科学的ということが自覚的なものを含むか、自覚的なものが科学的なものを含むか、やはりこういう大きな問題がそこにあると思います。

今のお話でいきますと、やはり科学的なものを含まなければならぬという指摘だと思えます。その点につきましては、単なる個人的な体験だけではなくて、いろいろなことが絡んでいるのではないだろうかと思えます。少なくとも、自覚的というところで押さえていく方

向を明確にする。しかし、そういったしますと、若い人に極楽を説くなんていうのは、果たして自覚的にできるか、という問題に当たるといふことだと思ひます。そうすると、では、科学的に説ければそれでわかるか、こういう問題でもないと思ひます。そういうディレンマを感じます。したがひまして、そのところでは、宗教学的に言えば、シンボルというような考え方がどこまで妥当するか、というようなことが試みとして出てこようかと思ひます。

地獄は避けるべきでないというのは、これはそのとおりだと思ひます。厭離穢土ということが欠ければ、欣求浄土が出てこない。その前半と後半だけを分けて理解すると、これはおかしいことになると思ひます。おっしゃるとおりだと思ひます。その場合も、体験というようなことがそこに入ってくるわけで、先生のそういう素晴らしいご体験に比べまして、私は全くございませんので、私も体験を身につけながら説明できるようになりたいと思ひ、というようなことでしかお答えができないことを申し訳なく思ひます。

死して生まれるというのも、やはりこれは自覚という

問題を軸にしていると思ひます。その場合に、先生がおっしゃった再生の思想ですが、それは非常に理解しやすいかもしれませんが、それで浄土教の問題が全部解決するかどうか、むしろそこから余りがいっぱい出てしまふのではないかというようなことも思ひています。そういう意味で、先生の私にご質問をかけたことについて、私的な処方箋を持っているわけでも何でもないのですから、もっと学際的に、こういう問題に意見を出しあうことの必要性をご指摘いただいたというような形で、まことに役足らずですけれど。

恩田 ありがとうございます。先生がおっしゃった自覚ということですが、私はやはり宗教体験が非常に大事だと思ひます。ただし、問題は、独断的なものではなくて、これは普遍的なものです。だから祖師方とか諸仏も証明されるようなものでなければいけない。それから、周りの人もそうだと申ひます。やはり体験しないとわからない場合があるのです。天と地との差がある。そういう問題があるわけです。しかし、それをシェアする、分かち与えるためには、やはり議論、数学の研究、これをつかりやるということですね。若い人のためにそうなので

す。要するに、われわれ自身が宗学の研究をしっかりとやることによって、若い人に説くことができるのです。

もう一つは、自分の宗教体験があつて、自信があるわけです。それが独断的であつてはならないためには、宗学、数学の、あるいは宗教学の研究をしっかりとやる。

もう一は自覚体験です。これは何といつても第一なので、これは私の心理学の面でも、科学的かというのは、自覚も科学的対象になり得るわけです。しかし、問題は、まだ科学的にはなり得ない自覚の問題がある。それが一つの難しい問題で、それをできるだけのみなが共有できるもの、科学的に研究できるものという方向へ持つていく努力が必要ではないかと思ひます。どうもありがとうございます。

司会 ありがとうございます。教学と体験というのは、これは離せられない問題だと思ひます。たぐきさんのご意見・ご質問を頂戴していますが、時間の関係上、すべてというわけにはいかないかもしれませんが、ご容赦お願ひいたします。

続きまして、質問・ご意見ということではごさいません。光明寺の御前様、藤吉慈海台下がお見えてごさいませ

すが、内容について、こちらで読ませていただきます。

「法然上人の極楽観については、よほど注意して味わうべきではないか。地獄と対立する極楽というようない理解の仕方は、一考を要するように思うが」という内容でございませうが、台下、お願ひいたします。

藤吉 拝聴いたしましたして、たぐきさん申し上げたいことがあるのですけれども、時間もごさいませぬので、ちよつと感じたことだけを申したいと思ひます。

去年も同じような題目で、何かシンポジウムをやられたそうでありませうが、きょうのお三方のご発表を聞きまして、いろいろと教えられたり、感じさせられたりいたしました。私ども、浄土教、特に、法然上人の御教えを受けておりますわれわれはどういうふうにか考へるかという、例えば法然上人は極楽というようない言葉は余りお使ひになつてはいないのではないかと思ひます。地獄と極楽というのは、『往生要集』のなかには盛んに説かれております。日本人はその影響の下に、地獄と極楽というようないことが受け取られて、現代の布教をなさつておふたりの方々は、現代がまさに地獄だと、それと対照的な形で極楽ということをやつと現代人はわかる、とい

うように実感をもっておっしゃったのであります。なるほどそうかと思つたのでありますけれども、法然上人は、浄土という言葉を使われましたが、極楽ということは余り言っておられないというところに、法然上人の仏教に対する基本的な考え方があってはないかと思ひます。

法然上人は非常に批判的な方で、なるべく沈着していらつしやいます。親鸞聖人はその点で深められておりますけれども、例えば、『女人往生集』のことも、女が男に生まれ変わつて往生するという変成男子ということを言つておられますが、法然上人はそんなことはほとんど触れておられない。そして女人はそのまま往生するというようにしておられて、変成男子というようなことは言つておられません。天親菩薩の『浄土論』を、三経一論といつて、非常に大切にされたけれども、そのなかに書いてある「女人及び根闕、二乗との種は生ぜず」というふうな言葉に対しては、全然ふれておられません。世観菩薩は、「女人及び根闕、二乗は極楽に往生できない」と書いていらつしやるのです。それはその時代の思想の下に、世観菩薩がお書きになつたであらうと思はれるけれども、そのことは法然上人はオミットして、全然触れていらつ

しやらない。そういうようなところに、またわれわれの祖師の仏教に対する考え方が非常に選択というか、批判的精神を持つておられたことを、私どもは考えなければなりません。現代人にうけるから、あるいは現代の人々は地獄だからして、その反対の極楽という説き方をしているかどうか。たとえうけたにしても、極楽教ではなく浄土教でありますから、そういう点では、古い教義をわれわれはよほど注意して読まないで、法然上人の深い御心を受け取りきつてはいない、受け取つてはいないといつてもいいのではないかと思ひます。われわれの先輩たちが勉強してこられて後に残されましたことは、私なども十分わかりませんが、先輩の方々といえども、本当によく法然上人のお気持ちを生かしていらつしやるかどうかといふことは、やっぱり批判してみなくてはならないと思ひます。

この頃、『中外日報』の社説を担当しておりますから、温故知新というものを原稿に書いて送りました。温故知新というのは論語のなかの言葉であります。古きを温めて新しきを知ると書いてあります。私どもは、古い法然上人の言葉とか、あるいは古い教えといふものを、本

当に温めていないのではないか。温め方が悪いと、その精神を殺してしまうのです。温め方が悪いと、卵は孵化しないのです。法然上人や、あるいは經典の言葉にしても、よほどよく温めないといけないと思います。私どもは、新しきを知り得るような温め方、そういう勉強の仕方、味わい方をしていかないと、古いものを本当に現代に働かせることはできないと思うのです。

だから、法然上人は偉い方であったに違いないのですが、何といても八百年前の方であります。仏教という教えは、その時代の人々を本当に救うような、新しい教えとなつて、創造していくような本質を本来持っていた宗教であります。例えば七覚支のなかの捨覚支が尊重されるということは、やはり教えというものに妙にこだわつてはならない、そういう教えが仏教の教えでありますから、法然上人がこうおっしゃつた、親鸞聖人がこうおっしゃつたということであっても、それをただ単に繰り返しているだけでは、法然上人や親鸞聖人の精神を、現代において生かしているとは言えないのです。私どもはそういう点を深く反省しなければならぬし、そういう点で、椎尾先生とか、山崎弁栄上人という方を、

異安心だというふうに私なども批判したこともあります。が、現代にふさわしい形で、新しい教え、新しい表現をとつて、新しい教本をつくつて、現代人を導いてくださったふたりの方々は創造性というものをもつて、法然上人の本當の魅力的論旨、あるいはお釈迦様の本當の精神を生かしていった方であると思わなくてはなりません。

浄土宗の教えといえども、単に祖師の言葉を繰り返して、それで満足して、それが立派なものだという考え方を反省しなければなりません。仏教の考え方からいうと、温故知新、昔の人の言つたことを本當によく温めきつていない、そうして現代の人々を救い得るような御教えというものを、むしろわれわれは創造していかなければならない。それが仏様の仏教という教えであると、私は今日になつて思うようになりましたから、今日のシンポジウムや、昨日のシンポジウムなどにおきましても、現代にふさわしい創造性を持ち得るものが、仏様の教え、仏教という宗教の一つの特色であると考えて、椎尾先生や、あるいは弁栄上人のご努力というものは、法然上人が現代において言いたいことを、両上人たちがおっしゃつてくださったのです。もちろん、批判もありますが、そう

いうような創造性を、われわれも持ち得るまでに至らないと、本当に法然上人の御教え、あるいはお釈迦様の、あるいは仏教というものを、現代において生かすことにはならないのであろうと、最近しきりに思うので、ちょっと自分の意見を述べさせていただきました。大変失礼いたしました。

司会 ありがとうございます。やはり、どこまでも精進と体験を重ねながら、見識よりも中身を本当に深めていきたいと、こういう気持ちで頂戴いたしました。

それでは、続きまして、布教師会の理事長でございます松田等照先生から、お三方の先生に質問といたしますか、ご意見がございます。

「私どもは、日常的に三部経を通して、弥陀仏とその往生について読誦しておりますが、これは説かないのですか、説けないのですか、説かなくてもよいのでしょうか。」

松田 えらい失礼なことではございました。質問状を出すつもりではなかったのですが、お手洗いへ行っております、ちょっとお聞きしたいと思ひまして、急いで質問状を出したわけでございます。

ただいま藤吉ご法主の題につきまして、ちょっとご意見を賜りまして、昨年が続いて、同じ題で行わせていただいたのでございますが、極楽ということにつきまして、いささか私自身、もう一度考え直してみなければいけないと感じましたので、お礼を申し上げる次第でございます。

この題につきましてでございますが、極楽ということの前提になるものは、私どもにとりましては、あくまでも往生ということでございます。この往生につきまして、願往生と申しまして、願生身というものが大前提になってくるわけでありまして、そのために、われわれは、例えば五重相伝におきまして、現状におきまして、とくとそのことについて精進をいたしまして、願生身を誓って、お念仏の世界に入っていくということでございます。そうしたら、この目標なりにつきまして、元祖様が、ご自身の様々なお言葉の前提となりますものが三部経でございますまして、あの膨大な釈尊のお経のなかから、わざわざ『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』をお選びになった。これが浄土宗の所依の經典であるというようにお定めいただいておりますことは、お互いよく承知して

いることであります。そうであるならば、ただいまご法主が、温故知新ということもおっしゃいましたが、あくまでも私どもの日常的なものの考え方なり、あるいはまた布教活動におきましても、この三部経の阿弥陀様、そのご誓願、そしてまた本願成就されました極樂浄土、それも単なる抽象的なものではなくて、極樂浄土を子細に様々な形で説いておいでになるのであります。そしてまた、その極樂に、われわれ凡夫であるお互いが往生できるためにはどうするのであるか、どうあるべきであるか、ということを考えに置きまして、また懇切にお説きになつてあるのでありますけれども、この三部経の心と申しますか、三部経の御教えというものが、常にわれわれの布教活動のなかにおきまして、その根底にこれがありまして、その面に滲み出てくるような形で現代と対応して教化していくことが、いわゆる浄土宗の布教のあり方として、いちばん間違いない、そしてまた正鵠を得て、現代人を自然に導いていくことのできるものであらうと思ひます。現代人であるという我が、どのような形で極樂を、念仏をしながら拝ませただけか、そしてそれを現代の人たちのためにどのように対応して説いていく

かが、不可欠なことであらうと思つてあります。

先程来、先生方のご意見をいろいろとお伺いいたしまして、私なりに感じさせていたでいて、先生方がそれなりにご苦勞されて、またご自身の深い学究と、そして日常的な、僧侶としてのご精進のなかから、非常に貴重なお話をいただきました、ありがたく思つておりますが、言うならば画龍点睛の意味におきまして、先生方がもう一度この極樂をどのように説くか、極樂の門口までなく、もちろん極樂の門口にたどりつくということは、既に極樂を拝んだ心境でありましょう。念仏する者は、既にお浄土に自らの往生の花を咲かせているんだ、このようなお印もいただいておりますけれども、もう一度、一言で結構でございますので、先ほどのお話の上に、いわゆる画龍点睛の意味におきまして、お言葉添えていただいたらと思ひまして、あえて質問をさせていただきます次第でございます。

司会 それでは、どうぞ。

藤本 まさに画龍点睛とおっしゃいましたとおりのことだと思つてですが、画龍点睛がどうもできそうになく、申し訳ございません。やはり浄土三部経に説かれてある

ことは、ここで意見として申し述べましたように、そこからの出発であります。その代わりに、やはり、われわれ現代人のものの見方、考え方がありますから、そのところがどうなるであろうか、という問いから、私は意見を出しました。その場合の理解の仕方は、法然上人のご精神にのっとった三部経の理解がいちばん大事なことになるかと思えます。そうしますと、法然上人のご理解というのは、私は必ずしも極楽の説明ということだけが課題になっているのではなくて、平生からの念仏を通じた心境も非常に大事なことになるかと思えます。そういう意味で、やはり極楽だけで説くということではなく、私どもは自行自ら念仏をしながら、その心境のなかで精一杯説いていくことしか、いまところ、未熟な私には考えられません。

佐々木 前に、私がまだ僧侶の方に中心になっていなかったときに、ひとつ会社を経営していたわけですが、きょう、こちらにも来ていらっしやいます水谷先生の養成講座で、初めて、あ、仏教を学びたいな、という気持ちで起きました、それから、増上寺の松島先生の『阿弥陀経』の講座にずっと通いました。また『無量寿経』の講

座にも通わせていただいたわけがございます。そしてそのとき、経典というのは本当にすごいなという実感を随分得させていただいたし、またそのころ、私もいろいろなところに問いかけてくることもあったわけがございます。そういう観点から、やはりこの浄土三部経というなかには、本当にお浄土の香りが詰まっているわけですから、そのときそのときで、いろいろな香り、また響き、または救いというものが、私どもの生活の実感としてくつるか三部経を説きたいなというようなことで、恐れ多くも、大分前から自分のところの法話会で『阿弥陀経』を取り上げ、または『無量寿経』を取り上げ、四十八願を取り上げて、お念仏のなかにそれを説いているわけがございますが、非常にありがたかったのは、自分でも説けるということがございます。三部経の精神を全部説けるとは申しません。でも、そのときそのときに感じたことを、その経典の文字に照らしまして、または経典の意味するところの真実みたいなものに触れることができるというのは、自分程度でも非常にありがたい経験でございました。そういうものがバックボーンになって、いわ

ゆる現代人、または直接的な今を乗り切っていけないような人たちに、極楽の存在が説けるようになったのではないかな、という気がするわけでございます。そういうのもやはり、浄土の風光というもの、その風光が直接自分の生活のなかに伝わって、そして人が救われていくわけでございます。直接的には、浄土三部経をいつもバイブルとして皆様にお伝えするわけではございませんが、そこに流れている真実からくる救いという点で、法話もいけるのではないかと気がするわけでございます。

樹下 大変痛いところを突かれておられるわけでございますが、われわれが所依の經典としております三部経、並びに温故知新といえますか、原点に返ることは、大変に大事なことでございます。しかしながら、反論するわけではございませんが、元に至らなければいけません。その元を中心に広げていかなければいけません。現在の布教のあり方、あるいは今から二十年以上、あるいは四十年以上前の布教のあり方を見ますと、「現代に極楽を説くか」という題も問題がございます。「現代にいかにな念仏を勧めるか」という題で結構だと思えますが、余りに学問的な、あるいは原点的なことを出し過ぎたきらい

があつて、大衆に果たして受け取っていただけただろうかという悩みを、私はずっと住職をしながら思つてまいりました。私が言っていることは間違いかもしれませんが、しかし、念仏を勧め、苦惱を救うのが法然上人の根本的命題でございましたならば、人に受け取られるような薬に書き直して飲まさせなければ、どんな立派な薬であつても、それが消化しきれない薬であつたならば、病氣は治らないと思ひます。だから、幾らでも批判を受け、いろいろな迷いがあつたときに、根本に帰つていかなければいけません。浄土宗、あるいは仏教というものが、どちらかというところ、余りにも真面目過ぎて、衆生済度というほうに思いやりが欠けていたと思うわけでございます。私は簡單明瞭といひました。簡單明瞭にすれば、いろいろ誤解を生むところがございます。あるいは、私が予科に入りましたときに、当時の予科部長であつた高神覺昇先生が、いちばん初めにこんなことをおっしゃつたことを強く覚えております。「眞実、眞理というものは、普遍妥当性がなければいけない」。今もつてそうだと思ひます。だれにでも通用し、だれにでも納得できる、そのために、自分も納得できる、そして人にも訴へることが

できるものを探りて探す、その手探りで探す途中で、常に温故知新でもとに帰らなければいけません。「おまえ、三部経は説けるか。三部経の精神が理解できるか」というと、はつきり申し上げてきておりません。しかし、何とかして、今の念仏、そしてわれわれが目指しているものを、多少でも人に伝えようとする熱意を現代にいかにかかすかということが、今日の問題のような気がします。常に自己反省しながらやらなければいけない、という気持ちでございます。

司会 ありがとうございます。まだ、お三方の用紙を頂戴しておりますが、時間も大分経過しております。しかし、一応読み上げさせていただきます、なお意見がございましたら、一言添えていただくという形にさせていただきます。

福島教区の名木橋秀全先生から、藤本浄彦先生へ。

「極楽世界にいらっしやる世自在王如来と法蔵菩薩との関係、心の世界では一つですか、または別ですか。釈尊と阿弥陀如来との関係はどうなのですか、というお年寄りの質問に、どう答えたらよろしいでしょうか。」

埼玉教区の斉藤隆玄先生から、藤本浄彦先生へ。

「白隠禪師といえば江戸時代の有名な高僧である。この人のところに、ある日、ひとりの武士が訪ねてきた。

『禪師、地獄と極楽はどこにあるのか』。武士は白隠の名声を聞いて、この僧ほどの程度の力量があるのかと、ちよつと試してみるつもりでいたが、禪師は、『地獄、極楽のあり場所を心配するなんて、おまえはへなちよこ武士じゃのう』と、禪師は暴言を吐く。武士はむつとする。

それに対して白隠は、武士を愚弄する。武士は刀を抜いて、満身怒りでいっばいとなる。禪師曰く、『それが、ここが地獄じゃ』。武士は気付いて、肩で息をしたから、武士は禪師に詫びた。禪師曰く、『そのところが極楽である』。以上、極楽は私たちの心のなかにある。心の持ち方によって、ある一つのところが地獄にもなり、極楽にもなる。私たちが意識することなく呼吸しているが、その一瞬一瞬が念仏である。声を出している、お念仏しているところが極楽であると思うが、『阿弥陀経』の「我見是利故説此言」そのものであるが、それは難信の法である。『極楽はありやいなやと人はいう、おのがすみかをおざりにして』、藤井台下のお言葉、以上についてご高見をお願いしたいと思います。」

最後に、静岡教区の北山良祐先生から、ご意見として。「三先生のお話をありがたく感謝して拝聴いたしました。それはそれとして、現代の理屈っぽい世の中、理屈を述べることも一法と違って、『阿弥陀経』序文の終わり、『無有衆苦但受諸樂故名極樂』を説明するとよいかと思ふので。」

と頂戴しております。せっかく寄せられておりますが、五分前ということでございます。司会者の進行が悪いわけでございます、ご容赦願いたいと思います。

最後に、助言者の三枝樹隆善先生から、一言、感想なりご意見を頂戴したいと思います。よろしくお願いいたします。

三枝樹 ご無礼いたします。全く予定されていなかった助言者に突然並べていただいて、心は騒いでいるわけでございますが、ただいま、三先生の貴重なご意見と、それからまた、問者の方のご意見を拝聴させていただきました。私自身、実に痛切に感じ取ったわけでございます。この問題は、昨年から引き続いているということでございます。結論を出すほどのものではないということ、を承っていたわけですが、きょうの視点は、「極樂」とい

う言葉自身の表現が一体どうなのか、というようなどころに絞られていったのではないかと思います。浄土はいろいろと表現されておりますが、今、聞きながら、善導大師の表現を思い浮かべてみました。もちろん、浄土は穢土に対する言葉であって、極樂は、恐らく地獄に対する言葉であり、言葉自体は相対的なものであると思うのですが、極樂世界は、やはり相対的な世界ではなしに、宗教的な絶対の世界でなければならぬと思います。そういう点を藤吉先生は非常に気にして発言してくださいではないかと思ひます。それはそれとして、善導大師には、もちろん極樂という表現があり、あるいは安樂世界、安養世界、快樂世界、あるいは宝国、あるいは涅槃の都、いろいろな言葉で示しておられるわけですから、今日、浄土を極樂として表現されるのも、一つの教化の方法に違いはないと思っております。

そして、私がいいますのに、理論的な面で藤本先生に意見を発表していただきまして、まったくこの三点に絞られたということは、いろいろな見解だと思っております。余り時間がないので、そういうものに私自身が触れようとは思いませんが、最後のところで、極樂を表現

するのには、本堂の莊嚴をもって極樂を感じ取る、感じ取らせる、とおっしゃったところに、私は非常に興味を持ちまして、考えさせていただきました。昨年も、最後に坪井先生が、極樂は本堂による、本堂なら極樂ではないか、とおっしゃって終わりになったような気がします。

そういうような点を考えて、そこへ視点を持っていきますと、浄土宗の本堂が浄土教であるかどうか、ということが気になってまいりました。

たまたま私のことを申し上げて申し訳ございませんが、一昨年、本堂改築に取り組んでおります。そのときに、浄土宗の本堂を建てるわけですから、もちろん、中心は阿弥陀仏でなければなりません。幸い、私のお寺は、西のほうに東向きに建てられてありますので、非常に理想的に建っているわけですが、なかの莊嚴を見たときに、これはちょっとおかしいのではないか、ということに気が付きました。浄土宗の本堂ですから、阿弥陀様が祀ってあるということは間違いないです。どんなお寺でもそうです。しかし、浄土宗の本堂といわれるものが、浄土堂であるのかないのかということになりますと、大きな疑問を持ってまいりました。本堂は儀式を司る場でもある

し、ご先祖を祀る場でもあるということで、今日のような本堂が建っていると思えますが、浄土堂が浄土宗になような気になってしまつて、いろいろと考えてみたのです。そうすると、知恩院は御影堂がありますし、阿弥陀堂がある。阿弥陀堂があるから浄土堂でいいのじやないか、というような考えもできますが、私は、阿弥陀堂と浄土堂というのはやはり違うのではないかと思つたのです。どう違うのかいろいろ考えてみました。が、どうもその違いを見出すことができませんでした。しかし、今は、阿弥陀堂は阿弥陀様をお祀りしているお堂である、浄土堂は阿弥陀様がそこに存在される。存在によって阿弥陀堂と浄土堂を区別してみたわけです。

そうしますと、これはどのような莊嚴をしていけばいいのかを、まず考えました。いままで本尊様は、立派な宮殿のなかに納められてあります。お堂のなかに宮殿をつくって納めてあるわけですから、これは当然祀ついているという感じ。そこに存在されるという感じが薄い。したがって、祀っているものだから、お姿の全体を拝むことができません。存在されるということは、仏様のお姿そのものが、われわれの目の当たりに拝むこと

ができるものでなければならぬと思います。善導大師は、常に、いろいろな法要をされておりますが、あの『法事讃』のなかに、「道場を莊嚴して、仏像を西のほうに安置して、心を清浄にして務めなさい」ということが教えられております。私は、それが浄土堂でなければならぬと思います。

考えてみると、徳川時代からの浄土宗の本堂形式が、浄土になっていないのじゃないか、祀っているというだけの場になっていると思います。そうやってきますと、二十一世紀に向かって、現代の人たちが今までの本堂をどのように感じ取っていたか、ということは自明の理でございまして、私がここで言わなくてもいいと思います。寺に魅力がない、本堂自体に魅力がないのです。本堂に魅力を持たせるといふことは、やはり極楽世界を醸し出す阿弥陀様がそこに存在されるという姿が莊嚴されなければ魅力がない。そういう点で、これは浄土宗だけではなしに、昨日も『中外日報』を汽車のなかで見えておりましたら、曼荼羅浄土を表現しようと高野山の寺を新しく建てて、イベントをされるというような記事が載っておりますが、そのように、皆なんとかして表現したいと

努めているわけでございます。自分の本堂が、極楽世界を表す浄土としての浄土の表現に基づいてできているのかどうか、一遍反省してみる必要があるのではないかと、いうことを感じさせていたしております。時間がございませぬので、そういう点だけを指摘させていただいて、終わらせていただきます。大変勝手なことを申し上げて、申し訳ございません。

司会 ありがとうございます。「現代人に極楽をどう説くか」というテーマは、今回だけに限らず、日々の勤めのなか、生活のなかに、自ら問いかけ、仏様に善知識に道を尋ねながら、一生涯問いかけながら進んでいく問題だろうと思います。いかんせん若い私の不手際で、三生には、後半、時間の都合でご質問をお受けできなかつた不明を深くお詫びしますと同時に、最後に、一緒に、同入和合海の合掌、同唱十念をもちまして、この会を終わらせていただきます。ありがとうございます。

あとがき

浄土宗総合研究所布教研究部長 板垣隆寛

現代我々が浄土宗の僧侶として考えなければならない事の一つに、一般の人々は浄土宗の現況を如何に見、考えているかという事です。寺に参詣に来る大方の人は先祖乃至肉身を祭

る霊及び墓に対してお詣りに来るのであって、本尊様の尊さ、宗祖の教えに感謝し、念仏の有難さを感じて来る人は何人であろうか。念仏信仰の説き方がこれによいのか反省が必要であらうと思うのです。

現在我が国には十数万の宗教があるといわれている。その殆どが新興宗教であり、病気が治る、運勢が良くなる、立身出世する、お金に不自由しない等々の現世利益を説いている。まさに限りなき欲望を満たす事が主の様に感じる。これを信じる人々は浄土の教えを如何に見ているのだろうか。未来往生を説く浄土宗としてこれらのことを含め一考を促したいのです。

仏法の法、法律の法ともにサンズイ偏に去ると書く。最上川という川は永久にあるが、流れる水は絶えず去る。宗祖の教え

の真理は永久不変であるが、その表現は時代として共に変わる場合がある。いずれにしても念仏の教えこそ最勝にして最高の教えである事を力説していくことが我々の務めです。

ここに布教研究所報第六号のあとを受けて、平成元年度布教研究部の研究活動の一端をまとめ、「教化研究」第一号として発行することになりました。御参考になれば幸甚の至りに存じます。

平成元年度浄土宗総合研究所布教研究部名簿

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内

電話 03-436-3351 (代表)

分室〒603 京都市北区柴野花ノ坊96

仏教大学浄土宗文献センター内

電話 075-491-2141 (代表)

部 長	板垣 隆寛	〒995 山形県村山市楯岡晦日町4-41	得性寺	0237-53-2962
主 任	宮林 昭彦	〒232 神奈川県横浜市三春台139	大光院	045-241-7676
	三枝樹隆善	〒660 兵庫県尼崎市寺町6	甘露寺	06-411-3262
研究員	岡崎 覚豊	〒742 山口県玖珂郡周東町中市1404	浄泉寺	08278-4-0505
	羽田 恵三	〒612 京都府京都市伏見区桃山町西町24	大善寺	075-611-4966
	西岡 信孝	〒639 奈良県大和郡山市車町5	西方寺	07435-2-5401
	長谷川 昌光	〒244 横浜市戸塚区平戸町392	光安寺	045-822-3236
	市川 隆士	〒144 東京都大田区東糀谷3-1-6	西念寺	03-742-3487
	佐藤 雅彦	〒113 東京都文京区向丘2-17-4	浄心寺	03-821-0951

研究部員

北海道	石割 顕昌	〒049-07 北海道檜山郡上ノ国町字石崎54	西迎寺	01395-9-2003
東 北	長尾 隆道	〒030 青森県青森市栄町1-3-19	阿弥陀寺	0177-42-1750
関 東	土屋 正道	〒105 東京都港区芝公園2-2-13	観智院	03-431-1450
東 海	山口 隆誠	〒414 静岡県伊東市宇佐美(山田)400-1	浄信寺	0557-48-9144
北 陸	佐野 純雄	〒919-22 福井県大飯郡高浜町塩土1-96	浄国寺	07707-2-1869
近 畿	小田 芳隆	〒616 京都市右京区北嵯峨北之段町3	直指庵	075-872-5378
中四国	漆間 宣隆	〒709-36 岡山県久米郡久米南町里方808	浄土院	086732-8-2364
九 州	阿部 信之	〒870 大分県大分市王子新町7-1	安養寺	0975-43-1522

編集後記

- 浄土宗総合研究所の『教化研究』第一号をおとどけいたします。
- 『教化研究』は旧浄土宗布教研究所が『布教研究所報』として第六号まで発行してきたものあとを受けて、総合研究所布教研究部が編集したものです。
- 『五重相伝について』は、十二月の集中研究会の折に大本山善導寺御法主藤堂俊章台下よりご講義いただいたものを収録いたしました。
- 研究部員の研究成果報告は、平成元年度の浄土宗教学布教大会の一般研究発表で発表したものの要旨です。
- 教学布教大会一般研究発表は、平成元年度教学布教大会での研究発表の中から、特別寄稿をしていただいたものを掲載いたしました。
- 意見発表「現代人に極楽をどう説くか（Ⅱ）は昭和六十三年度教学大会に続いて平成元年度も同一テーマでパート（Ⅱ）として行われたものを、講演テープにもとづき掲載いたしました。
- 今年度は浄土宗総合研究所発足初年度にあたり、布教研究部では旧布教研究所からの移行期間として、布教師会八支部代表の研究部員を中心に昨年末の活動を継続してきました。次年度は新メンバーで新しい課題に取り組む予定です。
- 布教研究部の活動報告は浄土宗総合研究所報に掲載いたします。

教化研究 第1号

平成2年3月31日 発行

発行者 浄土宗総合研究所長
竹 中 信 常

編集者 浄土宗総合研究所布教研究部長
板 垣 隆 寛

印刷所 東京都千代田区 共立社印刷所
神田神保町3-10

発行所 浄土宗総合研究所
〒105 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内

浄土宗総合研究所 蔵書

3673-17-B

教化研究

教化研究

1

